

Wasteful grace is moderate and bring up environment and a human being

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M **循環**
→もったいない
他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O **共生**
→おかげさま
人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H **抑制**
→ほどほどに
欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

M・O・H
通信

17号
2007
Autumn

M・O・H communication



「M・O・H」のマーク = 牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

3周年記念号

The third anniversary memory

特集：【地域を元気にする秘訣を探る】

辻花耕

大津市伊香立の里に咲くソバの花

2007 / Autumn



contents

【3周年記念号】

目次——「地域を元気にする秘訣を探る」

M・H対談 内の目、外の目で行政を考える
できる行政って、何だろう？ 山田 朝夫&山口 美知子……………3

シムート・シムート
ふれあい 第六回『学級新聞』 中井 二三雄……………12

M・H対談 いろいろな形の「利益の「環」を…
企業と町づくり 岡村 博之&高田 友美&竹岡 寛文……………13

M・H対談 大阪「アトム共同保育園」の子育て、親育て
「子どもの時間」を奪っていませんか？ 山本 健慈&市原 悟子&今関 信子……………23

M・H対談 次の世代が希望を育てる社会へ
循環型社会への「仕掛けづくり」 高月 紘&森 建司……………33

M・Hレポート—1 琵琶湖という小宇宙から見る地球温暖化、資源の枯渇問題など
琵琶湖の水が教えてくれる地球環境問題 ……………34

〈対談〉松井 三郎&山崎 隆

M・Hレポート—2 集中から分散
エネルギーピークに日本はどう備えるか もったいない学会 石井 吉徳……………49

M・Hレポート—3 「アイトワ」の暮らしにヒントを求めて
意識を変えること、未来への支度 アイトワ 森 孝之……………58

寄稿 「過去には感謝、現在には信頼、未来には希望」を社是として

新九州の六十年 森 建司……………65

M・Hレポート—4 「手に職を持った百姓」の自立を支援
「湖北職人村」来秋スタート 清水 陽介・松本 茂夫 ……………74

M・Hレポート—5 学校司書という仕事
子どもに届け！『本の力』 学校図書館を考える会 北村 幸子……………81

フォトエッセイ

沖島 辻村 耕司……87

読者座談会 私たちにできること

「MO・OHの会」の可能性 ……93

MOH川柳選手権

上位3作品の作者インタビュー ……65

MOH通信執筆者懇談会

環境のシンボル「MOH(牛)」が、
一層活躍する社会へ ……105

エネルギー供給の変化、
日本はどう備えるか、地方は？

天野 治 ……111

—安曇川流域・森と家づくりの会—

地域の山とつながる住まい 清水 安治……113

トンボ 三山 元暎 ……116

〈商家の家訓の話 第三回〉

矢尾喜兵衛の所感(一) 末永 國紀……117

藤樹先生に学ぶその5 井上 昌幸……121

「梅ジュースを口にするとき」 今関 信子……123

家の悲鳴が聞こえます 畑 裕子……125

〈ドイツだより—6〉

アウグスブルグから 原 修子……127

MOHECOTOURISM—5

日本百名山の効用 檀上 俊雄……129

生命のつながりを考えませんか？(漫画) オノ ミユキ……133

善意の愚か者が寄つて

世界を崩壊させる 内藤 正明……137

MOH川柳 ……139

講演日記 ……142

イベント紹介 ……143

MOHニュース ……145

本の紹介 ……148

編集長のつばやき つじむらこことみ……149

MOH通信概要 ……150

「編集長の提案」

—電力・石油を必要としない
生活道具と水源の確保を—

今回の地震でエネルギー供給の脆弱さが、浮き彫りになりました。私たちは“オール電化でお財布が軽くなる”を信じていいのでしょうか。“夜でも明るい都心の生活習慣”と、“ネオンサインでひきつける商法”は必要なのでしょうか。エネルギー源を分散し、危機に備える工夫が必要でしょう。プロパンガス(ガスレンジ)、灯油(石油ストーブ)、まき(風呂)、炭(囲炉裏)。日本固有の道具を見直してみてもいいでしょうか。あわせて、水源の確保と汲み取りトイレの重要性も感じました。つまり、田舎暮らしは危機に強い!



●対談

山田 朝夫 vs 山口 美知子

愛知県安城市 副市長

滋賀地方自治研究所センター 理事

〈リーディング テーマ1—行政をかえよう〉

leading theme 1—I will change administration

できる行政って、 何だろう？

内の目、外の目で行政を考える

地域が求める行政の働きと現実のギャップは、どうすれば縮めることができるのでしょうか？ そのヒントを求めて、総務省のキャリア官僚で、現在、愛知県安城市の副市長を務める山田朝夫さんと、滋賀県職員の山口美知子さんに対談していただきました。

■進行／MOH通信 編集長 辻村 琴美

■愛知県安城市役所

■2007年5月17日

「お役所仕事」を招くのは、 評価と出世の仕組み？

辻村 今号では「地域を元気にする秘訣」を、様々な角度から探っています。その中で、行政の存在は一番大きなファクターだと思うのですが、私たち一般市民は、「お役所仕事」や「縦割り行政」とよく言うように、行政に対して不満足な部分もあるんです。そこで今、私が「行政らしくない人物」と注目している滋賀県職員の山口さんと、幾つかのメディアで「キャリア官僚の変り種」とも伝えられる山田副市長さんに、行政の問題点や地域再生に向けた役割等について、お話をしたいと思います。

山田 行政の人らしくないとのこと紹介ですが、そうなんですか？ そういう人がなぜ行政に就職されたんでしょう。

山口 学生の頃に、漠然とですがお金儲けを前提にした仕事は、自分に向いてないんじゃないかと思ったのがきっかけです。行政職に就いて、仕事のやり方や考え方など、違和感を感じることは沢山ありました。周りからは『行政に向いていない』と言われることが多かったの

ですが、たまにはこんな人間も居た方がいいんじゃないかと思っています。今年で10年目ですが、立場的には失敗しても挑戦することが、まだ許されるボジションだと思いますので、たとえ小さなことでも、自分が良いと思うことに一生懸命、取り組みたいと思っています。

山田 そうですか。じゃあまず、滋賀県庁で働く人たちにとって、役所の仕事とは何だと思われれますか？

山口 とても難しい質問ですね…。

山田 何だと思っている人が多いと思います？

山口 そうですね…。仕事の見直しを進めれば、かなりの人材が余るかもしれません。しかし、やらなければならぬことは沢山あるんです。今は過去からの慣習的な仕事に手をとられすぎの部分があるように感じます。

山田 辻村さん、普通の企業はどうなんですか？ 以前からやっていたという理由で、あまり必要のない仕事をずっと続けるものですか？

辻村 企業にもよりますが、企業は人を使う場合、その人の能力が時間給にしていくらかという見方をします。2

千円の人が千円の仕事をするのであれば、その仕事は止めるでしょうね。

山田 辻村さんの会社は包装資材の販売を手がけておられるんですよね。例えば、売れない袋があれば、次からその袋は仕入れませんよね。

辻村 もちろんです。

山田 役所はどうして、あまりやる必要のない仕事を続けるんでしょう。

山口 自分の担当でこれは必要がないと思った仕事は、やめるなり、改善した上で続けるなり、そういう提案を上の人間に働きかけてきました。最初は『やめてどうする』と相手にされませんが、1年間かけて話し合い、廃止になった仕事もあります。大切なのは、そういうことをドンドン話し合うことだと思います。放っておいたら、忘れ去られたようにずっと続けられるかもしれません。

山田 そこが重要な点で、民間企業では考えられない話ですよ。そんなことをやっていたら会社は潰れます。では、なぜ行政だけがそんな仕事のやり方なのかというと、多分、売れた売れないという結果がハッキリしないから、というのが一つ言えると思います。

山口 事業評価ですね。数年前から滋賀県庁でも始まりました。

山田 行政は、民間がやっても商売にならない仕事を引き受けています。儲けるためにやっているのではないので、評価するのが難しい点と、もう一つは、その人の出世が仕事ができるできないに余り関わらない点ですが、行政を特異な体質にしているんじゃないでしょうか。

山口 そうですね。仕事の評価も民間企業のそれとは少し違う気がします。

山田 大企業になればなるほど、行政に近くなっているんですが、上司に気に入られた人が出世しやすいという感じかな。

辻村 高校や大学が同じだからとか、後輩だからという理由ですね。

山田 ええ。するとそれがずっと再生産していくんです。だいたい似た系統の人っているじゃないですか。そういう人たちは好みのタイプも似てるんです。だからよく似た感じの人の系譜ができる(笑)。でもね、好みの人であっ

てもミスをする、その人を引き上げられないんです。ミスをしないようにするにはどうすればいいかというと、前の年と同じにしておけばいい。結果が同じなら、成功はないけれど失敗もない。そういう仕組みじゃないかと思うんですが。



行政がプロジェクトを立ち上げることの問題点

山口 以前、当時の先輩に『行政の仕事はあなたが今やっている仕事を、次に誰が引き継いでも続けられないと駄目だ』と言われ、違和感を感じたこと

があります。できれば私は、自分がここにいたからできたと思えるような仕事をしたいです。この考え方が正しいのか、まだ答えは見つけられていないのですが、それは、これから学んでいくことだとも思っています。

山田 そこは微妙なところでね、現在の山口さんのポジションなら、それでいいと思うんです。でも、確かに個人技だと、その人がいなくなると同時に無くなってしまうことがあります。それがかえって「悪」になることもある。私も今まで自分でやって、反省していることが沢山あります。

山口 それについてぜひ、お聞きしたかったのですが、前の勤務地で地元の木材を使った家づくりのプロジェクトを手がけました。その時、まわりから散々言われたのが、『行政がプロジェクトを立ち上げては駄目』ということです。確かにその通りですが、その地域には皆が一つの場所に集まって話し合うきっかけを作る人がいませんでした。それならば、おそろくきっかけ作りが私の仕事だろうと

「私は森林から環境危機を感じます」山口さん

考えたのですが、私たちには異動があります。それまでにプロジェクトから私の色を徐々に消し、中心役を他の誰かに担ってもらうまでが、かなり大変でした。幸い私の異動後も、そのプロジェクトは継続していますが、本当にそのやり方で正しかったのか…。活動支援における行政の役割を、

山田さんはこれまでのご経験でどう思われますか？

山田 非常に本質的な問題ですね。いろんな例があります。いくらやっても上手くいかないもの。当初は上手くいったんだけど、私がいなくなったからポシヤッてしまったもの。中には私が抜けた後も、何とか続いているもの。どうしてアレが駄目で、アレが打ち上げ花火になっちゃって、アレが続いているのか。分析してみると、木を育てる仕事に例えることができます。上手くいったものは、既に種が落ちているんです。だけど、雑草が凄くて芽の出る環境ではない。だから、雑草を刈り取るんです。また雑草が伸びたら、また

刈り取ってあげる。水が足りないようなら、少し水もあげてみる。そうすると木が育ちます。そういうのはOKです。駄目なものは：一番駄目なのは外来種を植えることです。一見合うように思うんですが、地元の土や気候が受け付けないものを移植するのは、



絶対に駄目ですね。それと、ポシヤッてしまうものは、外来種でも在来種でも、相当な無理をして手入れをするわけです。手入れをする人がいるうちは何とかありますが、手入れをする人がいなくなると駄目になるというパターンです。

山口 その地域にどんな種があつて、どんな芽が出始めているのか、それを見極めるのは難しいですね。

山田 まだ芽が出て育つ時期になつていないのに、無理やり雑草を刈り取って育てようとするじゃないですか。そうすると、逆にその種の命を奪うことになるんです。何度も失敗を

しないと、これはいけるとか、まだちょっと待とうとか、カンが働きますせん。私はこれまで数々の失敗をしたので、最近では「こうすればいいのに」と思うことは沢山あつても、無理やりやろうとしなくなりました。

山口 実はこの4月から、これまであまり訪れる機会のなかった地域に異動になりました。いろいろなやりたい気持ちを抑えながら、とにかく地域を知ることが先決だと思つていきます(笑)。

山田 山口さんの歳で自分を抑えられるのは偉いですよ。だいたい若い頃は仕事に自分を入れたがる。自分を表現したいんです。

山口 その通りかもしれません。

「まず、トイレそうじから。身近なことからスタートです」
山田さん



山田 私がずっとそうでしたもの(笑)。その頃に、直接的な言葉ではないけれど、そんな指摘をされました。でも、自分ではいいと思ってやっていたから、言われたことの意味がわからなかったんです。後で、そういうことだったのか…と気づきました。相違やギャップということでは、こちらからすれば意

外なことを地域の人喜んでくれることもあります。でも、若いうちにはなかなか見分けがつかないものなんです。**山口** その点で、私が一番怖いと思うのは、自分なりに地元の意見を吸い上げて何かやろうとしたことが、上手いかなかった場合のことです。地元の人思いまで裏切ってしまうような気が

します。私

たちの仕事は、極端に言えば人との

つながりがすべてです。から、特にそう思うのですが。

山田 本当に納得してくれて、一緒にやってくれた人は、私の今までの経験でほぼ例外なく、そのプロジェクト

が上手いかななくても、怒ってなんかいませんね。ずっとおつきあいが続いています。でも、それは本当に、その地域にとってそれが良かれと思ってやった場合です。自分を表現しようとか、適当に相手をおだてて実績を作ろうと思っ

てやったことは、仮に上手いだったとしても、その後が続きません。

地域の再生—「楽しい」と思える人がやればいい

辻村 山田さんは、前の出向先の白柀市の白柀市で、特産品の開発(※カボスの皮を煮詰め、チョコレートで巻いた「Urusuki(ユースキ)」)を手がけ、広報マンのような活躍もされましたね。行政が地域にとつての刺激剤になるような、そういうアプローチも期待されていると思うのですが。

山田 喜んでもらっているか、悲しんでもらっているかわかりませんが、そんなことができればいいなどは常に思っているんです。でもなかなか難しいですよ。カボスの時は毎晩、カボスの皮を鍋で煮て、魔法使いのお婆さんだ



お二人を拝見していると「私たち、行政の仕事が大好き!」って感じます。

ら8時間を
使わない手
はないと思
うんです。

山口 8時
間どころじゃ
ない1日で
す(笑)。し
かも公用車
も使えて、
名刺もあっ
て、出張す
れば旅費な
んかもくれ
たりして。
大学院より
ずっと恵ま
れていると

など自分でも思いましたもの(笑)。
山口 どうしても自分で動かざるを得
ないことって、ありますよね。でも、それ
で結局、自分も楽しんでるのですが。
山田 お給料を貰って楽しいことがで
きるんだから、これほど有り難いこと
はないんですよ。

山口 私もそう思います。楽しみなが

思いませんでしたか? でもそのかわり、
一日中ずっと考え続けるんです。私の
場合なら、カボスの外皮をどうやって
削ろうとかです。そういうことを
「楽しい」と思える人が、刺激剤の役を
やればいいと思います。成功しても特
許料やマージンは貰えませんが、お給
料は貰っているんですから。

山口 地元の人と一緒に、どれだけ楽
しめるかというのも大切なんです。

山田 まずは、行政の担当者なりが楽
しんでいないと。

山口 でも公務員の仕事には、そう思
えないものが結構あるかな、という気
がします。

山田 もちろん、そうじゃない仕事も
しています。予算を削るとかね(笑)。
一つ言えるのは、歳をとったら、だんだ
んハズレがなくなりました。昔は1割か
2割バッターで、今は打率が上がってき
ました。それは経験じゃないかと思っ
たんです。上手くいくものでも、待てない
とアウトになるものがあるでしょ。一度
アウトになると、なかなか復活は難しい
んです。待てるかどうかは肝心です。

市役所や町役場の 優秀な人材を見逃さない

辻村 滋賀県には「2030年一持続
可能な滋賀の将来像」というビジョン
があって、山口さんはその構想段階か
らずっと関わってこられたメンバーで
もあるんです。

山田 2030年モデルを示された内藤正明先生とは以前からお付き合ひさせていたでいます。報告書を拝見しましたが、なかなか凄いことが書いてありますね。

山口 そうなんです。でも、実際は地域がどう変わるか、そこに暮らす人々にかかっていると思うので、構想づくりに2年間関わった経験(を)、今の勤務地でどう活かしていくかということが、今の自分の課題です。山田さんは地方に向われた時、その地域で活動するためにどのような方法からスタートされるのですか？

山田 ケースバイケースです。でも、一人や二人はキーマン的な方が見つかるでしょ？ まずは市役所、町役場です。小さな自治体ほど、地域の人とバツチリつながっています。頭越しは駄目ですね。山口さんが県を背負って、いきなり地元の人と結びつくと、間の市役所や町役場をすっ飛ばすことになって、たいいてい後でややこしいことになります。役場や役所って役に立つんです。役に立つ場、所と書きますからね。実際に必ずいい人材がいます。

山口 それは私も同感です。自分と同じ匂いを感じる人がたまにおられます(笑)。それと、課長級の方でも、ちょっとした打ち合わせにも顔を出してくださるので有り難いです。でも、市町村合併で組織が大きくなり、これまでのようにはいかならないこともあります。個人的に少し残念に思っているのですが。

山田 市町村合併は私の親元(総務省)が進めましたけれど、今のところ合併して良くなったと言う自治体はあまりないような気がします。そもそも甘い期待が誤解だったんです。リストラ策ですからね。ただ、今の風潮を見ると、マスコミの人にも誤解があると思うんです。役所と企業の決定的な違いは、役所の収入と支出はリンクしていないということですね。企業の支出は、収入を上げるための投資であつたり経費ですよ。ところが役所は、例えば福祉を充実させるとします。お金が沢山必要ですが、だからといってその分、税金が余計には入ってきません。そもそも構造が違うんです。役所の場合は、仕事をすればするほどお金が必要に

なつて支出がかさみます。ですから、国民からすれば、役所に仕事を減らさせる替わりに税金を少ししか納めないか、それとも仕事をドンドンさせる替わりに税金を沢山納めるか、どちらかに決めないといけないんです。今は仕事はして欲しい、税金は少ない方がいいになってますから、これでは上手くいかないのですが、この点を誰もキチンと言つてないと思うんです。役所が言おうとすると、不祥事が発覚して言えない。だから借金が嵩むんですよ。もちろん無駄をなくさせることも大切ですが、例の青山の宿舍だつて、全体の予算からすれば微々たるものなんです。国の財政の足を引つ張っているのは、社会保障や福祉を山のようなサイズでやっておきながら、税をちょっぴりしか取つていないということです。公務員をあんまりいじめちゃ可哀想です。もつとおだてて使わないと。子どもは褒めると伸びると言います(笑)。

山口 合併後の市役所を見ていても、とても忙しくしておられ、仕事は減つていませんよ。

山田 まだ混乱の方が大きい。仕事の



日本のデンマークの「デンパーク」あふれる花にびっくり

重複や余剰人員、そういうのが落ち着くまで少なくとも5年はかかるんじゃないですか。

「余計」に思える取り組みも、そのうち地域に効いてくる

辻村 今回のお話を聞いて、2030年モデルも市町村合併と同様に1、2年で何か成果を期待するのは難しいと改めて認識しました。5年、10年と長いスパンの中で、緩やかに何かができていく。それぐらいの余裕を持たなくちゃいけませんね。

山田 大事なのは「事件は現場で起こっている」ということです。滋賀県の2030年モデルも、「このままではどうもひどいことになりそうですよ」と各地域の自治体に話して、納得してもらうのが大事です。プランを作ったのは県だけけど、そこからはそれぞれが自分の地域にプランを当てはめればどうなるか、同じ筋道で考えてもらうことが必要だと思います。例えば、コンベ式でその地域の実行プランが良ければ県が支援しますと、とにかく下から

意見が上がってくる環境を整えることでしょうかね。

辻村 最後に、山田さんは安城市の将来にむけて、どのようなシナリオを描かれているところなのでしょう？

山田 安城市は「環境首都」をめざしていて、私は市長からその担当を任されています。田んぼも多くて、昔は「日本のデンマーク」と言われましたが、現在はその農業地域が急激に都市化しています。いろいろ種はあるんですが、大きく言えば土地利用をどうするかというところ。他には、地元にも多くの消費者がいますから、将来的に地産地消をめざす。地形が平らなので、なるべく自動車から自転車に乗り換える。私も内藤先生のご薫陶を受けていますし、安城は元来農村なので、なるべく自然系の技術でいきたいと思っています。

辻村 市役所の建物にネットが張ってありましたが、ヘチマを育てておられるそうですね。

山田 ええ、緑のカーテンで節電を。他にもこの前は県予算の削減で河川敷の草刈り回数が減って、カメムシが大発生して、農作物に大きな被害が出ました。

それで、ヤギでも飼ったらどうだろう
 と思いついたんです。上手くいくかは
 別にして試してみましようというスタ
 ンスで、ちょうど調整池のフェンスの
 中で飼うことにしました。そしたら、
 確かに草を綺麗に食べてくれるんです。
 地元の新聞も面白がつて『ヤギ奮迅の活
 躍』って記事に取り上げられました。こ
 近所のアイドルになっちゃって、エサを
 貰うものですから、大変なんですけど
 (笑)。河川敷全体の雑草対策とまでは
 いなくても、焦らなくていいんです。
 市役所の部長級の中には『母乳の代わ
 りにヤギの乳で育った』という人たち
 があります。本当に困った時、そういえば
 自分たちにはヤギという手もあったな、
 それぐらいでいいのではないでしょ
 か。ヘチマにしろヤギにしろ、やらな
 くてもいい余計なことをやっていると
 いうのが、そのうち段々とボディプロ
 ーのように効いてきます。だから今から
 種を蒔いておくんです。

辻村 本日はありがとうございます。



巨大なオルゴールも楽しめます。仕掛け人形がカワイイ。

箸よく盤水を回す 山田朝夫

●やまた あさお 1961年東京生まれ。
 86年に東京大学法学部を卒業して自
 省現総務省(に入省したキャリア官僚。91
 年から5年間、大分県へ出向し、その間に
 県と久住町の共同事業に携わったことがき
 っかけで、同町との縁を深める。96年に一
 日は自治大学校教授として東京へ戻るも、
 翌年、志願して省内初のケースとなる一般
 職扱いで久住町へ出向。03年に臼杵市へ移
 り市民生活部理事を経て、04年から地域再

生プロデューサー。地元の特産品「カボス」を
 使った商品開発や有機農業の振興など、自
 らが地域に溶け込むスタイルで町づくりの
 手腕を発揮。バックボーンには過去のイキ
 リス研修で学んだ「シテイマナーシャ」制
 度の、日本での実現に向けたチャレンジ精
 神がある。06年から安城市へ移り、助役を
 経て現在、副市長。「流しの公務員」を自称
 している。

生きる 山口美知子

●やまくち みちこ 1972年滋賀県生
 まれ。東京農工大学大学院農学研究科環境
 ・資源学専攻修了。9年に林業技師として
 滋賀県入庁。琵琶湖環境部林務緑政課、大
 津林業事務所を経て0年から琵琶湖環境政
 策室の主任技師。昨年3月に素案がまとめ
 られた「持続可能な滋賀社会づくり構想」
 では、中心メンバーとして構想づくりに携
 わる。同構想は前國松知事のマンニフェスト
 でもあったが、嘉田県政にバトンを渡り、
 「構想を眠らせないためにも」積極的にそ
 の存在を知事にアピール。結果、構想は滋
 賀県の取り組みとして継続される方向へ。
 7年から東近江地域振興局に勤務。プライ
 ベートでは、自宅のある栗東市で、家族と
 ともに畑田を作る農業後継者でもある。

ふれあい

第七回

『学級新聞』

中井 二三雄



クラスで一番元気な山元君が、交通事故で入院してしまいました。

クラスは火の消えたように、活気が

ありません。

そこで、み

んなで相談。

毎日、お見舞

いに行くこ

とにしたの

です。

だけど、学

校もあるし、

塾もある。そ

れにお手伝

いも。なか

か、全員揃っ

て行けない

ので、みんな

の様子やク

ラスの話題

が書いてある学級新聞を、毎日、誰か

が届けることにしました。

「まるで学校にいるようだ」と山元

君は大喜び！

ある日、全員で病院に行くこと、いつ

も彼が大事にしていた新聞がありました

せん。

「あそこだよ」

彼が指差す方を見ると、学級新聞

が壁に貼ってありました。彼は、体が

動かせないからなのです。同じ姿勢

でいつも眺めているようでした。

「こうすると、僕いつも、みんなとク

ラスにいるみたいだから」こんなに嬉

しそうな山元君の顔ははじめてみま

した。

中井二三雄

●なかい ふみお1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年から著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

●対談

岡村 博之 (左上)

株式会社 岡村本家

高田 友美 (右上)

株式会社 地球の芽

竹岡 寛文 (右下)

滋賀県立大学 大学院 環境科学研究科
とよさと快蔵プロジェクトメンバー



〈リーディング テーマ2—地域をかえよう〉

leading theme 2 —I will change ab area

企業と町づくり

いろいろな形の、利益の「環」を…

それぞれの手法で「町づくり」に関わる二つの企業と学生プロジェクトの皆さんに対談していただきました。企業と町づくり、学生と町づくりの接点になるものは何なのか?そこには「社会的企業」という言葉の概念を超えた、さまざまな利益のカタチがあるようです。

■進行／滋賀大学経済学部 企業経営学科 准教授 弘中 史子

■豊郷町吉田 岡村本家(2Fギャラリー)

■2007年4月27日



それぞれの「きっかけ」

弘中 岡村さんが酒蔵の建物をこういったオーブンな空間に生まれ変わらせようと思われたきっかけは何だったんですか？

岡村 僕は東京の大学を卒業して、大阪の酒造メーカーに就職しました。上の二人の兄がどちらも家業を継がなかったので、父親が体調を崩したのをきっかけに帰郷することになったんですが、戻って一番に感じたのは、田舎やなあ…と。でもそれが嫌だったわけじゃなくて、この古い建物を何とか商売に活かせないかと考えたんです。それで最初、蔵人さんも一緒に、空いていたこの2階の床を張り替えて、掃除してというところから始めました。酒造りの本番は冬ですから夏場は結構、暇なんです。3カ月かけて作業を終えた時点で、蔵人さんから『来年は何するん？』と聞かれたのが弾みになって、次の年は奥の大広間、その次は空き家になっていった建物を食事処（※田舎酒蔵料理「遊亀亭」）にと改修作業を続けていったんですが、古民家の雰囲気

をお客様が喜ばれるんです。それが嬉しくてずっと続けるうちに、対象が町並みにまで広がって、「とよさとまちづくり委員会」というNPOの立ち上げにつながりました。

弘中 古い建物を商売に活かすという感覚は、本業の酒造りにも反映されるものですか？

岡村 うちの酒造りは昔からのやり方ですね。酒造りのシーズンになると能登半島から杜氏さんに来てもらって、たんですが、杜氏さんも歳をとられて、今後どうするか真剣に考えなくてはならない時期が来しました。機械化する方法もありましたが、僕は豊郷の町並みに併せて、これまでどおりの酒造りがしたかった。それで8年前に地元で蔵人さんを採用して、杜氏さんの技術を引き継いだんです。それと一緒に、それまでは県外産の米を使ってきたんですが、本当に地酒と呼ばれるものを作ろうと、原料も100%近江米に切り替えました。当時、この吉田の集落では農業の後継者不足から営農組合が組織化されようとしていたんですが、うちは良い酒を造るために近江米を使う、

菅農さんは良い米を作れば売れるという回路が、5年ほど前から定着していますね。

弘中 地元の農業と連携した理想的な形があるということですね。農業だけにとどまらず、町づくりにも関わっていると思うのはどうしてですか？

岡村 どこまでを町づくりと言うのかはわかりませんが、古い町並みと古い酒蔵、それが一つのイメージとしてお客様の印象に残ると思うんです。うちは小さな酒蔵ですから、広告費もそうはかけられません。お客様に覚えていただくためには、そのイメージがとも有効な手段なんです。まちづくり委員会の活動を通じて、学生さんとの関わりもできて、僕たちが地元の空き家を借り上げ、竹岡さんたち学生にゆだねるといふ、なかなかうまい仕組みができたと思うのですが。実際にお客様の数も、年間3万人までに増えてきていますしね。

弘中 地元の人間同士のつながりと、学生さんとの新しいつながりが、うまくかみ合っているんですね。高田さんは、地球の芽という事業会社を通じて、

町づくりによどののように関わっていきたいとお考えですか？

高田 会社の方針を代弁しますと、地球の芽の親会社である秋村組は60年代に土木の会社として設立され、道路を造ったり水道をひいたりという仕事から徐々に事業を展開し、ここ10年ぐらいで住宅や公共建築を手がけるようになりました。でも、それはまだ部分としての仕事で、もっと全体を包括するような事業に取り組むことで、今以上に良い環境を創造できるのではないか、そこから何か新しい社会が見えてくるかもしれないという思いがあつて、第一弾として小舟木エコ村プロジェクトがスタートしました。私自身、エコ村は未来が感じられるような場所であつてほしいと思うのですが、近江八幡の風土やポテンシャル(潜在能力)をうまく取り入れることで、エコ村の波及効果として近江八幡が変わる、滋賀県が変わる、日本が変わるといふ思いを込めて、プロジェクトに取り組みつもりです。

弘中 エコ村とはどういう場所なのか、具体的に説明していただけますか？

高田 それはお客様からも最初に受け

る質問なのですが、ひと言では表現しにくくて、どう説明すれば一番伝わるのか、最近、社内でも議論しているところなんです。その中でふと気づいたのは、逆にエコ村にどのようなイメージを持たれますかと聞いたとき、その人の環境問題なり社会問題に対する意識が引き出されるということです。例えば若いご夫婦なら安心して子育てができるとか、学生さんならどんな面白いことがここでできるとか、エコ村に期待されることはとても幅広いんです。それだけにエコ村づくりは難しくもありますが、いろいろな人を魅了できるキーワードであると思います。

弘中 期待されることそのものが、今後のエコ村のコンセプトになり得るということでしょうか。

高田 そうですね。

弘中 竹岡さんは京都のご出身ですが、滋賀県の大学に進学して、そこでなぜ町づくりにまで携わろうと思われたのですか？

竹岡 大学進学をきっかけに彦根で下宿して、4年間の大学生活で京都とはまた違った魅力を感じるようになりま

した。京都は都としての歴史や文化が背景にあります。滋賀は自然や人々の暮らしを背景とする深い意味での歴史を有しています。大学の授業で、中山道の宿場町だった地域と関わり、その時に今まで積み重なった地域の歴史をこれからの町づくりにどう繋げていくかという課題が出されました。それを考える中で、その土地が持っている魅力を活かすためにできることは沢山あるんじゃないかと町づくりの可能性を感じました。それを探るためには4年では時間が足りなくて、大学院に進んだのです。

弘中 具体的にどういった活動を通じて、その土地の歴史や魅力を感じましたか？

竹岡 とよさと快蔵プロジェクトは建築を専攻している学生が主体なのですが、岡村さんの酒蔵も含めて古民家では昔の職人の技を目の当たりにできます。それこそ持続可能な地域のあった時代から、現在に至っているわけで、持続可能という言葉が意味するのはこういうことかと、現代に通じる何かを感じます。作業中に目にした百年分近く

酒蔵の2階を改装したギャラリー。利用するには事前予約を。
テーブルは酒樽のフタ、いい色合い。





酒蔵は美しい。歴史は人とともに刻まれる。

積もった埃にも、その家の持っている時間を感じました。1軒でもいい形で残していきたいですから、プロジェクトは後輩に引き継いでいます。彼らにとっても実際に触れたり感じたりすることのできる点が魅力になっているのかなと思います。

高田 私は就職活動中に今の会社のことを知り、去年の8月にこちら（近江八幡市）に引越してきました。よそ者と言えそうですが、よそ者の視線だからこそ地元では当たり前の風習も新鮮に映りますし、地域のことを貪欲に吸収できると思うんです。地元の人に言わせれば、『そんなつまらないものを』

という中に、とても面白いものがあります。エコ村も新しい町だからといって既存のものとは全く違うものをつくるのではなく、古いものを現代に見せる遣り方があるのでは、と思っています。

弘中 高田さんから見て、近江八幡の魅力はどういったところにあると思いますか？

高田 私が思ったのは、景色を眺めていると八幡山への空気の流れを感じるんです。田んぼや畑があって、それを縫うように川が流れていて琵琶湖に通じている。川の横には八幡山がドーンとあって、地域を守っていてくれるような印象を受けます。八幡城のあった時代から、八幡山があるというのは町の人にとっての安心感につながっているのではないかなと思います。

企業と町づくりを結ぶもの

弘中 基本的な定義で言えば、事業会社の最大の目的は利益を追求することになります。地域づくりや地域の人と関わりを深めることは、会社にとって何をもちたらずと思われませんか？

岡村 会社にとって何が利益かと考えた時、地域の利益があがっていかないと会社も元気にならないんです。中小企業の場合は特にそうだと思います。家業を継ぐようになったとき、地元の先輩から地元雇用を促進できるような会社にしていかんか、と言われました。会社にしてみればそちらの方が効率もいいですし、それ以上のメリットとして知った仲だからこそ言いにくいようなこともアドバイスしてもらえたり、つきあいの輪が広がったり、結果として間接的に商売を支えてもらっていると思います。また、地元の米を使わせてもらうことで、農家の人たちも米の品質だとか、真剣に考えてもらえます。お互いが刺激になっている部分もあるんです。うちのような業種ですと特にそういう関係が大事ですから、やはり地域の利益になるようなことを考えるというのは必要なことなんです。

弘中 地元可愛される会社ということが大切なんですね。

岡村 人間関係を築くのとって、仕事に活かせることも沢山ありますし、何より楽しいんです。本当はもっとと商売の

定義の方を頑張らないといけないんですが(笑)。

高田 地球の芽は、もともとの始まりがエコ村ネットワークキングというNPOのコンセプトを実現するために生まれた会社なので、エコ村を作る過程で、色々な地域の問題も解決できるような「社会的企業」でありたいと思っています。それをどうやってビジネスにしていくなかは今後の課題なのですが、街を育てる仕掛けづくりは投資でもあると思います。今年4月、小舟木エコ村のキックオフとしてシンポジウムを開催しました。そこで近江八幡の現状についても話題にあがったのですが、旧市街地はしがらみが多くて新しい人が入ってこれない。新興住宅地は新しい人ばかりで町にルールがない。その真ん中にあるエコ村は、新しい住人と古くからの住人が混じり合って一緒にならないと良くはならないんじゃないかという意見をいただきました。やはり、そこから始めないと町の持続可能性は保たれないだろうし、当分はエコ村の付加価値づくりにチャレンジして、そこから付加価値をつくるところで採算が

取れるようにしていきたいですね。

弘中 竹岡さんは学生が町づくりに関わることで、地域にとつてどのようなメリットがあると思いますか？

竹岡 地域の中で、お仕事をされている方だと時間的な制約があると思うんです。学生は学業の一環として町づくりに関わらせてもらっているのですが、そういう意味では時間がとりやすく、機動力になると言えるのではないのでしょうか。他府県からの学生も多いので、彼らを通して新しい発見があるかもしれないし、豊郷の場合だと僕たちが起爆剤的に仕掛けたことで、町の人たちはそれに対して来年はどうするのか、次の物件なり展開を考えなくては、という無言のプレッシャーにもなっていると思うんです(笑)。プロジェクトのそういう持続性は、町にとつても良いことだと思っております。

岡村 そうですね(笑)。

弘中 いい意味でのプレッシャーですね。反対に学生にとつてはどのようなメリットがあると思いますか？ それとプロジェクトの最近の活動を紹介します。ほしいのですが。

竹岡 去年の10月に岡村さんのところで空いていた蔵を利用して、バーに改修しました。名前は金亀にちなんでイタリア語で亀という意味の「タルタルガ」といいます。まちづくり委員会の方でもそういう計画はあったらしいのですが、これまで2度ほど立ち消えになった経緯がありまして、学生が運営したことで実現しました。学生が運営していますから週末のみの営業ですが、



タルタルガ、住民と学生が親交を深める



老舗企業、学者、社会人、学生が地域の要となってほしい

すが、地元の人に集まってもらえるスペースに なっています。それと、古民家を改修して学生のシエアハウスに活用するというパターンがこれまでにできあがっているのですが、去年はその発展形として地域の社会福祉法人と協働で、シエアハウスに地域の縁側をドッキングした「おやえさん」という物件を作らせてもらいました。

弘中 地域の縁側というのは面白い発想ですね。誰でも気軽に集えるスペースなのではないか？

竹岡 そうです。実際には三和土土間の空間を設けて、その場所をサロンスペースとして週3日開放しています。扉一枚で学生の住空間とつながっていて、家賃収入の一部が運営費用に充てられて

います。直接的にはありませんが、外から来た学生の若い世代が、地域のお年寄りや子どもを支えるというシステムです。最近が集まる子どもの数も随分増えました。大学に進学してワンルームマンションに入居し、地域と関わりを持たないまま学生生活を過ごす人も多いですが、豊郷のシエアハウスのように地域と関わりながら学生生活を送るといふスタイルもあるということです。

弘中 異世代が集うという点では、エコ村もめざす方向は同じと言えるのではないですか？

高田 多様な世代に入居してほしいと思っ ているのですが、未来を感じられるような場所という意味でセンターエリアに入居者はもちろん、エコ村ネットワークをはじめ、地域で活動するNPOの拠点となるような場所を設けたいと思っています。外部からの訪問者が滞在して何か実験的な活動が行われる。その活動が入居者の刺激にもなるような仕掛けづくりを考えています。例えば今、エコ村の土地の南側で、無農薬栽培の畑づくりを行っています。

最初は一人の社員の小さな取り組みだったのですが、2年前からは「ぐうたら農法」を実践しておられる京都大学の先生の協力を得て農講座を開いたり、貸し菜園としても開放しています。借り手は若い世代や家族連れ、定年を迎えた人など様々ですが、畑仕事を通じて会話が生まれるんですね。エコ村もそれぞれの家の配置を考慮することで菜園につながる町並みを実現できるのではないかと思うのですが、誰もが目にする場所に菜園があることで、新しい人同士が知り合う機会につながるのではないのでしょうか。

弘中 今、町づくりや町おこしといった取り組みが全国にあります。その中でハード面の整備も大切ですが、本当はそういった人が喋る、出会う仕組みづくりこそ非常に大事なんですよね。

地域に根ざすために必要なプロセス

弘中 ビジネスの世界に限らず、「小さくまとまらないで外に目を向けなさい」とよく言われますが、皆さんのお話を聞

いていると、地元や地域など限られた範囲に目を向けることで、逆に考え方が柔軟になっていったという印象を受けますが。

高田 地域社会で何かを始めようとすると、しがらみだとか色々難しいことはあります。それに対して分からないことや疑問に思ったことは、言葉にして遣り取りするからこそ何か新しいものが生まれると思うんです。その中で、自分たちが考えていることも段々とわかってもらえるようになるという気がします。

岡村 それは僕も同感です。これまで振り返って一番しんどかったのは親父を説得することでした。この蔵は酒を仕込む場所、人様に入っていた場所ではないというのが親父の意見でした。でも、昔のよう

ありませんからどんどん空きスペースができてきます。そのスペースを活かしたいんだと数年がかりで説得して、結局、構想から実現までに3年かかったのですが、その数年があつて逆に良かったんです。最初、僕は『この町に年間一〇〇万人のお客様に来てもらおうんだ!』という意気込みでしたけれど、親父を説得しようとする自分の思いを言葉にするうち、この静かな町に、観光パスが押し寄せるようなことは本当に良いことなのかと冷静に考え直して、これは急いだらあかんと思うようになりましたから。



吹き抜けを現代風にアレンジした、遊亀亭

弘中 でも、お父様にわかっていただけるまでは、悶々とされたのでは？

岡村 そこまで反対する気力があるなら、現役でやってよ…と思いますね。でも、ここが完成してからお客様に『どうぞ二階にも上がって行ってください』と笑顔で応対する姿を見て報われました(笑)。結局、商売への意気込みだけでは駄目だし、町のためにという気持ちだけでも駄目なんです。地元を活かせる商売があつてこそ、地元もその商売を盛り上げていこうと考えてくれる、その流れが理想だと思います。

「町づくり」は それ自体が変化するもの

弘中 では、最後に今後の皆さんの抱負や夢をお聞きしたいと思います。

岡村 一〇〇万人からもう少し減ってもいいので、いろいろな人に会いたいですし、その出会いを大事にしていきたいです。歳をとるのはあつという間だと思ふんですが、50歳までは真っ直ぐ前を向いて挑戦していこうと思つていきます。そのあとの10年は斜めを向いて、



食前酒や酒かすを使った料理で舌づつみ。
田舎の味をお楽しみください。

エコ村を作っていけるのではないかと思つています。

弘中 実際にエコ村への入居はいつ頃になりそうですか？

高田 今のところ2008年からの入居予定です。約370戸で入居者を募集

60歳になったらきっぱり引退しよう。それまでは何事も精一杯に、酒造りも町づくりも量より質でがんばります。

高田 エコ村を現実の形にすることが当面の目標ですが、自分たちが期待していることを唱えるだけでは仕方が無いので、まず私たち自身が暮らし方や働き方を変えていかないと、ということとを社内でもよく話すんです。持続可能な町づくりと言いながら、私たちが夜遅くまで会社で働いていたら、どうなんだろうと…。私たちが変わること、周りの人も変わっていく、一緒に

する予定ですが、詳細な情報は今秋から発信していくつもりです。これまで海外のエコビレッジを視察すると、飛びぬけて環境に対する意識の高い人たちで成り立っているケースが多かったのですが、日本の場合、それだけでは逆に周りのコミュニティから浮き上がってしまうことになるんじゃないかと思ふいます。ですから、単純に近江八幡のこのエリアに住みたかったとか、そういう入居者もいてくれる方が意識の相互作用という点から言えば面白いんじゃないかと思ふいます。

弘中 入居者の意識の変化というのもエコ村の成長過程の一つだと思えますから、それを追ってみるのも面白いと思いますよ。では、竹岡さんどうぞ。

竹岡 学生の活動は、地域の人にとって単発的に終わってしまうものと思われる面があると思います。これまで3年間、活動を続けてきて、地域の人がよく受け入れてくれたなと思います。活動を始めた頃の最初の思いを忘れないように後輩へと引き継ぎ、今後

も何とか持続していくのが目標です。みんなが楽しみながら、学生時代に何かを残したいという思いで活動を続けてくれれば、プロジェクトの発起人としては嬉しい限りです。町のためになることであれば、活動の内容は何でも構わないと思いますし、むしろ幅が広がった方が面白いとも思うので、僕は早めに次のフェイズ（段階）に入ろうかと…（笑）。

弘中 どうもありがとうございます。お話を聞いて、皆さん、こうしたいという思いのみで走るんじゃないかと、実際に地域の事情に向き合い、人と関わる中で、変わりながらここまで進んで

これだと思えます。町づくりとは、確固とした目標を定めてそれに近づけるというより、それ自体が変化しながら

地の米・地の人・地油造り

岡村博之

●おかむら ひろゆき 11854年創業の蔵元「岡村本家」6代目。地元豊郷町で30代を中心とするNPO「とよさとまちづくり委員会」を設立し、取り壊し予定だった蔵を修繕して活動拠点として再生させるなど、古い町並みの活用に向けた取り組みを展開中。

わたしが、変わる

みんなが、変わる

高田友美

●たかた ともみ 11未来社会のモデルとつながるコミュニティづくりをめざすNPO「エコ村ネットワークキング」のメンバーである(株)秋村組が、2002年に近江八幡市小舟木でエコ村プロジェクトをスタートさせるとともに、翌年、小舟木エコ村の事業化法人として(株)地球の芽を設立。高田さんは同社社員として、地球の芽サロンを担当するなど多方面に活躍中。

前に向かっていくもの、という気がしました。

一歩ずつ

でも常に前へ

竹岡寛文

●たけおか ひろふみ 11大学時代の授業を通じて岡村さんと知り合い、豊郷町吉田を拠点に古民家の再生を活動の中心とする「とよさと快蔵プロジェクト」を2004年に開始。学生を主体とする同プロジェクトは、とよさとまちづくり委員会と一緒に、町のイベント等にも積極的に参加。

楽しむ

弘中史子

●ひろなか ちかこ 11滋賀大学経済学部で教育・研究に携わる。専門は中小企業論。近江の人々・自然に魅力を感じるにつれ、地域に根ざした中小企業経営のあり方に関心をもち。

●対談

山本 健慈 (左上)

社会福祉法人アトム共同福祉会 理事
 国立大学法人 和歌山大学 副学長



市原 悟子 (右上)

社会福祉法人アトム共同福祉会
 アトム共同保育園 園長



今関 信子 (右下)

児童文学者

〈リーディング テーマ3 —教育をかえよう〉

leading theme 3 —I will change education

「子どもの時間」を奪っていませんか？

大阪「アトム共同保育園」の子育て、親育て

訪れたアトム共同保育園は、「子ども一人ひとりの個性を大事にする」「子どもたちの自己表現の力を育てる」「人間関係を築く力を養う」の三つを大切にしている保育園です。そのために時間と手間を丁寧にかけ、時には子ども同士のケンカを、数時間かけて気長に見守ることも珍しくありません。全国の保育のプロも注目するアトム流の子育て、親育てを、児童文学者の今関信子先生に探っていただきました。

■大阪府泉南郡熊取町 アトム共同保育園

■2007年5月29日

今関先生が経験した 「婆ちゃん」の公園デビュー

今関 私にも1歳4カ月になる孫息子がいます。彼を連れて公園に行った時のことです。数組の母親と子どもがいました。でも、それぞれの母親が我が子を囲うように遊んでいて、隣の親子とさほど距離は無いにも関わらず、つながっていないのです。私は元幼稚園教諭ですから、それが気になって、なんとかその場の雰囲気を変えたいと思いました。そこで、子どもたちの間を縫うように、孫を走らせてみました。お母さん方は驚いて、子どもを抱えるようにして背を向けたのですが、子どもたちの中には、孫に関心をもって近寄ろうとする子がいました。それで今度は、近くに落ちていたビニール袋を砂場のそばにわざと落つことしてみると、一人がその袋に水を汲んできて、砂場に撒き始めたのです。ちょうど孫がバケツを持っていて、そのバケツを目当てに『遊んであげる』と言いつつも現れました。砂場の水は、そうは望まないお母さんの足元へもドンドン自由に広がって、何となくその

場にいた数組の親子に、つながりができました。中に一人、極端に汚れることを嫌うお母さんがおられました。『大丈夫。今日はお天気が良いから、家に帰って洗濯しらすぐ乾くわよ。汚れちゃったんだから、汚しちゃえ』と、私は言っただけです。その出来事を友人に『やっぱり婆ちゃんの出番ってあるよ』と話したところ、友人は嫌な顔をして、『やりすぎだよ。今は自分の子を自分の責任において育てているんだから、そんな主義主張を持って攻めてこないで』と言いつ返されました。友人曰く、『人が集まる“空気”みたいなものがある場所に子どもを連れて行くことは必要だけれど、そこから先のコミュニケーションはトラブルを招きかねない。だから、コミュニケーションの一手手前に子どもを置いておく』とのことだったので、私はトラブルが起きないような場所では何ができるのかと思うのです。子ども同士が何かやろうと思つたら、トラブルが起きるのは当たり前ですし、そこに工夫する、挑戦する意欲が生まれるのだと思います。アトム共同保育園(以下アトム)は、その当たり前のことを、自分た

ちの保育の始まりにしておられる印象を受けますが、それに対して例えば保護者の方々と、どのように信頼関係を築いていかれるのでしょうか？

市原 自分を表現するとか、自分で人間関係を築くといったことが希薄な社会になっていきますよね。その中で、トラブルが起るることによって、話し合いをする接点が生まれるんだと思います。子どもがケガをしたり何かをしゃべりたら、私たち保育士はそれを親にきちんと説明します。親が説明に対して納得できないと表現してくれば、さらにもう一段階、突っ込んで説明するチャンスができます。ですから反対にトラブルがなければ、こうした接点を持つことは難しいのではないのでしょうか。

今関 具体的な事柄があつて、それを通して互いの考え方が出ていくということですね。出会って、相手を発見して、自分のことも理解してもらおう。そんなふうにつながり出す以外、人間関係は築けないということが基本にあるのでしょうか。

山本 でも、最初は「トラブルに意味がある」という意識は無かつたんですよ。

トラブルに積極的に意味を見出して：
ということもありませんでしたし。

市原 私が保育士を始めて1、2年目の頃は、トラブルという意味では、保護者からのクレームを無くすにはどうすればいいか、そのために努力しているという捉え方をしていましたね。でもそのうち、他の子の汚れ物を間違って持ち帰らせてはいけないとか、カーテンが汚れてはいけないとか、クレーム予防を徹底したところで際には無いということがわかってきて、それが発想の転換にもつながったように思います。

大人になるプロセスで、 「一番大事なこと」を きちんと学ばせる環境づくり

今関 子どもが過ごす場所という意味で、園の環境を整えることも必要ですが、子どもが育つ場所と考えると、本当に大切なものは他にありませんよ。人間にとって成長に何が一番大切か…。そういうことを親に理解してもらったため、アトムは果敢にアタックされたの

だろうと思うのですが。

山本 先ほど今関さんが言われた公園の世界です。子どもだけをその空間に群れさせておいたら、中には他人への関心が強い子もいて、そういう子がちよっかいを出しますから、何か必ず関係ができます。つまり、大人が関係を作らせていないだけなんです。子どもは自分の世界がすべてのような存在ですから、他者を鬱陶しいと感じる子もいれば、様々です。個性の違いというか、同じ空間にいてもそれぞれ振る舞いが違うわけですから、当然、トラブルは起こります。これが要するに人間という動物の存在の本質的なところ。その上で、大人になるプロセスで何を学ぶのか。一番大事なものは、その関係途上で起きる自分にとっての利益や不都合、プラスマイナスの関係をどうやって自分にとって居心地の良いものにし、また相手にとっても意味のあるものにするか。それを学んでいくことが大人になるということなんです。ですから、そこが子どもの芯にあつて、それに加えて、かけっこだとかお絵かきだとか、何ができるといっ

なるのであれば、その「何ができる」かは意味を成すでしょう。しかし、「自分にとって、相手にとって」という関係の本質的なものを持たない人間が、いくら自分は何ができるかと個別能力をアピールしたところで、相手にとってそれが迷惑かもしれないということが、わからないままの存在になってしまうんです。

今関 なるほど。だからアトムには、子ども同士がぶつかっても、その子たちの次の行動を待つスタイルがあるんですね。アトムについて書かれた本の中に、他の子に意地悪をする子どもが、ペランダにしばらくの間、一人で置かれるエピソードがありますね。これはその子に考えさせるための時間でもあると思うのですが、その通りその子は悩んで、自分なりの答えを見つけてますよね。何年後に、またその子が、例えば友達ちや両親との関係で悩んだ時、その経験が力になって生きると思っています。アトムでは子どもたちが、生きていく上で大切な、自分の中に刻み込むべきものを、きちんと刻んでいると感じます。



“アトム”の名づけ親は保護者。「強い子に育ちますように」との願いを込めて

山本 自然な状態で子どもたちを群れさせておくというのが一番重要なポイントで、今はそれが無くなったんです。昔は大人が子どもにも干渉する暇もなければゆとりもなかった。だから子どもだけの時間と空間が、長く濃く存在していて、そこに意味があったんだと思います。ですからアトムでは保育士が適切に見守っていれば、子どもたちが勝手に群れて、衝突するのも有りです。我々は子どもたちが衝突したのをきっかけに、大人が介入するという保育のプログラムであるわけで、何か一定の階梯が設定されていて、それに一人ひとりを到達させるためのプログラムとは違います。勿論、そういうプログラムを実践されている園もありますし、そういう園の卒園式は、子どもが揃って何かをやったり、美しいですよ。でも一方で、到達させるプログラムに行き詰まりを感じる保育士さんがおられることも事実です。アトムの卒園式は揃って何かをやるとか、そんなことはありませんが、保護者からは『自分の子どもの個性がわかった』と言われます(笑)。

ケンカの先にある着地点—— 子どもが納得できるまで 時間をかける

今関 私の心に残ったエピソードをも一つ。アトムでは大きい組になったら、園内にある梅の木の梅を取る役が回ってくるんですよ。それで、大きい組の子どもたちが喜び勇んで梅の木に集まると、別の組の男の子が自分も梅を取りたいものだから割り込んできて、採め事になるお話がありました。当事者同士は緊迫状態が続いたのでしようが、子どもは自分の思いだけで動いていきますから、その先どうなるかはわからない訳ですよ。そこで保育士が少しだけ手を貸してあげて、ケンカになるのだけれど、最後には人として大切なものの中に着地する。そんなふうに、保育士が子どもの心を見破ってあげるというか、その先の「読み」や「見通し」がとても面白いんです。子どもたちは「一つ、困難を乗り越えて、「立ち上がり方」を学んだことになりましたし、それはこの先の人生で、素晴らしい手がかりになると思います。立ち上がった経験が

あるからこそ、また立ち上がれるということになるんじゃないでしょうか。

山本 でも、保育理論に終始している人は、今関さんのような評価の仕方は滅多にされません（笑）。

市原 どうして早く注意しないの、どうしてケンカをやめさせないの。ましてやケンカを仕掛けるようなことはけしからんということを沢山の方から言われました。

今関 子どもたちが最後にどういった中に着地したかを見るべきだと思うのですが。衝突がなければその着地点に到達することもないので、むしろプロセスを大事にすべきです。下手な保育者はトラブルが起こった場合、その先に結果だけをくつつけようとしません。子どもはプロセスで学ぶのに、そのプロセスを抜くのです。学ばさず、いきなり結果に導いて『だからこうでしよう』と、そんな評論家のように言うてしまっってはいけないと思います。保育者はプロセスと一緒に歩く伴走者でなければ。伴走者には子どものような感性と、その感性を読み取る洞察力の両方が必要です。そういう意味からも

両方が必要です。そういう意味から、私はアトム

の保育が楽しいものに思えます。

山本 大人になると、自分の子ども時代を忘れるのです。あるいは、大人の小ざかしい整理の仕方、それができない子どもを甘く見ているのではないのでしょうか。子どもというのは正直かつ最も複雑な存在といえます。子ども自身のセンサーが情報をリアルに受け止め、正直に反応します。大人の場、センサーの感度は子ども

「私は痴呆症の祖母に学びました」市原園長

「私は孫に学びました」今関先生





「私は市原園長に学びました」山本先生

の頃とそう変わらなくても、情報を意識的にシャットアウトしたり、整理して表現できるようになっていますから、ある意味、正直な関係が展開しません。その点、子どもは正直にアウトプットしますから、トゲもあるし非常に厄介といえ厄介です。今関さんは「見通し」と言われましたが、見通しながら子ども自身が納得できるまで時間をかけることが大切なのだと思います。着地とはつまり、納得であり、子どもにすれば、すっきりしているのです。

市原 子どもたちにトコトンまでやらさないといけないと感じたのは、5歳児を受け持った時のことです。子供同士が揉めては止め、その場は一旦おさまりませんが、またすぐに別のことで揉め出す。午前中に揉めた二人が午後になってまた揉めるという光景を何回も見るうちに、これって少しもスッキリしてないから、些細なことでまた腹を立てるんじゃないかと気づいたんです。それで、本当にスッキリするところまで、とことん付き合ってあげるのが大事な

なんだとわかるようになってきました。
今関 そうですね。すつきりする瞬間つて、相手の何かが見える時でもあると思います。
市原 でも、とても時間がかかります。女の子でもつかみ合いのケンカを4時間近く続けたことがありますから。

今関 保育者の側からすれば、4時間も我慢するのはなかなかできませんよね。多分、言い聞かせて適当なところで止めさせると思います。

山本 それで大人が納得するんですよ。

市原 子どもの個性を大切にとよく言いますよね。でも、大切にするとどういうことなのか、私自身も自分が大切にされた経験というところ、思い浮かばないんですよ。でも、『子どもはそんなものだ』という言われ方に対して、ひっくり返して言わないでよという思いがありました。その子の個性やペースは一人ずつ違うんです。それを1本の物差しに合わせるのではなく、その子のペースを待つてあげる。子供同士だと難しいですが、大人は見通しがあるので、待つてあげることもできます。大人としてできる最大のことはそれかな、と思います。

今関 大人たちも成長しなくちゃいけないでしょうね。その点で、アトムは親も自然に導いているように思うのです。どのようにすれば保護者との関係を丁寧に結ぶことができるのでしょうか。

大人であつても、 誰か一人との関係を 安定させることから始まり

市原 大人であつても、誰か一人との関係が安定すれば、外に目を向けられますが、一人との関係も築くことができなければ、全てがザワザワとして、誰を見ても不安になります。ですから、保育士との関係をまず作るんです。保育士が信用してもらえれば、その保育士に疑わずに聞こうとする姿勢が生まれます。この関係がなければ、保育士が何を言つても届きません。

山本 子どもと一緒にだと思ふんです。いや、子どもより難しいか(笑)。子どもはいろんな情報に正直に反応しますが、大人はそれに対して、自分にとっての都合の良し悪しや建て前などで操作して反応するので。しかし、辛い「子ども」という一つのテーマがあつて、それには関心もあるし、面倒を見なくちゃという義務感もある。さらに、保育園に繰り返し訪れるという条件があるから、同じ土俵に引きずり込めるんです。それでもすぐに土俵から降り

ようとする人など、様々ですが。子どもの保育の見通しより、保護者と関係を築く方が難しいかもしれません。

市原 連絡帳もそうですが、何よりクラス懇談会の存在が大きいですね。0歳から3歳までは年4回、4歳は年6回、5歳は年11回を開いています。



克明につづられる日誌

今関 年長さんになるほど回数が増えるんですね。

市原 他の子の物を隠したり、持ち帰ったりという行動が4歳ごろから頻繁に見え出します。なぜ、そういう心理でそういうことをするのか、それを保護者に丁寧に説明しないと、親は自分の子が人の物を勝手に持ち帰ったということだけでパニックに陥ってしまいがちです。行動として褒められることではありませんが、どうしてそういうことがしたくなるのか、なぜ相手がその子なのか、それには理由がありますから、理解のための解釈を付け加える必要があるんです。

「自分の気持ちをいっぱい表現する」—アトム文化が地域に受け入れられるまで

今関 アトムには生き生きとした保育実践があり、子どもにも大人にも、それが飛び火していくのが凄いなあと感じます。人にはその人の身体から発散されるものがあるでしょ。アトムの子どもや親たちからも、ここで身につい

〈地域を元気にする秘訣 — 教育をかえよう〉

たものが、必ず発散されていると思うのですが、それは地域の人たちから見て、面白い、あそこには何かあると感じさせるものではないかと思うんです。つまり、それが地域への影響力になり、教育力にまで発展しているのではないかと思っています。

山本 子どもも大人も育っているということ、当事者はお互いに評価できますが、外から見たらまた別評価で、同じ保育園からすればアトムは煙たい存在とも言えます。一部のメディアでうちの評価が高まれば、比較されるということもあります。もう一つは小学校に上がって、最初の一時期はアトムで育った子どもと親というのは、厄介でもあるからです(笑)。

今関 それは自己主張が強いという点で？

山本 特に子どもはケンカをしながら納得するというスタイルを身に付けています。ところが他の幼稚園から来た子は、すぐに謝る文化というか、揉めないスタイルなんです。

今関 自分の気持ちをつぱい表現する文化と、それを内に抑えて波風を立て



生の声が訴えかける“けんかの重要性”

てない文化のぶつかりあいですね。

山本 自分で他者との関係を作ることが自分の生活になっている子どもと、トレーニングされた関係しか作れない子ども、先生にしてみれば前者はなかなかシブとく納得しないから、担任を受け持つと厄介でしょうね。後者の親に

とつてもそれは同じでしょう。でも、アトムが救われるのは、日本という国を深刻に考えた場合、自分で他者との関係を作るということは、非常に重要なことではないかと思える。専門家や著名人がいて、そういう人たちがいるんなら光の当て方で、園を評価してくれることです。我々にとつて凄く励ましです、それがなければ続かなかったとも思います。それともう一つは、ここは福祉の施設ですから、利用者の生活を沢山助けているという点で、いろんな人が評価してくれそうです。何かに困っている家族を支えることは、福祉の中で一番大事なところですから、教育論や保育論より、支援の実績によって地域の中で市民権を得ていった部分が大いと言えます。保育所ですから、いろんな家族が飛び込んできます。家族の誰かに問題があったり、急病人が出たり、失業したり。今日起きたことに明日、対処してくれる施設が必要なんです。でも、普通の保育所だと、なかなかそうはいきませんから。

今関 でも言ってみれば、それが保育所の使命でもあるんですね。



「こどもが家出しても友達関係が強いので安心」と語る保育士さん(左)は、アトム保護者だった。

市原　そうです。究極は「子どもを守る」ということで、家族が安定していなければ、子どもは守れません。保育所で預かる時間中は安定しても、不安定な家族の元に帰すのであれば、かえって状態は悪くなります。昔はそれを隣近所や親戚がフォローしていたと思うのですが、今はそれが無いから大変なんです。例えば母子家庭で、母親が病気になるから、送り迎えができないので休ませると、母親は養生できません。ですからアトムがどうするかといえば、子どもを迎えに行って送ってあげる。夕方になっても母親の具合が回復しなければ、保育士の家で預かることもあります。

山本　無認可時代には、こんなこともよくありました。急遽、明日から預かってくれと言われ、旧アトムは裕福な施設ではなかったし、保育士の数も限られていましたから、そうなるも既得権を持つ親から文句が出るんです。新しい子どもを受け入れたら、うちの子どもたちに不利益が生じるかもしれないという理由です。でもそれを市原さんが押し返したんです。『先に入園した

からと云って、困った状況に陥った人を排除して自分の権利を守るのか。それでもいいのか。文句をいう親の中には、かつて自分も同じ状況にあったことを忘れている人もいますから、それが大人の学習にもなるんです。そして、そういうことが地域のオピニオンリーダーにはわかりやすいんです。本当は自分たちがやらなければならぬことを、特に補助金等を受けているわけでもない施設がやっている。それで信用と市民権を徐々に得る中で、個性的な保育を実践していることを超えて、子どもの個性を育てている、そして、子どもの資質に沿って親が子育てをできるように親も育てているということの説得力が生まれるんです。この育ち方、育て方を学校が引き継いでくれば、本当は学校だって楽になるはずなんです。これまで10年近くかかりましたが、その流れが町の学校全体のシステムになりつつあります。

今関 今日はとてもいいお話をお聞きすることができました。本当にありがとうございました。

未熟な人間で

いじょうな

山本健志

●やまもと けんじ 1948年山口県生まれ。98年から和歌山大学生涯学習教育研究センター教授(センター長兼務)。88年に長男の保育からアトム共同保育所に出会い、89年運営委員長、90年所長兼副代表理事を経て現在に至る。95年ころの子育てインターネット関西創設に参加し、現在副代表。

大人が育つ保育園

市原倍子

●いちばら よしこ 1953年高知県宿毛市の沖ノ島生まれ。高校卒業後、京都で就職。その後、アルバイトで京都大学風の子保育園に入り、資格試験で保育資格取得。78年アトム共同保育所に入り、90年から同所長代理。02年には読売新聞社「子育て応援団」メンバーとして活躍、06年から和歌山大学客員教授を務める。

●アトム共同保育園 1967年、熊取町にある京都大学原予炉実験所の職員らにより創設。03年に社会福祉法人アトム

共同福祉会設立アトム共同保育園として熊取町立第6保育園の運営を委託される。創設以来、「親に見せる保育はしない」「親育ちの応援団としての保育園でありたい」等のモットーを貫き、全国の保育団体や専門家、メディア等、各方面から広く注目される。

所在地／大阪府泉南郡熊取町長池2-1
TEL. 072-452-7112

〒590-0455

●アトム共同保育所関係刊行物
「不思議なアトムの子育て—アトム保育所は大人が育つ」(横川和夫著/太郎次郎社)
「裸で育て君らしく—大阪・アトム共同保育所」(NHK「こども」プロジェクト編集) ほか



今関さんのプロフィールは123ページで紹介しています。



●対談

高月 紘

VS

森 建司

石川県立大学生物資源工学研究所教授
京エコロジーセンター 館長

循環型社会システム研究所代表

〈リーディングテーマ 4—工業をかえよう〉

leading theme 4 —I will change industry

循環型社会への 「仕掛けづくり」

次の世代が希望を持てる社会へ

日本の廃棄物の第一人者であり、環境をテーマにした漫画家としても知られる高月紘先生が館長を勤める「京エコロジーセンター」(京都市伏見区)に伺いました。高月先生の漫画をはじめ、子どもたちが楽しみながらエコを学ぶ仕掛けが随所に施された館内で、高月先生に大人が意識を変えるための仕掛けづくりについて森代表と語っていただきました。



あなたの体重とつりあう廃棄物の量がわかります

■京エコロジーセンター

■2007年5月19日

「ゴミ博士」が見る
国内の環境事情

森 先生のことを、日本の「ゴミ博士」と紹介するメディアも多いのですが、廃棄物についてお書きになった中に、リサイクル技術の問題以前に、ライフスタイルや意識の問題をあげておられましたね。ゴミの減量化は多少は進んでいるのでしょうか？

高月 評価の仕方は難しいのですが、資源の消費量そのものはなかなか減らないのが現状です。循環型社会というと、リサイクルすればそれでよしという観念だけが発達して、それがまた免罪符になっている側面があります。ですからこのセンターでもリサイクルをはずして、リデュース（ゴミ減量）とリユース（資源の再使用）の2R型で持続可能な世界をめざそうということをやっています。

森 リサイクルばかりが良しではないんですよ。工業包装でも、ダンボールはリサイクルの王様だと言われた時代がありました。プラスチックダンボールはかなりの回数でリユースでき

ます。どちらが環境にやさしいかといえば、紙もプラスチックに負けることがあるのですから、その見極めを間違えると、大変なことになります。

今、循環型社会に向けて、新しい世界が生まれようとしている実感もありますが、私はその中で、若い世代や子どもたちに希望を与えにくいのではないかと思うのです。先生はどう思われますか？

高月 資源やエネルギーの使い方など、このままでは確かに絶望的と言えるでしょう。環境科学に携わる人たちは、何かショックを与えなければ日本人のライフスタイルは変わらないと言いますが、ただそれを待っているだけでは、我々「環境屋さん」としては情けないですから。何とか少しでも持続可能な取組みができないかと考え、一つには子ども頃からの環境教育が大切だろうということ、10年近くこのセンターの活動に関わってきました。結局、大切なのは立派な施設より何より「人づくり」です。どういう人材を育てていくか、知識も大切ですが、地域の中で活動の輪を広げていけるような人づくりが重

要で、それがこのセンターの環境学習のポイントになっていると言えます。

大量生産、大量消費、
大量廃棄の構造から
脱け出すために

森 私たちは企業の立場で環境問題に取り組もうとしています。企業間競争の要諦はQCD（品質・価格・納期）であり、これを徹底的に追求しないと競争に負けることになります。しかし、私たちが言っているのは、QCDを否定する消費者層を作ろうということなんです（笑）。高価でも本当に良い商品を生産する。一生もので使う。エネルギーはなるべく使わず、その分、コストと人手をかけて地産地消を実現する。特別なことではなくて、一時代前の構造に戻そうということなのですが、『時代を戻すという考え方は駄目だ』と、これまで言われ続けてきました。科学技術を応用してこの時代を乗り越えるのだという人もいますが、先端技術に頼りすぎると、そこでまた新たな問題が起きるのではないのでしょうか。ですから私は勇気を



どうすればエコかな



でっかい絵本でわかりやすく紹介



再生のヒントがたくさんちりばめられて



日本の暮らしの中にエコのヒントがある



外国の参加者に大人気の調理実習室



雨水をためるタンク



清潔な分別ゴミ箱

持って、時代を戻すのだと言いたいの
ですが。

高月 そうですね。決して江戸時代に
戻れと言っているのではありませんか
らね。私の試算では、30年から40年前の
社会に戻れば、エネルギー資源の消費
量は今の半分で済みます。その時代、ハ
イテクの家電製品が何も無くて皆が不
便で不幸だったかというところ、そうでは
ありません。冷蔵庫や洗濯機、掃除機な
ど、本当の意味での必需品は既に家庭の
中にありました。そういうものを確保
した上で、エネルギー資源の消費量を
半分にするのは、決して無理なことでは
ないのです。逆に言えば、今は無くて
もいいものまで享受しているから、二
〇〇%の状態になっていると言えます。
森 この国を代表するような大手企業
は、大量生産のための工場を幾つも保
有し、どんどん新製品を送り込んでき
ます。自動車でも情報機器でも、古い
型を使っているのは時代遅れだ、甲斐
性がないと、それが常識化しているん
ですよ。

高月 自動車も最近、国内の販売台数
が減っているというので、家族で車で



近郊の小学生は必ず見学に訪れる、京エコロジーセンター

●京(みやこ)エコロジーセンター

平成9年12月に京都市で開催された「地球温暖化防止京都会議(COP3)」を記念して、平成14年に京都市の環境学習と環境保全活動を支援する拠点として設立されました。建物の屋上に降った雨をトイレの洗浄水に利用するほか、太陽光発電パネルやソルエアパネルの設備、地熱利用など、建物自体が一つの展示になっています。館内には「みんなでつくり、進化する展示」をコンセプトに、体験・参加型のアイデアがふんだんに採用されています。館の運営と事業展開には、市民・事業者・学識経験者・環境NPOなど多様な立場の人々が参画し、また「エコメイト」と呼ばれる環境ボランティアの皆さんが、日常的な館の活動を支えます。館では特に「人づくり」に重点を置き、定期的に「環境教育リーダー養成講座」を開講するほか、京都市立の小学5年生全員が環境学習で訪れます。

13

場所／京都市伏見区深草池ノ内町

電話／075-641-0911

<http://www.miyako-eco.jp>

旅行しましょうというキャンペーンがありましたね(笑)。

森 本当に地球の未来を考えるのであれば、電車に乗りましょうと言うべきなんです。私が気に入らないのは、そういう会社のCSRが表彰されていることです。表彰する政府や新聞社も何を考えているのかと思うのですが、そもそも従来の生産構造を変えない限り、何をやっても駄目だと思っのです。

高月 不思議な仕組みなのです。その会社の製品の評価はあまり重要ではなくて、省エネに取り組んでいるとか、ゴミゼロ化を進めているとか、そういうプロセスばかりが評価の対象で、それはちょっと本末転倒だと思います。環境に良い製品や長持ちする製品を、いかに少ない資源エネルギーで作っているか、それで表彰するならよくわかるのですが。

森 経済産業省や環境省をはじめ、環境ビジネスを支援する仕組みはあるのですが、ほとんどが新商品開発に限られています。大手の家電メーカーでも、既存の製品がすべて環境配慮型製品に置き換われれば、環境負荷を削減できる



生き物についても考えよう

とお考えなのでしょうが、その代わりに廃棄物の山ができることは、あまり考えておられないように思うのです。そうではなくて、今使っている冷蔵庫が故障した時にキッチンと修理して、長持ちさせることを考えていただきたいのです。

循環型社会へ導くのは子ども その子どもを教えるのは大人

森 歴史を振り返っても、ヨーロッパで貴族階級が支配する世の中が革命でひっくり返ったように、経済が支配する今の社会も、これ以上、地球環境の悪化は許されないのだと、ひっくり返る可能性があるのではないのでしょうか。

ただ、現在は全員が貴族階級ですから、誰がその旗手になるかということになります。

高月 例えば中国のような大国が、先進国のライフスタイルに近づきつつあります。しかし、それを止めなさいとはなかなか言えません。ですからまず先進国の人々から、ライフスタイルを変える必要があるのです。

森 日本でも田舎で生まれ育った人間が、田舎のエコロジーな生活様式を嫌がったり、都会の人間が、趣味的にですが土いじりに熱心だったり、人間心理の面白さというか、そういう風潮がありますね。

高月 我々の世代には辛い原体験的なものがありますが、都心部の若い世代には、自然と触れ合う機会がなかなかありません。木登りや川で魚を取ったことのない子どもたちに、どうやって自然の大切さや生態系の大切さを理解してもらおうかは非常に難しいですね。日本の環境教育は、川を大切にしようとか、自然保護運動から始まりました。それが公害問題等を経て、現に環境を良くするかが主題となり、現

在は持続可能な社会をどう築くかがコンセプトになっています。通念は変化していますが、原点は自然や生態系のつながりをいかに理解するかであり、そのために何ができるか、そのどちらもやらなければならぬのです。最近、体験学習と盛んに言われますが、そういった学習スタイルを体験したことのない先生にいくら言っても、なかなか指導できるものではありません。ですから、まず先生方に環境教育なり環境学習の大切さを理解してもらうことが重要な課題になっています。教える人が熱心であれば、子どもも自然と熱心になりますからね。

森 子どもたちが大人の背中を見て学ばなければ。口先だけの学問では駄目なのでしょうね。

高月 知識を増やすというより、先生方の熱意が伝わらなければ、子どもたちは何も感じ取れないだろうと思うのです。こちらのセンターでも、それぞれの地域で力を発揮してくれる、環境教育リーダーの養成に取り組んでいます。学校現場なら、そのリーダーは先生ということになりますから。

循環型社会へ向けた、 意識改革と仕掛けづくり

森 私が先生をはじめ、学者の方々に期待することは、循環型社会のイメージをわかりやすく示していただきたいということ。極端かもしれませんが、自動車に乗らない、スパーで安い物を買わない。でも、それが未来の本当の姿なのだと、誰かが示すべきだと思います。そのイメージのもとに若い人の希望とパワーを集めなければ、社会は変わらないのではないのでしょうか。それが私たちの世代の仕事だと思うのです。

高月 森さんのように企業の方々がそれを言われるのは、物凄く勇気がいることだと思います。

森 お取引先との関係など注意も必要なのですが、私はどちらかを選べと言われたら、MOHの活動を選ぶつもりです(笑)。

高月 私も講演の中で『物を大切に。資源やエネルギーをできるだけ節約しましょう』と申し上げますと、企業の方から『それでは経済が成り立ちません』と盛んに言われます。しかし、そ

れを乗り越えないと……。今のよう大量に資源やエネルギーを使って経済を成り立たせる仕組みは長続きしないのです。だからこそ、皆で新しい経済システムを考え、実現べきなのです。

森 誤解を招くかもしれませんが、私は「収入半分、支出半分、幸せ倍増」という考え方を主張しています。例えばガソリンの使用量を減らせば、そのシワ寄せで収入も減る。車にも乗れなくなるかもしれない。でも、そこに代替の仕組みが生まれたり、またお金を使うこと以外の喜びを覚えたり、そんな筋書きも、充分実現の可能性があると思うのです。

高月 森さんは企業としてお金を儲けて、それを社会に還元することを考えておられますね。それが本来の企業の社会的貢献なのですが、今、企業はお金を儲けることが目的になっています。

森 おっしゃるとおりです。ですから私は「もったいない市場」を提案しているんです。市場は経済活動の場ですから、「もったいない」は矛盾していると思われるかもしれませんが、この市場の目的はお客様になるべくお金

を使わないでもらうことです。もし、テーブルを買いたいというお客様がいたら、前のテーブルはどうしました？ 壊れたなら修理しましょう。それで修理費が利益になるのです。そういうお店なら、私は安心して顧客になりたいと思うのですが。そもそも商売というのは、お金を使わそうというのではなく、お客様の身になってというのが昔からの基本だったはずですよ。



ライフスタイルを変える仕掛け人、高月先生(左)、森代表(右)



屋上で野菜づくり、肥料は生ゴミのコンポストから



かわいいコンポスト



風力発電(左)と太陽光発電(右)の蓄電器。発電量もわかる

我々が手がける包装資材というのは、その基本が今も大切にあって、なぜなら包装資材はある時点で廃棄物になります。ですからお客様はコストダウンのために、包装資材の使用量を減らすための提案を求められます。

私の会社では昔からそういう提案を行ってきたのですが、『御蔭であんたの会社から買う資材の量が減った』と喜んでいただくことができます(笑)。しかしその代わりに、口コミであそこは良心的な会社だと宣伝してもらえ、次の取引につながるのです。近江商人は三方よしと言いましたが、今は三方が高く買わせてやろう、安く売らせてやろうと敵対状態です。そうではなくて、売り手と買い手、作り手が一体化すれば、そこに“癒し”に通じるような市場が、実現するのではないかと思っています。

高月 理想的だと思います。今は経済

成長ということを大前提にしていますから、もったいない市場の実現は困難かもしれませんが。しかし、本当は経済というの、民を救うじゃありませんが、バランスが保たれてまったく成長ゼロの状態が理想的でもあるのです。考え方によっては、資源やエネルギーを使わなくても、例えばサービスなどで経済を持たせる仕組みが可能だと思いますね。もちろん、今までのようなGDPという調子にはいかないでしょうが。結局、我々消費者が求めているのはサービスであって、決して物だけを求めているのではないのです。そのところのズレをぜひ修正すべきだと思います。ここ最近、レンタルやリースも見直されてきているので、製造者や販売者に所有権があるまま物が動くようになると、売り手や作り手が物づくりの段階から維持管理までを真剣に考えるようになると思います。そういう仕組みも必要でしょうね。

森 その仕組みへの挑戦は、むしろ中小企業の役目かもしれませんね。ビジネスモデルとして成功すれば、全国に広がる可能性があります。

高月 昔はビンなど洗って再使用してました。あまりに種類が多くなつて、全部使い捨てに変わりましたが。全国規模でなくても小さな枠組みから、同じ規格の物を使ってみようとか、そういう研究会も進めています。物の行き先までを考える消費者の意識や力も不足していますし、何より使い捨てに慣らされてしまったことを反省すべきではないかと思うのです。大人はもう手遅れだとは申しませんが、子どもたちからと期待をかけて、このセンターでも取り組んでいます。



「使い捨てない文化を」高月先生は漫画家としても有名。カレンダーも手がける。

● たがつき ひろし 1941年、京都府生まれ。京都大学工学部衛生工学科卒業。工学博士。京都大学環境保全センター教授を経て、2005年石川県立大学生物資源工学研究所教授。専門は都市・産業廃棄物処理、環境安全化学。廃棄物問題の第一人者として知られ、「ハイムーン」のペンネームで、環境をテーマにした漫画も描き続けている。

「著書」 「ゴミ問題とライフスタイル」(日本評論社)、「まんがで学ぶエコロジ」(昭和堂 ほか)

森さんのプロフィールは68ページで紹介しています。

エコライフ
高月 弘



ニュースレポート1+対談5
ヘリ・ディングテーマ5―農業をかえよう

琵琶湖の水が教えてくれる 地球環境問題



松井 三郎

京都大学名誉教授

立命館大学客員教授

国連地球環境機関 (GEF) 科学技術顧問

news report 1

I will change agriculture

琵琶湖という小宇宙から見る 地球温暖化、資源の枯渇問題など

MOH通信第2号で紹介した大津市坂本の「麦の家」にて、かねてからこの家の暮らし方に注目してこられた京都大学名誉教授・松井三郎さんを迎え、琵琶湖をテーマに、地球環境問題と地球環境の持続性について語っていただきました。また、「麦の家」の主宰・山崎隆さんと、環境問題とこの国の農業を考える時、延長線上に浮かんで来る「日本の思想」について対談していただきました。

■大津市坂本「麦の家」

■2007年6月17日

地球温暖化—循環のバランスを崩す元素たち

地球温暖化という変動が間違いなく進行しています。このままでいくと私たち人間の生活すべての側面で変化が予測され、その変化に人間が耐えられるか、ということが懸念されています。国同士の大きな戦争は、もはや許されません。もし戦争をすれば、経済面に大きな影響を与えるだけでなく、地球の環境破壊に拍車をかけることとなります。今、全世界が共通で取り組むべきは地球環境問題であり、今世紀末までに人間がどれだけ賢くなり、お互いに協力し合えるかが大きな課題なのです。

地球温暖化について、多くの人が注目しているのは二酸化炭素と、それ以外に温暖化に寄与するガス成分についてです。それらの発生を抑制して、大気中の濃度が上がるのを防ごうと、問題の局面が絞られてきたのは喜ばしいことです。が、注意すべきは温暖化現象を二酸化炭素という一点から見てしまうと、そのすぐそばにある問題、横つながりの問題を

見落とす可能性が高く、本質的な問題解決に至らないということです。地球温暖化は炭素だけの問題ではないのです。

炭素は、地球や人間の体を構成する原子の一つということをご存知でしょう。原子（分子）は、地球上を大きく動きながら循環しています。つまり、地球温暖化は炭素原子の循環がバランスを崩したために招かれた事態と言えますが、しかし、バランスを崩しているのは炭素だけではありません。炭素の隣にある窒素、そしてリンも我々人間によって、循環のバランスを崩されているのです。おそらく、炭素・窒素・リンの少なくとも三つの元素をセットで見なければ、地球環境問題は解決できないであろうというの、科学者の見解です。

琵琶湖で、なぜ「アオコ」が発生するのか？

このことを、琵琶湖を例にして説明してみましよう。現在の琵琶湖は、過去に進行した水質汚染を何とか押さえ込んでいる状態です。この場合の汚染源は、琵琶湖に流れ込んだ有機物です。有機物の

流入を抑えるため、工場廃水の規制や下水道の整備、下水道でカバーできない部分は農村集落排水の整備や、尿処理場の整備で手が打たれました。これにより有機物による琵琶湖の汚染状況は、かなり改善されましたが、今も琵琶湖では毎年のようにアオコの発生が見られます。なぜなら、窒素とリンの流入量が減っていないからです。窒素とリンは下水に含まれるほか、工場廃水や水田、畑、森林といった土壌からも流れ出て、琵琶湖に流れ込みます。この二つの元素はアオコ

にとって格好の養分で、空気中の二酸化炭素と太陽の光があれば、簡単に光合成により細胞増殖できます。琵琶湖の水質汚染は、窒素とリンを通じて言うならば、対策がまだ不十分であり、解決していないのです。

滋賀県の流域下水道は、国内でも最新の処理方法である「高度処理」を行っています。同様の処理は、アメリカの五大湖周辺地域や、ヨーロッパのライン川に下水を流す地域でも採用されています。しかし、高度処理を行うのは、人口に換算すれば、地球上の63億人の人口のうち、

わずか5千万人程度に過ぎません。日本でも、琵琶湖の周辺地域で行われているもの、大阪湾や東京湾の周辺地域では行われていないのが現状です。

【】 とどこどこが「死の海」の 東京湾と琵琶湖の関連性

東京湾の富栄養化問題は、現在も解決されていません。そのため、湾内ではアオシオの発生が見られます。大量に発生したプランクトンは、やがて死骸となつて海底に沈みますが、東京湾の海底には、湾周辺の埋立工事のために、大量の砂を掘削した窪地が幾つもあります。窪地の部分は潮の流れがうまく回らず、無酸素状態です。そうなると、窪地に積もったプランクトンの死骸を、分解してくれる酸素利用バクテリアが減ります。そして、バクテリアの中でも無酸素で活動できるタイプのバクテリアが活躍し出します。その内の一種、硫酸塩還元バクテリアがプランクトンの死骸を分解する過程で、硫化水素という危険物が発生します。それにより魚は死滅し、東京湾はどこどころが「死の海」になっているのです。

実は、これと同じことが琵琶湖でも起きているのではないかと予測する声があります。琵琶湖の湖底の無酸素状態を防いでいるのは、春先の雪解け水です。たつぷりと酸素を含み、冷たい水は温かい水よりも重いので、湖底の下へと潜り込みます。しかし、温暖化が進めば、雪解け水の一番の供給元である琵琶湖北部の山々で積雪量が減り、結果的に酸素不足から東京湾と同じように硫化水素が発生するのではないかと言われているのです。温暖化は確かに二酸化炭素の問題ではあるのですが、琵琶湖の環境では、同時に窒素・リンについても併せて考えなければ、思わぬ事態を招く可能性が高いのです。

【】 琵琶湖の窒素とリンは、 どこから来るのか？

炭素・窒素・リンの排出をいかにして抑えるか？ 炭素については、日本の場合、産業界でもモーターシフトや消費電力の削減に向けた努力が行われ、ある程度の筋道ができあがってきたといえます。では、窒素やリンについてはどうかといえば、まず窒素について、空気とい

うガスの8割は窒素です。人間は空気を吸っていますが、体内にも当然、窒素ガスは溶け込んでいます。窒素の使い道は、主に空気中の窒素を、石灰や天然ガスを使ってアンモニア合成反応させ、尿素を作っています。それが尿素肥料という農業用の肥料になります。尿素肥料は田んぼや畑に撒かれ、農作物に吸収されます。しかし、吸収されなかった分は、土壌から流れ出し、琵琶湖に流れ込みます。田んぼや畑の水から窒素を取り出すことはほぼ不可能です。それが琵琶湖の窒素の原因の一つになっているのですが、他に工場廃水にも含まれます。さらに流域下水道や農村集落排水にも含まれますが、この場合の主な原因は、実は人間の尿尿なのです。下水処理場では高度処理が行われていますが、それではまだ琵琶湖の富栄養化問題に対して、不十分なです。次にリンについてです。高度処理では窒素とともにリンを取り除く作業が行われています。リンの場合、化学凝集剤を用いて沈殿させ、下水汚泥としてそのまま埋立地に運ばれます。しかし、集

ことは、地球上のリンが循環していないということなのです。実はそこに大きな問題があります。リンは、安いリン鉱石を採掘して、そこから主に化学肥料に使用されますが、この安いリン鉱石が、今世紀中に無くなると予測されているのです。科学者は、今世紀末までに石油とともにリンという資源の枯渇を唱えています。もしそれが現実となった場合、化石燃料やリンに大きく依存している農業は、果たしてどうなるのでしょうか。これは大きな問題です。琵琶湖の水質汚染には、地球温暖化の問題や、資源の枯渇問題も関係していることをおわかりいただけたでしょうか。炭素とともに窒素やリンについても、地球の将来を見据えて全体の流れを考えながら、その上で琵琶湖の水質環境の改善策が必要なのです。

人間の尿に含まれる 窒素とリンを循環の形に戻す

行政的には、まだそこまで目が向いていないというのが現状ですが、滋賀県が今後も「環境先進県」というスタンスを維持する中で、どういった知恵を絞るか

ということが非常に重要です。そこで私の提案ですが、下水道の中でも屎尿処理の方法を変えるという手立てがあります。トイレを改善して、尿(便)と尿を分離したトイレにするのです。尿は液体ですから、下水道の中にもう一本、尿管を通します。なぜ尿に着目するかは、尿が、人間の体が食べ物や水を吸収した後の老廃物だからです。便のように吸収されなかつた通過物と違い、吸収された後の老廃物ということは、人間に必要な窒素やリンなどのミネラル分がバランスよく含まれています。それを水で薄めれば、そのまま田んぼや畑の肥料になるのです。

つまり、ひと昔前の「肥えもち」です。昔の農家の人たちは、そのことを科学者がわざわざ説明しなくても、経験的にわかっていました。そして、それこそ循環型社会の原型であり、その原型に戻らなければ、琵琶湖も地球も救えないのではないかと思えます。快適な水洗トイレを全否定はしません、新しい知恵として尿尿の分離を行い、尿から肥料を作つて農業に活かす。このシステムがもし、滋賀県で実現できるのあれば、まさに滋賀

初、日本を世界を救う取り組みだと思えます。

「麦の家」に学ぶ ”循環”の暮らし

人間は食べるための農業において、窒素やリンを使っています。その窒素やリンが琵琶湖の水質汚染につながる。この悪循環を解決するヒントが、「麦の家」の暮らしにあると私は思います。「麦の家」の暮らしがりますが、実は新しくないのです。日本の伝統的な農業と環境を統一した生活スタイルと言えるのではないのでしょうか。その暮らしから学ぶべきことは沢山あるのですが、私が最も大切だと感じるのは、人間の排泄物を資源として利用している点です。尿尿を粗末にしてただ下水に流せば、環境問題の一因となります。しかし、深い知恵でもって、上手に使えば、人間が生きていく源になるということが、この家の暮らしから理解できるのです。

●対談

松井 三郎 (右)

山崎 隆 (左上)

「麦の家」主

■進行 辻村 琴美



環境と農業の統一、それを結ぶ「思想」の在り方

山崎 地球環境問題は、最終的には人間の心の問題に行き着くのでしようが、その一歩手前に命の産業として、農業という普遍的な営みがあるのだと思います。「萬世協会」の創始者である先代・松井浄蓮は、もともと農家の生まれでなく、事業家の子息でした。しかし、経済行為を自分の人生に照らし合わせてみて、これではいけないという煩悶を持って、宗教的な人生行脚をするに至りました。先代がこの地に入植した昭和20年、日本は終戦を迎え、これまで日本人が積み上げてきた価値観というもの、崩壊するのを目の当たりにしたのでしよう。日本民族の歴史、伝統、誇りといったものがおろそかにされる中、まず食えることができるならば文化も教育も語れない訳ですから、食えるために自ら耕さなければという思いで、「麦の家」の暮らしを始めたのです。もともと日本は農業国で、当時はどうすれば食べていけるかが個人としても



「わたしは公務員から転身しました」山崎さん

国としても最大の使命であったと思えますから、理屈ぬきに食えることの大切さと、そして、行脚の中で高僧と出会った経験から、食べること、鋤を持つことの中に「精神も耕す」という宗教的な見地を宿らせたのだと思います。**松井** 浄蓮さんは日本人の中に宿っていた伝統的な思想が、敗戦によって失われることを非常に心配されたのでしようね。私もここに通って学ぶうちに、理解したことがあるのですが、日本が環境問題を入り口にして国の建て直しを考えるにも、発展途上国を支援するにも、どういう思想を持っているか、ということが非常に重要だと思うの



「まだ語り足りない」松井さん

です。特に海外支援については、ただお金や技術を提供するだけでいいのかと。これは支援の現場にいる人たちも考えていることで、本当は日本の主張を伝えるべきなのです。では、日本にはどういふ思想があるかという点、日本の歴史を紐解けば、神仏融合の時代に形成された日本人独特の観念があげられると思います。ですから逆に言えば、過去のどの時点で日本の失敗点があるかといえば、明治政府により「廃仏棄釈」が行われた頃で、神仏分離によって、この国の仏教も神道もおかしくなっていくたのではないのでしょうか。しかし、我々日本人というのは、例え

ば大津の場合だと、三井寺にも日吉大社にも比叡山（延暦寺）にも慣れ親しみ、神仏融合の名残を何となく身の内に持っているんです。それを我々はもつと自覚すべきで、自分の思想について、納得がいくまできちんと学ぶべきなんです。そうすると環境問題に対しても、自分たちの思想や方法は悪くないということが見えてくると思います。

辻村 地球上の環境問題を探っていくと、根っこの方には宗教問題があるということとは、何となく理解できますが、そこに日本人の宗教観が貢献できるといふことですか？

松井 そうです。なぜなら日本には神道があり、そして大陸から道教、儒教、仏教が伝わり、歴史上、迫害された時期もありましたが、結果的にはそれらを融合させて、言ってみれば「良いところどり」で、異なる宗教を否定せず、取り入れてきた歴史があるのです。ですから、そのことを今の地球環境問題に当てはめれば、全ての宗教の

良いところを認め、一つの宗教では地球環境は救えない、だから補完的に連携して問題の解決に挑みましょうと言える貴重な国なのです。でも、そのためにはまず自分たちがこのことを理解しなければ、諸外国に発信することはできません。ですから、自分たちの思想のルーツを見直そうとしないことが、問題だと言えるのではないのでしょうか。

辻村 思想というのは、倫理でもあると思うのですが、世界に向けて語るべき日本の倫理を持ちなさいということですね。

松井 もちろん農業と神への信仰というのとは切り離せませんから。日本人の知恵が素晴らしいと思うのは、豊作や雨乞い、病平癒、火伏せ、さらに恋愛成就まで、人間が生きていく上で必要なありとあらゆる「機能」を備えた神様を創造し、そのバラバラの存在を、自分たちの生活の中で、絶妙なバランスで繋ぎ合わせてきたという点です。言い換えればそれは、それぞれの神様に祈ることによって、機能の重要性を自覚していたということになると思えます。これは仏教とは大きく異なる点で、



“サムライ”の精神を引き継ぐお二人

気候が関係しているんじゃないかと思うんです。日本人は穏やかな気候に甘えている面があつて、それが他の一神教のように厳しく貫いた思想を、この国に宿らせなかったのではないかと思うのですが。ですから、思想として素晴らしいものは持っていない、筋の通し方というか、表現の仕方がわからないということに関係しているのではないのでしょうか。

松井 おっしゃるとおりだと思います。生きる

日本人独自の思想があつたことの裏づけでもあります。心ある動物にはそういう機能が必要なんです。ですから反対に言えば、西洋のように、機能別の神様を持たないところでは、精神科医が必要になるんです(笑)。

山崎 昔は家庭の中に神棚やお仏壇があつて、神そのものというより先祖に

対しての敬意や感謝がありました。そこから人間としての善悪も学んできたと思います。昔の日本人には思想というものがあつたのに、今はそれはそれが希薄になつていくというのは、一つには松井先生が言われたように、廃仏棄釈によつて、それまでの観念が否定されたことと、もう一つは日本の温暖湿潤な気

る上での美意識とも言えると思うのですが、現代の日本人はどういう思想に基づいた生き方なのか。それを体系だてて世界にアピールすることができないから、日本人は何を考えているのか？ということになるんです。だからこそ、生きる美学をはつきりと持った侍が、外国であれだけウケるんですよ。私は



この景色を残す事がわれわれの使命



「世界にも目を向けないと地球は語れない」

これからの時間をかけて、日本人の思想というものを、きちんとまとめてみたいと思っています。

山崎 日本人の精神、思想を貫くものは何か、それを再生して精神構造を深めることが、地球環境問題の解決に向けた一番の早道と言えそうですね。

辻村 本日は幅広い内容でお話いただき、ありがとうございます。世界に誇るべき日本の倫理、これに私も期待します。

不垢不浄の

地球環境

松井三郎

● まつい さぶろう 1945年生まれ。

66年京都大学衛生工学科卒業、68年同大学院修士終了。72年テキサス大学オースチン校博士課程終了。金沢大学を経て、87年から京都大学教授。京都大学工学研究所附属環境質制御研究センター教授、センター長を勤め、07年退職。現在、同大学名誉教授、立命館大学客員教授、国連地球環境機関（GEEF）科学技術顧問。

農家

山崎隆

● やまさき たかし 1948年、富山県生まれ。67年に萬世協会「麦の家」創始者である松井浄蓮師に出会い師事。71年に大学を卒業後、公務員となる。76年から財団法人「萬世協会」専従。92年「麦の家」主宰。

● 150 麦の家 所在地／大津市坂本1丁目3

〈リーディング テーマ6—技術をかえよう〉

I will change technology

エネルギーピークに 日本はどう備えるか

——集中から分散

石井 吉徳

東京大学名誉教授
もったいない学会会長



世界のエネルギー事情は刻々と変化を遂げている。有限の資源である石油の生産ピークは今や常識で、それに備えるのは緊急の課題だ。地球資源の劣化、加速する経済、減少する後継者。どうすれば、未来が見えるのだろうか？経営者が真剣に、環境問題と向き合った。

- 「中小企業経営セミナー」長浜商工会議所主催
- 2007年6月20日

公的機関やマスコミなどがエネルギー問題を国民のみなさまにお知らせするとき、危機感や混乱を避けるために、その多くは建前論であることを、冒頭に述べておきます。お忙しい中で今日、この会場にお集まりいただいたみなさまに、私は本音をお話させていただきます。私の話にシヨックを受けられる方もおられるでしょうが、事実をしっかり認識していただくことで、環境問題を視野に入れた明日からの行動のヒントにしていただければ幸いです。

私は二〇〇六年八月に、現在の資源問題について各学問分野を横断的に統合した「もったいない学会」を立ち上げました。大量生産、大量消費の仕組みそのものを変えるために「もったいない」。日本的な感性に根差した運動を進めようという意味で、滋賀県の方はよくご存じのフレイズを学会の名前に冠しました。学会の設立当初は、百万人の賛同者を集めたいとの目標を持ってスタートしましたが、まだ一年も経過しないうちに、私たちの思いに共鳴してくれる方は百万人を軽く突破。日本もまだ捨てたものではないかと、

意を強くしています。

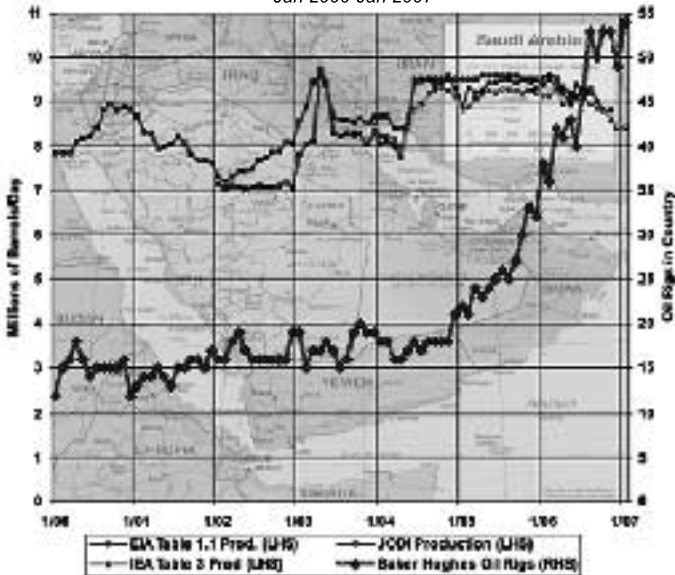
地球の石油ピークはもう来ている

古くから、人類の文明が発展してきたのは、エネルギーの有無によるところが大きいと伝えられてきています。近代文明のエネルギー源は化石資源である石炭と石油、特に現代文明は石油資源に大きく依存しています。

ただし、石油などの化石資源は無限な存在ではありません。いつかは枯れてしまいます。科学技術は有限なエネルギー資源で進歩してきました。ですが未だに工

<http://www.theoil Drum.com/node/2325>

Saudi Arabian oil production (left scale) and oil rigs in country (right scale), Jan 2000-Jan 2007



エネルギー資源そのものをつくりだすことはできていません。このことは、外部からエネルギーを補給しなくても永久に動く装置、永久機関の発明に多くの科学者がトライして、ことごとく失敗していることも明らかでしょう。

限りある地球 1984 (4.4G)
The Last Battle for Oil(Y.Ishii 2006)

A Limited Gas Earth



http://www.007.upp.se-rst.na.jp/tkyua
http://www.moftrainsociety.org



過去、科学技術の進歩の根源を支えてきた化石資源が、あえて「過去」と言いましたように、既に石油の生産量は「ピーク」を過ぎつつあります。「ピーク」とは、石油や石炭などのエネルギー資源が一番多く産出される時点という意味です。どのような資源も地球の埋蔵量に限りがあります。右肩上がりが増加していた資源の産出量が限界を迎え、下降し始めるポイントを、石油ピーク、石炭ピーク、総称してエネルギーピークと呼びます。

まず、石油資源の状況です。あまり日本では報道されていませんが、現ブツ

シュ米大統領のエネルギーアドバイザーであるマット・シモンズ氏は、二〇〇五年五月に世界の原油生産量が月産七千四百五十一万バレルでピークを記録し、同年十一月にはほぼ同じ水準のピークを達成したものの、以後は減少を続けている。さらに、世界最大の原油生産国サウジアラビアでも、掘さくりグを三倍に増設しているにもかかわらず、生産量は横ばいになっている。それどころか、近年では年率八パーセントの割合で原油生産量が落ている。ロシアも原油生産量が横ばい状態であるようです。

アメリカ国民の多くは、中東産油国の原油生産が限界に来て、世界各地の産油量が伸びるから大丈夫だという楽観論もありますが、そうではない。中東の産油国で減少した原油生産量を、他の国の原油生産量で補うことには無理があることは、信頼できる調査で明らかになっています。つまり、地球レ



ベルでの原油生産のピークはすでに過去のものになりつつあることを、まづしっかりと認識していただきたい。

日本の石油連盟は、原油供給量が減少しても、地球各地には、油の成分を大量に含んだ砂・岩石であるオイルサンドやオイルシールがあるから、あと二百年は大丈夫だと言っています。こ

れこそ希望的観測そのものです。例えば、カナダのオイルサンドの採掘現場では、タールを含んだ岩石を大量に採取してから石油タール分を抽出していますが、この作業工程では、大量の天然ガスと水蒸気とを使っています。石油原料となる地層は無尽蔵にあるにしても、石油タール分を取り出すのに他のエネルギーを大量に消費しているのです。

工程の過程で出た大量の汚水沈澱池、環境修復にも、また大量のエネルギーが必要となるでしょう。石油の確保のために、人間の創造できない自然の恵みであるエネルギーを、形を変えて浪費する。本末転倒そのものです。

代替エネルギーは 石油を補完できない

石油後は、石炭があるのではないかとの反論があるでしょうが、もちろんこれにも限界があります。石炭の埋蔵量は二〇二五年ころにはピークが来るのではないかということが、専門家のあいだでは話題になっています。例えばドイツやポーランドでは、先ごろ自国の石炭埋蔵量を徹底的に洗い直し、大幅な下方修正の報告書を出しました。石炭埋蔵量が世界で最も多いと言われている中国でも、政府発表ほど埋蔵量はないことが明らかになっています。ただ中国政府は、石炭の質が急速に悪化しているということは認めています。それだけに、エネルギー大消費国の中国では今後、公害問題が深刻さを増す

ことは言うまでもありません。私は先週、五日間ほど中国に出張してました。その間、この琵琶湖の上に見えるような青空というものを一度も仰いだことがありません。太陽も昼間なのに夕日のように赤く見えるのです。それほど現在でも中国の大気汚染、環境破壊は進んでいるのです。

資源とは

- 1) 濃縮している
- 2) 大量にある
- 3) 経済的な位置にある

質が全て：エネルギー資源
EPR (Energy Profit Ratio) = 出力エネルギー / 入力エネルギー

様々なエネルギーの価

天然ガス (これは有限)
 原子力 (核分裂 (一旦、再処理、増殖)、核融合 (遠い先の話))
 石炭 (インフラの復活、運輸が問題)
 オイルサンド、オリノコタール、オイルシェール (EPR: 専断)
 自然エネルギー & EPR: 太陽、風力、地熱、バイオマス、海洋、水力 (小水力) (バイオ燃料(EPR))
 メタンハイドレート、宇宙太陽発電 (非現実的)
 水素、燃料電池、水素社会 (水素はエネルギー源ではない)
 海洋藻類生産、石炭燃焼脱硫装置

(2007年共著)

石油も石炭の代わりに、原子力を利用すればいいのではないかとお思いの方もおられるでしょう。原子力は、石油のように輸送等が簡便な燃料エネルギー源にはなり得ません。原子力エネルギーが多く使われるのは発電分野です。日本の原子力発電量は、現在電力供給全体の三十五パーセント程度です。エネルギー全体では十パーセント程度です。原子力ですべての電力をまかなうのであれば、単純計算で現在の十倍の原子力発電所が必要になります。それを実現することは、経済、環境の問題を考慮すれば現実的とはいえません。

他の自然エネルギーはどうでしょうか。例えば水力は再生可能な自然エネルギーです。しかし、日本全体のエネルギー供給量に占める水力の割合は、わずか数パーセントに過ぎません。世界には水不足にあえいでいる国がたくさんあります。これではポスト石油エネルギーとして考えることはできません。風力エネルギーの開発技術も、まだまだ産業ベースに至っておりません。

石油ピークは 食糧・文明ピークでもある

私は以前、大学で教えていたころから、地球は有限である、資源にも限りがあると、繰り返し訴えてきました。すでに、西暦二〇〇五年に原油ピークが過ぎ去ったかもしれないということ踏まえ、まず私たちが認識しなければならぬのは、原油ピークは、農業ピークであり、文明ピークであるということです。

現在一キロカロリー級の食糧を生産するのに十キロカロリーもの石油エネルギーが消費されているのです。まさに石油を食べているといって過言ではありません。土壌を失った大地で石油を原料とする農薬や肥料を使ってコーンをつくるアメリカ農業。そこで収穫したコーンからエタノールを精製する。これでほんとうに温暖化対策になるのでしょうか。なるはずがない。そこに大きな勘違いがあるのです。さらに、コーンの価格が上がり、ストックが急激に減少している。本来人間が食べるべきものを、車に食べさせようとして

いる。まさに食糧危機を人間自らが進めているのです。

一九六〇年代には八十パーセント程度あった日本の食糧自給率は、一九九七年にはカロリーベースで四十パーセント台になってしまいました。同じ先進工業国でも一九九七年の数字ではイギリス七十七パーセント、ドイツ九十七パーセントです。アメリカに至っては百三十二パーセントもあり、余った

世界の食料自給率

年	日本	アメリカ	カナダ	ドイツ	イギリス	フランス	オーストラリア
1970	60	113	110	68	46	105	205
1975	54	146	143	72	48	118	229
1980	53	155	156	76	66	133	211
1985	53	143	176	85	74	138	242
1990	47	129	186	95	76	145	229
1995	43	129	158	89	77	134	257
1996	41	127	160	92	81	139	289
1997	41	132	152	97	77	139	287

出典:日本国勢図会 長期統計版

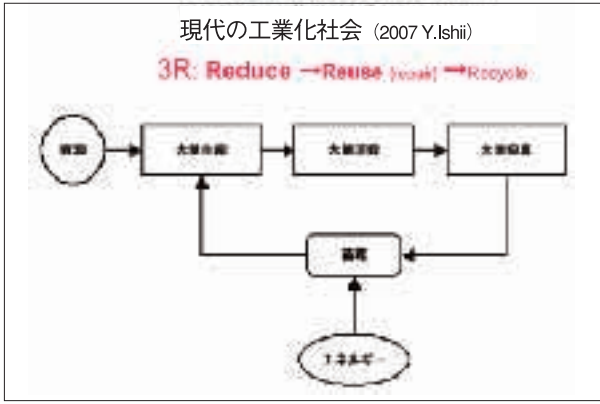
農産物を輸出します。日本の農業の弱点は農業従事者の高齢化という問題にあります。他の工業国の専業農業従事者の平均年齢が四十五歳以下であるのに対し、日本の専業農業従事者の平均年齢は六十五歳以上。石油の恩恵で成り立っている日本の農業の前途はどうなるか。漁業もしかりです。いま以上に疲弊し、食糧自給率はさらに下がり、石油が世界的に減耗すると輸入もままならない。結果、日本の食糧危機が、もう目の前に迫っているのです。

日本は一九九〇年代に、莫大な公共事業投資で多額の無駄遣いをし、一千兆円近い借金を抱え込みました。石油ピークが来ているのに、橋や道路をつくり、車社会を支えるための浪費のツケが、私たちだけでなく孫子の世代にまで負担を課すことになっていきます。ただし現代の生活、産業活動には自動車、飛行機、船舶といった交通・運輸手段は欠かせません。このための燃料が、常温で液体の石油であることは言うまでもありません。石油の不足は、日本の経済活動にも大きな打撃を与え、終戦以降営々と築いてきた優れた日本の

経済文明も崩壊の道をたどります。「石油ピークは食糧ピーク、そして文明ピーク」が、まさにキーワードなのです。

滋賀県から三方よし、もったいない精神を発信

現在、大量生産、大量消費への反省



から、循環型の社会にしていこうと、三R運動が提唱されています。三Rとは、リデュース(廃棄物の発生抑制)、リユース(再使用)、リサイクル(廃棄物からの再生利用)です。このうちリユース、リサイクルの動きはかなり活発になりましたが、三Rの運動の根底をなすリデュースの取り組みが、他の二点と比べて大きく立ち遅れています。その理由は、多くの人たちが、リデュースは経済活動を抑制する、私たちの生活がいまより不便になると考えるためです。

二〇〇〇年に制定された「循環型社会推進基本法」では、リデュースが優先順位一位に挙げられていることでも分かるように、循環型社会をつくるための一番のポイントはリデュースにあります。資源の循環にもエネルギーが必要です。資源の循環にもエネルギーが必要であることを考え合わせれば、なおさらリデュースが再認識されなければなりません。

「プランB」という言葉があります。いままでの浪費社会を続けていくやり方を「プランA」としたとき、エネルギー浪費と決別し、人口変動、気候変動を安定化させる行き方ですが、私は

日本の、自然と共存するための「日本のプランB」というものが考えられないかと思っています。つまり、脱石油戦略を構築できないかということです。

まず、その地域、地域の自然と共存できる農業のあり方をつくりあげることです。農薬や肥料も、石油や天然ガスからつくられたものでないものにする必要があります。まさに、自然と共存できる農業にしなければなりません。そうすれば、例えば、環境破壊や公害、化学肥料ばらまき型農業が主流の中国からの輸入野菜などを、国民が食べなくともよくなるはずですし、そうなるような努力が国を挙げて必要です。

日本は明治維新以降、農業を含めてあらゆる分野を、欧米にモデルを求めてつくりあげてきました。しかし日本の国土は、七十五パーセントが山岳で大陸ではない、自然の恵み豊かな森林が占めています。滋賀県も周囲を緑の森で囲まれています。自然と共生するには、こういった国土の特性を考えなければなりません。自然をよく理解したうえで、自然とどう共存するかを探るといふことです。

「日本のプランB」と「脱石油戦略」

（2017 七年刊）

- ・「エネルギーピーク」、国家のリスク管理、安全保障
- ・エネルギー戦略：EPR、時間軸の視点
- ・改革すべき現代農業：自然と共存、地産地消
- ・化学原材料の脱石油・天然ガス
- ・自然と共存：都市集積から地方分散
- ・日本は大陸でない、75%が山岳の島国
- ・運輸が緊急課題、再評価すべき日本の鉄道
- ・科学的合理的な戦略・政策、食料を車に依存しないEPR

自然は地域ごとの特性があります。この地域特性にマッチした施策を実施していくということは、地域ごとに施策が違ふということであり、地方分権につながることもあります。地方分権を進めなければ、日本は生存できいと断言してもいいと私は強く考えています。社会の原点は、社会を構成する人たちに安全な食糧を供給することに尽きます。自動車に食糧を奪われるような状態から、社会を回復させていかなければなりません。

ればなりません。運輸についても、幸いなことに日本にはまだかなり鉄道が残っています。JRは赤字路線の廃止を考えているかもしれませんが、それをしてはいけません。鉄道の利用を進め、石油資源を車に食われてしまわない社会をつくらなければなりません。

富山市では、地域の中心部の交通手段としてライトレール(軽量軌道交通)が運行しています。私が富山の大学に勤務していたころ、地元の方々と一緒に繰り返し行政に、その必要性を訴えた結果、JRが廃止しようとした路線を富山市が引き受けて実現した脱石油依存の公共運輸システムです。ライトレール

の技術はヨーロッパから輸入したものでした。年間何百万台という自動車を製造する技術を持つ日本が、どうして、ライトレールを製造する技術を持ってないのでしょうか。地方独自の生き方、環境保全を目指すなら、地域のみなさながら繰り返し声を大にして行政機関や、大企業に訴えていくことが何より大切なことです。

一九七〇年当時、日本の総人口は約一億人、エネルギー消費量は現在の約

半分でした。いまは、少子高齢化社会。社会が活力を失わないために、人口を増やすことが社会的なテーマになっていますが、当時の人口規模が適正ではないかと思っています。

サラリーマンの多くが六十歳で社会からリタイアしてしまう。あまりにも「もったいない」。まだ能力は充分持っているのですから、こういった方々にもっと活躍してもらわなければ。リタイアされた方々に頑張ってもらおうという考えがないから、少子化でたいへんだ、活力がなくなるといふ発想になってしまふのです。

一九七〇年当時の社会状況を見ても、大多数の国民は決して貧しかったり、飢えていたわけでもありません。一九七〇年の食糧自給率は六十パーセントもあつたのです。心も、いまより豊かでした。現代のように、社会のなかに殺伐とした空気も、ほとんどありませんでした。こういったことを考えると、浪費を抑え、無駄をしないで心豊かに生きる社会、エネルギーを半分しか使わない社会に戻るといふことは、決して不可能ではないのです。

地球温暖化の問題もエネルギー問題、石油問題と根は同じです。これを解決するためには、省エネルギーというレベルでは問題解決になりません。文明を根底から変えるくらいに節約をする必要があるのです。一九七〇年代の心

[もったいない] : MOTTAINAI
(2006 Y.Ishii)

- ・ 「石油ピーク Oil peak」は「食糧ピーク Food peak」、「文明ピーク Civilization peak」
- ・ 脱石油戦略 Post oil strategy: 枯場でない Not running out
- ・ 常温で液体の燃料の欠乏 End of cheap liquid fuels
- ・ エネルギーインフラの再構築 Restructure energy infrastructure
- ・ 自然エネルギーの徹底利用 Utilize all available natural energies
- ・ 分散 Localization, 無駄しない No Muda, 「もったいない」 MOTTAINAI

- <http://www.mottainaisociety.org>

豊かな社会に戻るということは、浪費をしない社会を築くこと。まだ十分に振り返ることは可能なのです。それが最大の脱石油になるといっています。

ここ滋賀県長浜市は、広い意味では近江商人の流れを汲んでいるということをお聞きしました。近江商人と云えば、三方よしの精神です。商売の精神は、売り手(自分)によい、買い手(相手)によい、世間社会にもよいものでなければいけないということですね。これは、商売において人間関係が大切だということを言った言葉だと思えますが、近代社会は、この精神を失ってきたのではないかと思えます。この「三方よし」は、私たちの学会の理念、「もったいない」に通じるものであると、私は信じています。

現在、企業の経済活動でも、私たち市民の日常生活でも、資源やエネルギーを大量に使っています。しかも、良質な資源から、目の前の、採りやすい資源からどんどん使っている。大量に生産した分、大量に消費しなければ社会が成り立たない。そういうった社会に未来はありません。未来の子どもたち

のために、いまこそ、「三方よし」の精神、「もったいない」の精神で、社会のあり方、生活の仕方を根本から変えなければならぬときなのです。

今日お集まりのみなさまのうち、まだ石油ピークの危機にお気づきのない方がおられたら、お一人でも、このことに目覚めていただければ存外の幸いです。本音を最後までお聞きいただき、ありがとうございます。

(終了)

狭き門より入る
石井玄徳

● 詳しい よしのり 1955年東京大学理学部物理学科(地球物理)卒業。石油開発産業を経て、1971年東京大学工学部資源開発工学科助教、1978年教授、1993年退官後名誉教授。1994年国立環境研究所副所長のち所長。2000年富山国際大学教授。工学博士。日本学術会議会員、日本リモートセンシング学会物理探査学会、もったいない学会(現)などの会長、(社)日本工学アカデミー科学技術戦略フォーラム代表
著書: 「石油最終争奪戦」他

意識を変え、 未来への支度



森 孝之
アイトワ

MOH report 2

I will change consciousness

「アイトワ」の暮らしに ヒントを求めて

俗世間を逃れるのではなく、消費社会の一角で循環型の暮らしを営む夫婦がいます。京都・嵯峨嵐山で、「アイトワ」の名のもと自分たちの菜園と森を育て、夫婦それぞれが自分を表現する術を持ちながら、自立と協働と共生のある生活をカタチにしてきました。

■京都市右京区嵯峨小倉山山本町1

カフェ アイトワにて

■2007年4月11日



「アイトワ」自立・協働・共生の
フラッグ



カフェ、工房、菜園、森 —
アイトワそれぞれの一片

京都・嵯峨嵐山、観光客が行き交う通りに面して「アイトワ」のカフェと人形工房がある。省エネ設計の半地下の建物。工房の二階の窓からは、ガラスケースの中の人形が澄んだ眼差しで外界を見つめている。

建物の隣に広がる菜園には幾種類もの花や野菜、金柑やアケビやダイダイ



自然食を味わえるカフェ



季節の花をめぐる

などの低木が、互いの陣地を競うかのように賑やかな表情を見せている。奥には竹やクスノギなどの高木が生い茂る落ち着いた空間が続く。「エコライフガーデン」と呼ばれるこの菜園や森も、アイトワの一片だ。

「愛とは?」「愛と環」「愛永遠」の三つの思いを込めて名づけた循環型の暮らしを、この場所でゆっくりと営んできたのは森孝之さん(68)、小夜子さん(57)夫妻だ。先の人形工房は人形作家としても著名な小夜子さんの仕事場でもある。

ここは、孝之さんが5歳の頃から育った場所。震災を逃れ、近くに暮らす伯母を頼りに西宮から疎開してきた。

「貿易商だった父は手広く事業を営み、我が家はかなり裕福だったようです。やっと男の子が授かったと私が生まれた翌年には事業を引退して、世界漫遊の船旅に出ようなんてことも口にしていたらいいですか(笑)」

しかし、戦争と父の大病で事態は一転した。

「都市爆撃を恐れた父は妻と子の行



チューリップは咲いた姿がもっとも美しい

く末を築じ、京都郊外に住む伯母を頼りにこの土地を買い求め、農業をして生き延びさせようとしたのでしよう」

女学校の教師もしたことがある伯母は、自然との付き合い方を身をもって教えてくれた。

「伯母に誘われて山菜取りに行くと、『タラの芽は、二度目に出た芽までは摘んでよいが、三度目の芽は摘むな』と言われました。木を枯らし、来年から収穫できなくなるからです。ゼンマイも『一つの株に三本は残して採れ』と諭されました」

そうした約束事を守るなら、『誰よりも沢山採ってよい』とけしかけられたそうだ。食糧事情の悪い戦時下で、村の人たちもこの約束事を守っていた。

山全体が「アイワ」
思い出のある木もたくさん



森の中はお花畑

森さんは、「人間は信頼できる」と意識を固め、同時に「どのように時代が変わろうが、変わることはない。」不易がある」と、自然の摂理の大切さに気づいた。父は人生の最盛期に結核と糖尿病を併発し、お金だけが頼りの人生になった。戦後の超インフレは悲惨だったという。母は生まれて初めて握った鍬を振るい、黙々と働いた。二人の背を見て育った森さんは、「お金よりも土地。土地を生かした生産や創造を当てにする」ようになったという。

商社マンの仕事と並行して 続けた菜園と森づくり

「父はきれいな空気のおかげで8年の闘病生活を経て、起き出せるようになり、世の中も次第に豊かになっていきました」

その一方で、畑は放置されススキやウルシが生えるにまかされるようになった。森さんは18歳の時、荒れた土地の再開墾に手をつけた。そして、自宅から通学できる国立大学なら進学してよいと許され、デザインを志して京都工芸繊維大学に入学した。同時に20歳



木立を歩く清静しさ

まで生きた記念として20本の苗木を植えたが、これが植樹活動の始まりとなった。その後、日本は高度経済成長長期に入り、62年に大学を卒業したが工業デザイナーは引く手あまたの時代だった。

「時代の波もあつたし、運にも恵まれていたのでしょう。アイウエオ順求人リストの二番目にあつた伊藤忠商事に入社することになりました」

配属された繊維部門は、歴代のトップを輩出した部門だったが、構造不況に苛まれ次第に苦しい立場に追い込まれた。そこで、部門の取り扱い品目を綿や生地などの原料から製品に転換することを提案し、見事に採用された。衣服の既製品化に乗り出したわけだが、これには工業デザインの手法を生かすことができた。次にソフトウェアの開



さくらの頃、さくら吹雪が味わえる

発が必要だと訴えると、入社8年目に子会社を設立し、牽引する役回りを任された。ファッションを囃し、消費を促す役回りだが、心はむしろ「流行よりも不易の大切さ」に惹かれていた。

「サラリーマンをしながら、休日はずべて畑仕事と植樹に割きました。時代に逆行していると笑われましたが」

そして次第に、売上げや利益を目的にして動く会社のあり方への疑問や、資源小国なのに消費を競い合う社会への不満が高まり、次の生き方を模索するようになる。73年から、ポスト消費社会へ移行することを会社で提唱し、「その牽引役を商社は次の役割にすべきだ」と訴

えるが、心の豊かさに転換する提唱は聞き届けてもらえなかった。

「だから目に見える形にして示したくなつたんです」

生かしかること—エコライフ ガーデン「循環」の仕組み

1000坪の敷地を生かし、柿やミカンなどの果樹や、クスギや檜など燃料や建材になる樹種だけでなく、山椒や月桂樹などの香木、キハダやカリンなどの葉木、ウコギやトチュウチャなどの食材木をはじめ、樫やサザンカで生垣を、竹は畑の作物の支柱にも生かすなど樹種を広げた。

家屋の南側にはスモモや楓などの落葉樹を配し、夏は木陰を作らせ、冬は葉を落として家屋や犬小屋に陽光を注がせる。やがて木の実や花の蜜を狙ってやってくる小鳥やタヌキなど野生動物が山桜やモチ、ハゼなどの種蒔きをする。ミツバやセリ、フキなどが自生し、ナズナやゲンノシヨウコなど野草もゆたかになり、七草粥や沐浴材も庭の野草でまかなえるようになった。

排水も分別し、生活から出る生ゴミや尿尿などすべての有機物や落葉を肥料にした。樹木や野菜を育てる庭造りだ。家屋に悪影響を及ぼす山裾の湿気を抜くために暗渠を埋め込み、山水を水槽に

ためて金魚を住ませ、いざという

時の飲料にも使えるように心を配りながら庭の水やりに生かす。

屋根には薪風呂や薪

ストーブの煙突、温水器やソーラー発電機、各種の天窓や草屋根など、ローテクからハイテクまでさまざまな工夫が施された。

「農業社会は木材資源に、工業社会は化石資源に寄生しましたが、ポスト消費社会はそれらの元である太陽の恵みと生命システムの生かし方が課題」 「アイトワでは、先人の知恵と近代科学の成果を組み合わせ、太陽の恵みの範囲内で豊かに生きる工夫を重ねた」 「生活を豊かにする庭造りが、家族を健康にし、近隣を潤すことに気付かされ、エコライフガーデンと呼ぶことにしました」

水と花びらと金魚





丹精込めて花に語る

意識を変えない限り、
現象を見ても変わらない

森夫妻のエコロジーライフは、循環型社会や自給自足、ナチュラルといったテーマを掲げるメディアでも、数多く取り上げられてきた。森さんもこれまでに数冊の著書を執筆するほか、講演やポスト消費社会を勉強するアイトワ塾の活動等を通じて、アイトワからのメッセージを社会へ送り続けている。88年に出版された初の著書『ビブギオール・カラー』ポスト消費社会の旗手たち』



緑とお人形が調和して

ディゴ)の造語で表現した。循環型社会と経済型社会は、とかく正反対の世界としてイメージされる。それゆえ、両方の世界でエネルギーを出し

(朝日新聞社)では、工業社会が生み出したホワイトカラーやブルーカラーなど単色型の人が主役の時代は終わり、多彩な人が主役となって切り開く社会の到来を予告し、それを虹の7色の頭文字をとった「ビブギオール・カラー」(VIBG YOR ※Iはイン



小女子さんの愛するお人形

てきた森さんのバランス感覚が、生き方の手本として注目を集めている。それについて森さんは「意識を変えない限り、現象を見ても変わらない」と言う。「商社マン時代の仲間には、この森を訪れて、維持管理の費用をどうやって貯め込んだのかと聞く連中もいます。実際に生涯収入の半分は相続などの税金に持つていかれましたが、『僕は生ゴミや尿尿を定期預金に、樹木や野生動物を運用係にしてたんだよ』と答えるんです。そうすると、俺も若い頃からやっておけば良かったと、気づく仲間が結構いるんです」

気づくことこそ新たなスタートの瞬間だ。あとは自分のペースで前に向かって歩くのみだろう。遙か前方に行く森夫妻も、歩くという点では同じなのだ。時には、勝手に庭の花を摘み、それを



お気に入りのお人形を手に小夜子さん(右)と孝之さん(左)

注意すると逆上するような一部の観光客に心を痛め、それでもアイトワが未来のために、幾らかの影響を社会に及ぼすことを願って、自分たちの姿勢を崩さずに歩き続けているのだ。

50年近くの時がかかったものを、即座に真似ることはできないが、例えば我が家流のエコシステムを一つ始めることで、家族と過ごす時間、交わす会話など変わっていくものは多いはずだ。そんな近い将来をイメージして、循環型の暮らしに入門してみてもどうだろうか？

自然の摂理に学ぶ 森孝之

● もり たかゆき 1938年兵庫県西宮市生まれ。1962年京都工芸繊維大学卒。同年伊藤忠商事(株)入社。1978年同社依願退職。1979年(株)ワールド入社後、社長室室長を経て取締役。1980年(株)ノールグー(関連子会社)社長兼務。1986年西社の役職を辞任し、翌年に(株)アイトワを設立。1992年大垣女子短期大学デザイン美術科教授。学長職を経て、2003年同大学名誉教授。現在はライフスタイルコンサルタント、エコロジストクラブ会長。
著書に『ビギンオール・カラー』ポスト消費社会の旗手たち(朝日新聞社)、『人と地球に優しい企業』ブランドを創る 商標・サービスマーク育成の精神(ともに講談社)、『このままでいいんですかもうひとつの生き方を求めて』(平凡社)、『思い』を売る会社 こんなモノづくりが消費者を動かす(日本経済新聞社)、『庭宇宙 嵯峨野・アイトワ・幸せのすむ庭』(遊タイム出版)、『次の生き方 エコから始まる仕事と暮らし』

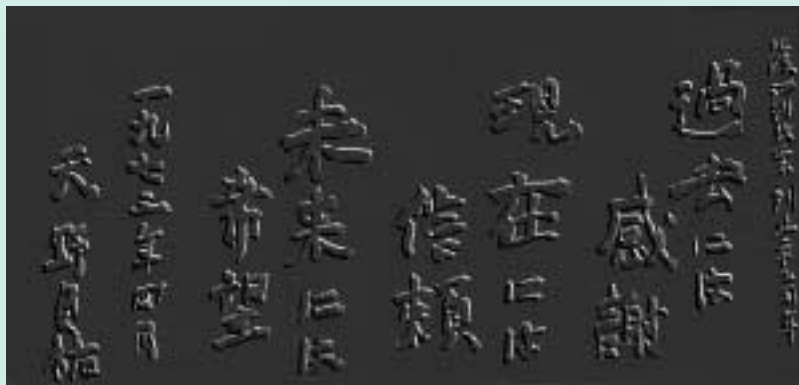
(平凡社 など)。



● アイトワ所在地／京都市右京区嵯峨小倉山本町1 〒616-8009
TEL / 075-8881-5521
<http://www2.pala.or.jp/Mechaniz/aihtowa/>

編集部からのお知らせ

※アイトワの定休日毎週火曜です。エコライフガーデンの見学については、見学できる範囲・ガイドの有無等により3つのコースに分かれ、それぞれ料金が異なります。また、ガイドを希望される場合は事前の予約が必要です。ホームページを参照もしくは現地にてアイトワのカフェまでお尋ねください。



天野貞祐先生直筆の社是

〈リーディング テーマ8—企業をかえよう〉

leading theme 8 — I will change a company

『過去には感謝、現在には信頼、 未来には希望』を社是として ～新江州の60年～



森 建司

新江州株式会社 代表取締役会長

新江州株は今年六十周年を迎えた。この機会にその軌跡の一端を振り返ってみたい。

【初代・森嘉七、文化事業を興す】

わが社は、去る創立二十五周年記念に、天野貞祐先生の言葉に感銘を受けた中川菅雄元社長が、直接、天野先生からご揮毫をいただき、それ以来この『過去には感謝、現在には信頼、未来には希望』を社是として掲げ、社員が集まるたびに唱和し、この気持ちを忘れず社業に、経営に当たってきている。

この言葉は簡潔明瞭である。わが社を、あるいは自分を今日まで守り育てて頂いた、「過去」に対してただ感謝あるのみ。そして「現在」には不信、懷疑、不安に陥ることなく全幅の信頼をもってあたり、「未来」に対しては悲観を捨て、ひたすら希望を持ち続ける。これは私たちの生き方、生き様に対して本当に力強く励ましてくれる名言である。ただ、この言葉は現実の中の出来事に、そのまま当てはめて良いものではない。日常の様々な困難にぶつかり疲

れ果て、恨みや、疑い、絶望などに打ちのめされそうになったとき、原点に返ってこの言葉を思い出してみる。口に出して唱和してみる。

その時、はつとわれに返り気づかせてくれる、基本的な生活倫理なのである。これからも新江州の続く限り、この理念を忘れずに全社員が胸に刻んで前進していきたいものである。

わが社は戦後間もない昭和二十二年に紙販売会社としてスタートした。創業者森嘉七が軍需産業に沸いた時代から、敗戦により百八十度転換する価値観の中で、「紙は文化のパロメーター」の言葉どおり、「これからは文化の時代だ。紙の需要は拡大し続ける。紙販売は社会貢献につながり、継続するには理想的な仕事なのだ」との信念で開業したと、私も創業者から聞かされてきた。当時は文化を支える情報の手段は紙以外には、わずかにラジオ放送があった程度の時代である。紙の需要は期待通り増え続けた。

ちなみに紙は大変な重量物だ。紙の納入先は学校、印刷業者、文房具店、

紙加工業者などだった。創業当時、社員は運搬車と呼ばれる大型の自転車で、この重量物を積んで駆け回った。

やがて時代が落ち着くとともに県内でも食品や、日用雑貨、家電製品、プラスチック製品などの製造が始まり、わが社も包装資材の取次ぎ販売を開始し、地域密着型の企業として定着して行った。また創立後十年あまり経って、お客様の要望もありタンボールケースの製造販売も併業した。

戦後の極端なもの不足の時代から、わが国は高度成長時代へと入り、経済にとっては絶好の時代が訪れた。零細企業からスタートしたわが社も、栗東事業部をはじめ拠点開発に乗り出し、「毎日訪問、毎日配達」を合言葉に、地域企業に密着する営業活動を続けた。増産、拡大を続ける客先の購買代行業として、また幅広い仕入れ情報をもとに包装設計、資材に関する情報提供も事業の一環として重視してきた。

そのころ行動の原点として『始末、算用、才覚』を良く教えられた。物事は始末が肝心、始末には節約という意味と、

なく「損して得とれ」の算用もあるということだ。また一人ひとりが自分の才覚を働かせよ、指示待ち族では駄目だということだろうか。古くから商人の心得として言われてきたものだ。

【二代目・中川菅雄、 会社の基礎を成す】

わが社にとつての大きな転機の一つは、中川菅雄社長の時代に行われた、タナベ経営の指導による管理会計、目標管理、方針書管理の導入である。戦後創業した中小企業は、下請け企業として、地場産業として、あるいは、卸小売業として個人経営から拡大してきた。それにあわせてマネジメントの確立が必要になってくる。経理処理は出来ていても、目標管理であるとか、部門別業績の把握とか、全社員に周知徹底するシステムとか、方針書管理など、初めて学んだ私たちにとつて、これは新鮮な驚きであった。また総務関連にはメインバンクから迎えた人材たちによつて、労務、総務の充実も図ることも出来た。こうして次の段階に発展する基礎作りは構築されたといえよう。

【三代目・森建司、 多角化経営を操る】

私は社長に就任した時、一つの大きな夢をもつていた。それは中堅企業としての条件を構築して、上場企業を目指すことだ。昭和の末期から平成のはじめにかけて、わが国はバブル経済の時代を迎えていた。製造業の拡大、不動産への投資、サービス業の展開、グローバル化の促進。その右肩上がりの状況は、半永久的に続くのは間違いないものであるかのような錯覚を日本中がもつていた。

わが社はマネジメントも、人材も、ベースになる事業も安定的に維持されている。その間に、拡大戦略として新時代対応型の企業内ベンチャーを起そうと、多核化の戦略をとつた。わが社は需要の集中する大都市に立地しているわけではなく、一地域から広域的に拡大するためには、コア技術として得意とする製品を持つているか、多核化による総合力の発揮しかない。

私たちは四十五期に百億円の売り上げを上げる事を目標に、長期経営計画

を策定した。その時の事業理念は「IC事業理念」である。

「われわれは常にユーザーに対し

真の消費者主義（C）に基づき

価値ある情報（I）の伝達と

顧客の利便性（C）を第一義として

商品と情報とサービスを提提供する」

これは、多核化戦略をとるための手段として、商品と情報、サービスを取り扱っていく、ということを示すと同時に、その取り扱い方を示したものだ。事業展開を図ろうとする場合、先ず今日のな社会環境で（真の消費者主義）とは何かを考え、乱れ飛ぶ関連情報や商品、サービスの中から、お客様に価値あるものを選び出し、地域密着型企業としての利便性を果たしながら提供していく、こういうものである。

この多核化戦略でいくつかの新事業を起こしてきたが、試行錯誤を重ねつつ、現在も進行中である。一方、コア技術も、過去の紙加工から製造業への転換が前提となり苦戦を続けている。しかしやがて近い将来に成果をあげ確固たる企業基盤を作り上げ、名実ともに中堅企業と成る事を信じて疑わない。

〔四代目・草野勉、人と会社を育てる〕

現在は草野勉四代目社長が「人を大切にする」を経営理念に掲げ、「自立」を合言葉に経営を進めている。二十世紀後半のわが国の経済は、戦後の貧困から豊かな社会を目指し、一筋に経済成長を遂げてきた。わが社も世間の片隅ではあったが、この時代の流れに沿ってそれなりの成長をしてきた。その間、経済（言葉を変えて言うとき金儲け）が大きな目標になってきたことは否めない。勿論これはわが社のみでなく、社会全般がそうだった。経済成長とは企業が利益を上げることであり、社会資本が充実することである。そのために人が犠牲になることもなかったとはいえ嘘になる。新しい時代は「人を大切」にし、人の幸せを実現する社会でなければならぬ。そのために経済がある程度、抑制されることも受け入れざるを得ない。その理念を持って二十世紀に挑戦しようという考え方である。

〔次代、循環型社会対応企業へ〕

さて今後の企業展開を考える上で、最も注意すべきは今後の社会変革に対応して、どう判断し対応するかである。未来社会のことは正確に誰も予見する事は出来ない。しかし、現代社会の様々な問題に注目するならば、未来社会の一角は個人の嗅覚をもってしても、おぼろげながら見えてくる。

地球温暖化現象、それに伴う、水、食料問題。エネルギーをはじめとする資源枯渇、増大する人口問題。一方でグローバル化が進む中、国際紛争は後を絶たない。大量システムを武器として、戦い続ける拡大経済社会の行きつく先はすでに見えている。新しい社会に移行する事は疑いのない事実だ。

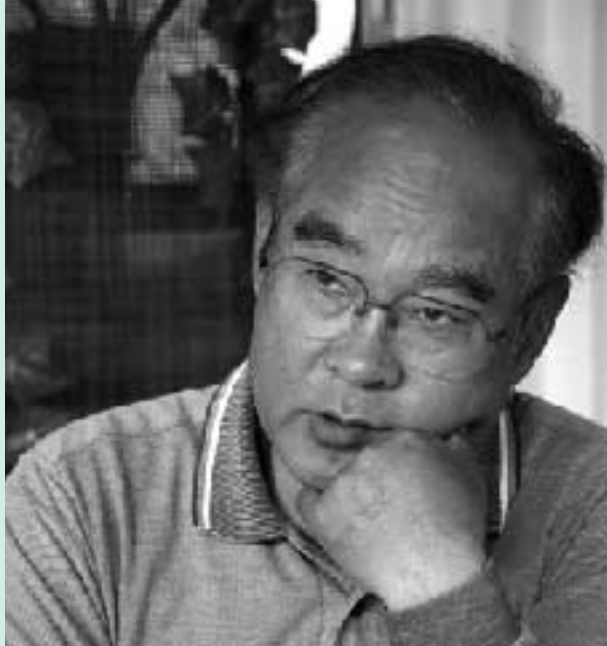
そして、その目指すべき、次なる社会像は、循環型社会であると言う事は共通の認識になりつつある。循環型社会の具体的な姿は霞のなかだが、私たちは、その来るべき未来社会を生き抜くためには『もったいない（循環）、おかげさま（共生）、ほどほどに（抑制）』の倫理思想が、行動をおこすときの判

断基準にならなければならぬと考えている。この考え方で、自然界に調和して、人として、企業として存在することができれば、わが社の未来は百年二百年と、維持継続が可能であることは間違いない。

※編集注 天野貞祐博士は明治十七年生まれ。カント研究家の第一人者。京都帝国大学卒業。同大学助教を経て、第三次吉田内閣文相に就任。獨協大学の初代学長。昭和五十五年逝去。文化功労者、勲一等旭日大綬章授与。野球殿堂入り。

勇気凛々
いの壁を打た破れ
森 建司

●もりけんじ 1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州(株)代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など。著書「吃音はななる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎



小杉 長男

ファーマーステーブル 有限会社 小杉農園
代表取締役社長

「農地を守る 企業的」農業

ニュースレポート3
〈ヘリテイディングテーマ9 人をかえよう〉

news report 3

I will change a person

小杉農園の取り組みから

将来的な食糧問題や、農業離れによる農地の荒廃が全国的に見られる中、企業的な農業法人の活躍がこの国の農業を変えようとしています。

体と心と土の「三づくり農業」を宣言する小杉農園の小杉長男さんに、農地を守ることの大切さや、農の担い手を育成するポイント、テーマについてお話をうかがいました。

■東近江市五個荘竜田827

小杉農園

■2007年5月16日



小さな苗が始まりだった

農業の仕組みを変える モデル作りに挑戦

国道8号を道1本西へ入った旧五個荘町竜田の一角に、小杉農園の敷地が広がる。野菜苗や花苗、色とりどりの鉢花をはじめ、米や農産加工品、土、肥料等が揃った園芸売り場。苗物を育てる13棟のビニールハウス。ログハウス付きの貸し農園。その奥にはグランドゴルフ場と屋根付きのパーベークュー広場があり、さらに共同圃場と市民農園用に35㎡ずつ区切られた個別圃場からなる大きな畑。さながら、農業王国といった雰囲気だ。

この農園の主である小杉長男さん(57)



売店には野菜、苗、加工食品が豊富に並ぶ



コテージを借りて農園作り



グランドゴルフでチームワークつくり

は、今から遡ること18年前、平成元年に野菜苗と花苗の生産をスタートした。町内の農家に生まれ、高校卒業後、地元との農協に就職。昭和63年に途中退職するまでの20年間、農協職員として地域の農業と関わってきた。しかし、早い時期から農協の在り方に違和感を感じていたという。

「後継者不足の農家が、農業に見切りをつけて農地を売ったと聞くと、そのお金を農協に預けてくださいとお願いにうかがうんです。それが農協の仕事だと皆が思っているんですが、本来はその農地を売りに出さなくても済む方法を考えるのが自分たちの仕事じゃないかと考えていました」

農協は、地域に密着した組織であるとともに、稀有な巨大組織でもある。一人の声で組織を変えることは不可能であり、小杉さんは農協を離れ、地域の農地を守るために、農業の仕組みを変えるモデル作りに挑むことを決めた。

ビジネスの世界で、 農家は軽んじられる…

「最初の年、20万本の苗づくりから始めたのが小杉農園の始まりです」

20万本の苗のうち、10万ポットは直売し、10万ポットは農協時代から顔見知りの業者が引き取ってくれるはずだった。

「出荷の時期になり、いざという時になって、その業者が2万本しか買わないと言いました。口約束しか交わしていませんでしたから、相手は何か問題があるかという態度です。私は法律も少し勉強していたので、口約束であっても契約が成立することはわかっていたのですが、争うのが馬鹿らしく思えてしまっただけです。それよりもビジネスの世界で農家がいかに軽んじられるか、そちらの方がショックだったんです」



季節の花を愛情かけて育てます「何種類あるのかしら？」

結局、残った8万本の苗を買ってくれたのは、地元のお年寄りたちだった。

「お年寄りは農地を大切にするんです。わずかな面積でも、そこにナスの苗を5本、キュウリを5本と何かを生産するんです。今もこういう人たちこそが、私の一番のお客さんだと思っています」

苦い経験が発奮材料となって、小杉さんは農家が生き残るための手段を模索し始めた。

「癒しの農業のイメージは、20数年前から頭の中にあったんです。当時はバブル期で、経済が沈み込んだ時、みんなどうやって生きていくのだろうと思っていましたから。農作物を作るだけでは生き残りは難しいですが、消費者のニーズがどこに

あるかを考えた時、癒しや触れ合いといったキーワードで、農業が見直される時期が来るんじゃないかと予感したんです」

小規模農家から、 大型化、組織化、 ビジネス化された農業組織へ

農業をビジネスとして確立するには、これまでのような小規模農家では難しいと小杉さんは言う。

「昭和44年に減反政策がとられましたが、僕はこれで将来的に小規模農家は駄目になると感じました。兼業農家でも、農業機械を購入するのは農業所得からじゃない、会社から貰ったお給料です。厳しいけれど、家族単位で和気あいあいと営む農業の時代は、終わろうとしているんじゃないでしょうか」

農村地域から、そうした光景が失われるのは辛くもあるが、それでも農地を守るには、大型化、組織化、そしてビジネス化した集落営農的な取り組みが必要だという。

「僕の父親というのは、今から45年



鉢植えミニトマト



地元の野菜をふんだんに



春は竹の子、新鮮です。



養鶏家のさくら卵

そこで、小杉さんが今もっとも力を入れているのが、担い手の育成だ。

人材の育成—若手と団塊の世代、地元の人間による農業バランス

ほど前に、既に集落営農を地域で実践していたんです。でも当時は、自分たちが若かったこともあって、担い手を育成するという視点が欠けていた。滋賀県は集落営農の先駆地でもあり、今も800近い組織があります。しかし、30代のメンバーがいるのは、そのうちわずか3%にも満たないんです。60代後半、70代のメンバーが助け合いの精神で組織を守っているけれど、それでは先が長くないです」

数年前から共同圃場を使って「農業塾」を開設し、家族単位で塾生を募ってきました。まったくの農業初心者から、さらに一つ上の農業をめざす家族まで、レベルは異なるが、県外からも本気で農業をやりたいという若い家族が集まった。

「そういう家族が農業で食べていけるように道をつけてあげることが僕の使命じゃないですかね」

本格的に農業を始めるとなれば、農業機械の購入など2千万円近い元手が必要となる。農地を借り入れようとしても、よそ者に農地を貸そうという農家は少ないだろう。しかし、小杉農園のように地域の者が間に入ることで、問題を解決することが可能になる。

「農業をやめて、農業機械を眠らせている家も多いんです。この先、農業をやめようにも、農地をどうするか悩んでいる家もあります。そういったところと結びついて、農地の所有権は元の持ち主のまま、農地を守る人、米を作る人を我々が投入するんです。できた米については、僕が責任をもって販売します」

現在、小杉さんは全国で1700近く

の農業法人が加盟する「社団法人日本

農業法人協会」(平成11年設立)の滋賀

県代表を務めている。その会員法人のほとんどが、小杉さんの描くビジネスモデルに同意見だという。

「農地を守ることを、人を育てることが全国共通の課題なんです。その中で、僕はこの秋にも4、5人で組織を組み立て、実践に移すつもりです」

農業の担い手として、小杉さんはフリーターやニート、そして団塊の世代にも注目している。

「若い世代の中には、こういう仕事があること自体を知らない人も多いんじゃないですかね。中には、農業は自分の性に合うという若者が必ずいると思うんです。団塊の世代は全国で700万人とも言われますが、アンケートによるとそのうち4割近くが趣味として農業を考えているんだそうです。60歳ですよ。あと10年は十分に働けます(笑)。労力的にというよりも、経営のノウハウを提供してくれるブレイクの役割を期待しているんです。そこに地元の人も加わってもらえれば、地域とマッチした農業ビジネスが確立できるはずですよ」

日本の農地を消さないために

小杉農園は、去年4月から「道の駅びわ湖大橋米プラザ ファーマーズテーブル」の指定管理者となり、新たな仕事に加わった。

「ここはお米が物凄く売れるんです。駐車場をもう少し広げれば、滋賀県の農産物と近江米をもっと沢山の人にアピールできるんじゃないかと思っています。『新規のお客さんをリピーターにしてこそ、本当においしい近江米と言えるんですよ』と、スタッフを鼓舞してます(笑)」

小杉さんが、未来の農業に寄せる思いを聞いてみた。

「僕らの世代は、無農薬とかあまり考えずに米でも野菜でも口にしてましたよね。この歳になっても生きていますから、それはそれでいいんですが(笑)。でも、自分の子どもや孫の代を思うと、安全なものを食べさせてあげたいのと、食べるものがないという状況だけは絶対に避けられるようであって欲しいと思います。そのためには長いスパンで物を考えなくちゃいけない。食糧問題が現実になった時、それを救える仕事

として、今から誰かが農業を本気でやらなければならぬんです」

日本の農業はターニングポイントを迎えようとしている。単なる生産者から、企業的な生産者へ。本当の意味での産業化が進めば、日本の農地は決して失われることはないだろう。

●おすぎ おさお1949年旧五個荘町生まれ。高校卒業後、地元農協に就職。88年に退職し、翌年、野菜苗と花苗の生産を始める。96年に小杉農園を有会社化し、00年に県と旧五個荘町の支援を受け「夢のふるさと村」として市民農園を開設。88年4月から道の駅「びわ湖大橋米プラザ」(大津市)の指定管理者となる。

●ファーマーズテーブル 有限会社小杉農園
●所在地/東近江市五個荘電田827
〒5029-1142-1

TEL/0748-448-2604
http://www.kosujinon.com

「湖北職人村構想」 来秋開村



清水 陽介
エコワークス 代表



松本 茂夫
農業生産法人
大戸洞舎(おとふらしゃ) 代表

news report 4

I will change a job

独立独歩の「どっぼ村」

日本の国土の7割を占める中山間地域の多くが高齢化や過疎化、農林業の衰退など深刻な問題を抱えています。そして森林の荒廃や耕地の放棄が、既に環境問題へと発展しつつあります。中山間地域は、本当に人間が暮らしにくい場所なのか？ その潜在的な能力と価値を引き出すため、ユニークな試みが湖北町で始まりました。地域の自立と若者の自立を掛け合わせた「湖北職人村構想・上山田どっぼ村」についてレポートします。

■湖北町上山田
農業法人 大戸洞舎

■2007年4月10日



「いよいよスタート！」

「家も建てる農家」と 「米も育てる大工」が仕掛ける プロジェクト

戦国武将・浅井長政の城があったことで知られる小谷山の麓、湖北町の上山田集落で現在、「湖北職人村構想」が進行しつつある。プロジェクトの第1ステージは2008年の春に開村を予定する「上山田どっぽ村」だ。「手に職をもった百姓」の自立を支援すべく、農業と建築の仕事の現場で働き、学びながら、個人として自立できる人間を育てることを目標としている。

プロジェクトの発起人は、片や「家も建てる農家」の松本茂夫さん(55)と、片や「米も育てる大工」の清水陽介さん(52)の兩人だ。生まれも育ちも上山田の松本さんは若い頃、一旦この地を離れ他所での生活を経験して帰郷。その後、農業で生計を立てるべく農業生産法人「大戸洞舎」を設立し、地元 of 農業を取り巻く空気に新たな風を吹き込んできた。農閑期には自宅建物をはじめ、作業所などの建築を手がけ、まさに百姓的生き方を実践する人物だ。

ちなみに、ここでいう百姓とは農民、農作業の意味にとどまらず、生きるために必要な様々な仕事を一人でこなす人のこと、つまりオールマイティな技能を身に付け、必然的にその土地の自然や風土に精通した個人を指す。

清水さんについては、本誌第16号に掲載した嘉田由紀子滋賀県知

事との対談の中で、M・O・日の会の森代表が『：彼はアフリカの発展途上の国々を自転車でまわり、現地の貧しい人々と生活を共にする中で、自分はやはり農業と建築をやろうと心に決めて、日本に帰ってきた経歴の持ち主です。彼曰く、農業と建築が人間の原点だと言うんですね』と触れたように、21歳の時に日本を飛び出し、世界およそ20カ国を自転車で旅した経験を持つ。現在は余呉町で「エコワークス」という名の建築工房を4人の弟子とともに手がけ、効率性だけではない家づくりが各方面から高い注目を集めている。

このエコワークスの思想と姿勢のもと、大戸洞舎のサポートを得ながら、地域の中で「働くこと、食べること、暮



自生するワサビ

らすこと、交わること」にまで受け皿を広げ、若者と中山間地域の潜在的な能力、価値を最大限に引き出そうというのが、構想の骨子だ。

清水さんの自転車の旅の頃にまで遡り、今なぜ「手に職を持った百姓」の自立支援に乗り出すのか、その思いを聞いてみた。

自分でできることは自分で する働き方と生き方を伝道

もともと人と交わることが苦手だったという清水さんは、自転車を相棒にあちこちを放浪するのが好きな青年だった。日本全国をほぼ回り終えたところで、延長線に海外へ向かうことを思いついた。

「風景は人の手が入るから美しいんですよ」
木を育て、田を耕す、水を守り、作物がなる。





囲炉裏もある、大戸洞舎の名称は地名から名づけた。家は松本氏の作

「1日に何キロ走破するか数字的な計画なしに、インドを出発してただ西へ向かえばヨーロッパだという至極単純な旅でした」。

綿密な計画のない旅であったからこそ、「自分で考えて行動する」「自分の足で動く」パターンで鍛えられた。旅の途中で出会った人々や目にした光景をフィルムターに、いろいろなことが考えられたという。

「サバンナのデコボコ道でトラックの荷台に自転車ごと乗せてもらったことがありました。ホロの中に20人近くを詰め込んで、悪路を猛スピードで走るんです。そんな状況でも、母親の乳房を無心に吸う子どもの姿があったり、たくましいんですね。こういう社会と日本は同居しているんだと気づくシーンが幾つもありました。中には今も自分の中で消化しきれていないものがあります」

生の実感と人間が秘める可能性への気づきが、一人でも立つことのできる生き方へと清水さんをいざなった。

「25歳で帰国した後、何か物をつくるところに身を置こうと考えると、大工の

棟梁に弟子入りしました。普通の人ができる仕事の中では一番大きなサイズですし、一人で完結できる仕事だと思っただからです」

しかし10年間、棟梁の下で働くうち、今の型に自分のやりたいことが当てはまらないことを感じた。物をつくるための原始的な労働は合理化と効率化の隅に追いやられ、立派な家を建てることを最優先する施主や大工、社会の感覚に違和感が募っていた。

「家は立派でなければならぬとか、大工さんだけが家を建てることができるとか、それは与えられたイメージなんですすよね。豊かさや労働することに、まず先にイメージができてあがつていて、自分らしさや自分の満足、自分自身の問題としてどうなのかという捉え方をする人があまりに少ないように感じました。先進国はこうだとか、都会はこうだと比べる範囲を広げ過ぎたことで、結果として自分で自分のエネルギーを削ぐような方向に、この国は向かっていったんじゃないでしょうか」

自分が思う生き方へより近づくため、一旦は大工の仕事を離れ、会社勤めの

回り道もした。その間に生まれ育った長浜市から余呉町の中河内集落に転居し、農業を始め米を育て自給自足的な暮らしを整えていった。ようやくエコワークスを立ち上げたのは、今から8年前のことだ。

「世の中に対する反撥心ではないんです。ただ自分でできることは自分でするという働き方や生き方のできる人が、もう少し増えないとまずいんじゃないかという思いがあったてそうしたこと。今、その思いが社会の中で旬を迎え始めた気がします。思いをあきらめない、しつこさは自転車で培われたんでしょね。ペダルを踏むのを止めたら、全く前に進むことができませんから」

自転車とともに、待つことを教えてくれた農業はこれからもエコワークスと並行して続けていくのだという。

「建築一本に絞ると建物に固執したり、お金儲けについて走るんじゃないかという気がします。自分の思いがぶれないようにするために、土に触れることは必要な労働なんです」

本気でやろうとする人を 社会に増やすための職人村

エコワークスは在来工法とも呼ばれる木造軸組み工法で注文の家を建てる。

その際、「墨付け（※削る場所などの線材木に引く）」や「手刻み（※ノミで削っていく）」など今ではほとんど失われつつある作業を、工法本来の工程に忠実に行う。同様の工程を固持する同業者は減ったとはいえ、まだまだ全国に存在する。しかし、その多くが日本建築の伝統を意識するのに対し、エコワークスは現在の先にある循環型社会を意識し、機械化や分業化に依存しない建築に不可欠な工程として、これらの作業をチョイスしている。その点にスタンスの違いがあると言えるのではないだろうか。

地域の山、ひいては国の林業を守ることにつながる国産材へのこだわりも、風の通り道など空間を工夫して設備機器を必要最小限にとどめることも、エコワークスの家づくりは循環型社会から逆算した要素で成り立っているのだ。高い意識で建てられる家は価格も高いと

思いがちだが、価格は坪40万円弱と比較的、低価格で提供されている。

「本気でやろうと思ったら、誰にでもできるんです」

家を建てること、米を育てること、自立することのすべてを込めて、清水さんはそう口にする。そして、本気でやろうという人を増やすため、仕事の中に教育機能を組み込んだ職人村の構想が出来上がった。



清水氏のアイデアノート「やりたい事が多くて・・・」

自立を遂げた人に待っているのは、安心感のある自由…

もう少し具体的に紹介すると、職人村の「働く」はエコワークスで建築の仕事に携わることからなり、「食べる」は大戸洞舎を集いの場に農家料理や陶芸などを題材にしたイベントで地域の



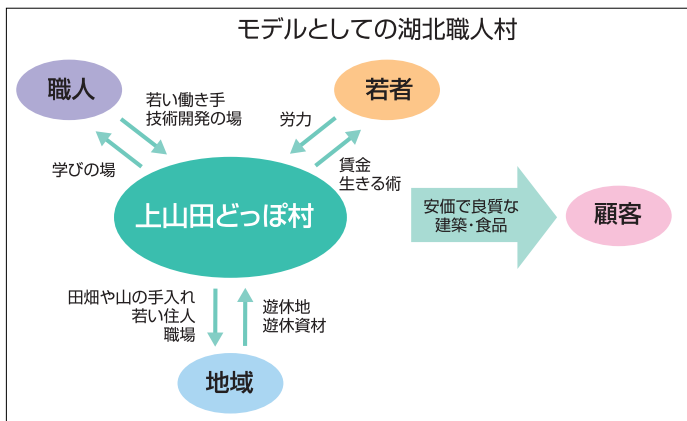
こうして各地の仲間が集う。手打ちソバも賞味できる。

人たちとふれあうことと、大枠でのカリキュラムが設けられている。学び舎兼エコワークスの新たな工房となる建物も今秋に工事を着工する。春には鶯、夏には蛍、秋には熊も時折、姿を見せるのどかな一帯だが、ここから国道8号へは車で5分程度の距離だ。

自立を目指して「手に職」を

左図はモデルとしての湖北職人村で、若者（学生）には賃金として月額約10万円程度が支払われる。地域と双方の矢印は、衰退しつつある中山間地域の持続的な活性に向けて、清水さんと

モデルとしての湖北職人村



松本さんが期待を寄せる部分でもある。職人と双方の矢印は、村とともに職人ギルド（同業者組合）の創設が計画されていて、ギルド参加者の拡大から異業種の連携へと発展させることにより、将来的に地域の中の顧客と職人を縁結びする窓口の開設を計画している。

「村で職を学ぶ」というからにはもっと詳細なカリキュラムを作る必要があるでしょうけれど、その場の流れに身を任せるといふ姿勢も大切にしたいんです。時代性という流れの中で生まれた構想だし、自立しよう、という方向に向かわないと学ぶ人も面白くないんじゃないかな」

カリキュラムを詳細にすべきか否かという点で、清水さんは考慮しているようだ。取材の後半、仕事から戻った松本さんが話の輪に加わってくれた。

「三年間ここで学んで、結果的に農業とも建築とも違う道を選んでくれても構わないんです。二人の変わったおっちゃんと同世代や地元の人とつきあいながら、自分が社会とどう関わっているのか、自分なりの巣立ち方を学んでほしいですね」

そう語る松本さんは、終始笑顔だった。かかるエネルギーとリスクを思えば、職人村の構想はなかなか考えつくものではない。考えついても実行に移すのは躊躇されて然りだ。だが、それを現実のものにしようとする清水さん

春に華夏に涼風
秋に月
冬に雪あふれ
足らぬものなし

清水陽介

●しみず よつすけ 1955年生まれ。彦根工業高等学校卒業。1976年から1979年にかけて海外を自転車で放浪。帰国後、10年間の大工修行を経て、1989年から農業を始める。ワンデイ百姓（農業体験）企画等の環境活動と講演活動を行い、1999年にエコワークスを設立。

●エコワークス 所在地／伊香郡余呉町下余呉1-873-3
TEL&FAX／0749-86-23

と松本さんに、気分った様子は見受けられない。職人村の企画書の一項に「自立を遂げた人に待っているのは、安心感のある自由です」という文言があったが、二人がまさにそれなのだという印象を受けた。

うーん
松本 茂夫

●まつもと しげお

●農業生産法人「大戸洞舎」 所在地／東浅井郡湖北町上山田800-1
TEL&FAX／0749-78-2164

湖北職人村へのお問い合わせは記載の電話番号もしくは次のメールアドレスまでお願いします。

osendosan@eto.eonet.jp（松本 茂夫 宛）
str@mvi.friglobe.ne.jp（村上悟 宛）

子どもに届け！『本の力』



北村 幸子

学校図書館を考える会・近畿 代表
大阪教育大学 非常勤講師

news report 5

I will change a librarian

学校司書という仕事

大阪府の箕面市、豊中市、羽曳野市では、約15年前から学校図書館の整備と充実に取り組まれてきました。施策の要となったのは「学校司書の配置」です。利用者である子どもや教師一人一人にサービスを行い、教師を支援する学校司書の存在は、教育現場の厳しい状況を変革するための一つの試みでもあります。

大学卒業後6年間、小学校教諭を勤めた後、96年から01年まで羽曳野市内の公立小学校で図書館嘱託司書として勤務された北村幸子さん（現「学校図書館を考える会・近畿」代表）に、学校司書の仕事を通じて感じた子どもと読書の必要性など、お話をうかがいました。

■大津市立和邇図書館

■2007年5月13日

92年、初めての一人の司書の設置からスタート

私が学校司書になったのは96年のことです。それこそ倉庫のようであった図書館の整備から手をつけました。仕事を始めて1、2年目の頃、新1年生を迎える1学期は恐怖でした（笑）。小学1年生の子どもたちに図書館を利用するという意識はまるでありません。本人たちはきちんと本を戻したつもりでも、彼らが利用した後の図書館はまるで嵐が過ぎ去ったあとのよう。ぐちゃぐちゃに返された本との格闘です。そこで3年目からは熊のミトン人形を使うことを思いつきました。ミトン人形を使って「静かに！ 僕は図書館のクマ太くん。これから図書館の決まりを言います」と呼びかけると、子どもたちの動きがピタッと止まり、クマ太くんの話を聞き、図書館のルールを守るようになっていきました。それで随分と仕事がやりやすくなりました。

教師が考へる読書と、 司書が望む読書

小学1年生だと絵本を選ぶにも、本を取っては返しの手を繰り返します。先生は「一度選んだ本は最後まで読まなきゃダメ」と言われますが、私は「自分が読みたいものと違うなあと思ったなら、担任の先生か図書館の先生に、どうして違うと思うのか言いに来てね」と言いました。それで子ども自身も考えるようになるのです。その時に、一人の子どもが「ここに漢字があるから、読めません」と訴えてきました。私は「大人は字を読んでから絵を見るが、子どもは絵から読む傾向がある」と研修で学んだことがあります。先生方は、「字をちゃんと読みなさい」「もう少し難しい本を読みなさい」と言われるのですが、私は次の図書時間の初めに「字を習っているから字を読むことも大切だけれど、絵本って絵も読むのよ。だから絵もしっかり見てね」と話しました。司書が読書を考える視点と、先生の視点が違うということは必ずあります。どちらが良い悪いというのではなく、立場や視点の違う者が、子どもの教育に関わることをプラスの方向に働かせることが大切だと思います。

その日は、先生との関係が気まずくならないかと内心ヒヤヒヤしましたが、先生が「きょうは北村先生に絵本の絵を読むってことを教えてもらいました。これからは絵も読みましょうね」と言われ、ホッとしました。

みんな楽しんで読むこともできる 読書

1年生が終わる頃には、熊のミトン人形のおかげもあって、子どもたちにも本を読む姿勢が身についていきました。授業が始まると同時にきちんと椅子に座り、早く（読み聞かせを）始めてよ、という目でこちらをじっと見つめてきます。「ふゆめ がっしょうだん」（富成忠夫・茂木透Ⅱ写真、長新太Ⅱ文／福音館書店）という本では、私の声に続いて子どもたちが声を出して本を読んだり、1行読むごとに反応して大声で笑ったり、「なんだか詩みたいだねえ」と、興味も理解も確実に深まるのです。読書というのは個人的なものであると同時に、みんな楽しんで読むこともできるのだと私自身が感動しました。

学校図書館を充実させることで、子どもたちが自然に読書好きになり、本の世界を楽しむことができるのなら、行政としても随分とお得な施策ではないでしょうか。羽曳野市の場合は学校図書館の充実に向けて、学校司書の設置、資料費の保障、公共図書館等とのネットワークの整備を施策の柱として取り組まれました。「圖書の時間」は現在の指導要領には盛り込まれていませんが、以前は週1時間設けられていました。地域によって異なりますが、大阪府の場合、今もその時間を残す学校が多数あります。

子どもたちが必要とする時期に、必要な本を

高学年ともなると、圖書の時間の読み聞かせは減っていきます。回数が減る分、どの本を読むか、毎回とても心を配ります。ある時、書店でガブリエル・バンサンの『わたしのきもちをきいて1家出』（もりひさし訳／B1出版）を見つけ、この本は5年生だなあ、と直感しました。司書になって4年目でした

が、私自身もプロとして、本を選ぶ感覚が磨かれてきたように感じました。本の内容は、一人の少女が、自分をかまってくれない両親に腹を立て、家出をします。みんなに見つからないように、向こうに見える森をめざして歩き続けるのですが、森は思った以上に遠く、歩き続ける少女の怒りや悲しみ、不安、恐れなど、心の軌跡が繊細に描かれています。読む前に、私は軽い気持ちで「家出したいなあって思ったことある？」と子どもたちに聞いてみました。すると、真面目な表情で、半数近くの子どもが手を上げたのです。子どもとの信頼関係ができていくからの反応なのですが、少し恐ろしく感じながら、物語を読み進めていきました。…私のことなんかどうでもいいんだわ。思ったより遠い森。これならお父さんにもお母さんにもわからないだろう。…そんな、シンプルですが少女の胸中を伝える文が続きます。5年生の彼らは、真剣な表情で話の展開を見守ります。自分たちも「家出したるか」と考えたことを思い出し、少女と一緒に歩いているのです。物語の後半、森の中で少女は倒れこんでしま

います。家に帰りたくなるのですが、帰り道がわかりません。子どもたちは、皆、不安そうな表情になります。しかし、最後のページで父親が迎えにやってくるという結末です。皆がホッと、それで「おしまい」なのですが、私の前に座っていた男の子が、ポツリと「しょうもな…」と言いました。私が小声で、「しょうもなってなんなの？」と聞き返すと、その子は「家に帰ってどうなたかわからへんやんか…」と不満そうに答えました。冷めているのかと思いきや、その子は家出をした後で、家に戻ったらどないなるんやろうと、そこまで想像していたのです。これは私にとって嬉しい誤解であり、今もよく覚えて出る出来事です。そして、考えてみると、絵本というのは解決も結末も、絵本を読むあなた^が考えるケースバイケースであり、これも凄いことだと改めて認識させられました。

子どもの家出を冒険談風に描いた作品もありますが、5年生の子どもの内面的には、作品の方が心を動かされるのではないかと思えます。子どもたちが必要とする時期に、必要な本を手



「本から学ぶ楽しさを知ってほしい」

渡せる。それができる司書の仕事は本当に奥深いと思います。授業を視野におきながら、授業と同じことを取り上げるのでなく、そこに欠けているもの、そこにプラスしたいものを加味していくことが、学校司書の仕事の醍醐味であるように思います。

学校図書館の機能が、 先生をより「プロ」にする

もう一つ、学校司書の大切な仕事に、先生が授業を行う際、資料や参考になる図書を調べ、渡せるように準備しておくことが上げられます。「調べ学習」に必要な資料を準備できるようになるまでは、司書としての成長が必要ですが、学校図書館がそういうふうな機能すれば、先生をよりプロフェSSIONナルにすることができると実感しました。司書のサポートを活かすには、先生にも力量が求められます。双方がうまくかみ合えば、これは物凄い授業実践になると思います。しかし、司書が集めた図書をそのまま子どもに渡してしまっ

ては、結局、先生はよくわかっていままま……ということになりかねません。大阪府の先進的図書館教育ではどの図書が一番ふさわしいか、それを検討して、場合によってはこういう授業がしたいから、これらの資料では不十分だとか、教師が意欲的な授業づくりに向かうことが次の課題とも言われていました。このようなことが課題として取り上げられるようになったことは、学校司書配置の始まりの頃から大きく進歩したと言えるのではないのでしょうか。

幼稚な彼と、同級生が読んでいた 漫画との出会い

調べ学習および総合的学習に対して、資料図書を提供する場合に司書が配慮するのは、いろんなレベルの本をセレクトニングするということです。難しい文章では学べない子どものために、例えば絵本からでも学べるように資料を探します。5年生の男子児童でしたが、とても可愛らしい、言葉を変えれば幼稚な子がいました。それが理由で、クラスでは少しはずれた存在だったので、その子は図書館に来れば、私たちが

あれこれ絵本の話ができるので、嬉しいんですね。同級生だと、また絵本？と冷やかされたりするのでしょうか。その彼が、ある時、同級生たちと一緒に調べ学習で使った本を返しにきました。その時、同級生の一人が漫画を返却しました。その漫画は人気があって次の予約が入っていましたから、「待ってたのよ」という感じで受け取ったのですが、彼が「それ、俺にも読めるか？」と小声で聞いたのです。そう聞かれた同級生は、「漫画なんか誰でも読めるわ」と答えました。私が横から「借りて面白くなかったら、読まずに返してもいいのよ」と言ったところ、「読まん」と返しているの？それなら俺も借りてみよう」と予約したのです。それまで彼は、皆と同じものは読めないと思っていたのでしよう。でも、自分も皆と一緒に調べ学習ができたという自信で、この漫画も読んでみようかという気になったのだと思います。学校というのは、学ぶために来る場所です。子どもたちが「学べる」という意識に目覚めることは、本人にとっても大きな力をもたらします。司書を配置して蔵書を充実させることは、

経費はかかるが効果を思えばそんなにもったいない話ではないと、事あるごとに実感しました。

教師と学校司書、違う専門職同士が共働するところ

お話したことは、「学校図書館情報化

・活性化推進事業」を受けた羽曳野市の先進的な施策で、私自身が経験したことです。滋賀県の場合は、公共図書館が学校図書館をサポートするという形が主で、大津市の一部で学校図書館ボランティア等を活用する取り組みが見られます。市民との協働が言われる中、何を協働するかは難しい問題でもあります。私自身は、学校司書をその学校の教職員の一人として位置づけることが非常に大切だと思っています。先生や児童と関わる中で、司書の仕事は知っていても、学校教育のことは知らないでは済まされないことも往々にしてあるからです。学校図書館が機能すれば、先生をよりプロフェSSIONナルにすることができると言いましたが、それは授業の進めやすさだけでなく、より

根本的な問題である、先生が忙しくて手が回らない現状の改善にもつながると思うからです。手が回らないなんて、保護者の方にしてみれば「なぜ？」と、まどろっこしく思われるでしょう。しかし、子どもたちを担任すると、ケンカをしたあの子、失敗したあの子の問題をどうするかと、大問題でないにせよ時間を割かなければならないことがとても多いのです。その分、授業の進め方を考える時間は減っていきます。だからこそ、授業づくりをサポートするプロの図書館職員が必要だと思います。ボランティアの方に手伝っていたり先にも、教師と司書が違う専門職として、お互いの仕事を理解しながら共同するという環境にまで、現状のレベルを引き上げるべきだと思います。

私は3年前に、ゆつくり暮らすつもりで滋賀県に引っ越しました。引っ越した途端、湖南市の「学校図書館資源共有ネットワーク事業」の委員を務めさせていただくことになったのは、想定外のことでもあります(笑)。滋賀県では、学校司書という職種があるということ、それが学校教育に変化を及ぼす

ということを、一人でも多くの方に知っていただくことから始めていきたいと思っています。

学ぶ、楽しい！

自然からまなぶ

人から学ぶ
本から学ぶ

北村 幸子

●きたむら ゆきこ 1945年福岡県生まれ。奈良教育大学小学校課程卒業。69年から75年まで奈良県の公立小学校教諭。96年から01年まで羽曳野市立小学校図書館嘱託職員を勤める。99年からは大阪教育大学の非常勤講師を勤め、現在は、学校図書館を考える会・近畿代表。

photo essay
フォト エッセイ

A natural living okishima

自然の暮らし「沖島」

辻村 耕司
フォトグラファー



滋賀県近江八幡市の北端部に浮かぶ、沖島。湖北の竹生島と並び称される、神と人が暮らす琵琶湖最大の島。東西2.5km、南北1km、周囲約7km、面積は約1.5km²、人口は143戸で450人、小学校1校、児童数7人、郵便局1つ、平均年齢は高い。島の交通は三輪自転車と一家に一隻自家用船舶。自動車が走れる道は少ない。住民は半農半漁や加工業で生計を立てている。古くは戦国時代、落ち武者が安住の地として、隠れ住んだ…とされている。住民の移住は少なく、限られた血族が分家していった。しかし、時代の波に翻弄される。あふれるほどの魚は、水の汚れと環境変化とともに姿を消していく。かつては、切り出した石が工事に使われ、にぎわった。職を求め、若者は島を出る。対岸で生計を立てる人は数多い。「私は、沖島の出です」と、いう人は、どこか面差しが似ている。目鼻立ちのはっきりした漁師顔。今でも、法事には島に帰る人が多いと聞く。沖島に渡ると、不思議な安心感にとらわれる。なんだろう？ 漁船と湖と山がもたらす心の余裕だろうか？ 沖島の魅力を追ってみた。



1. 魚場は北湖や湖西までと、広い。夫婦が息を合わせて、朝早くから漁に出る。 2.「今日はどうえ?」「鮒が二杯やな」漁師の年齢層は年々上昇する。 3.島の佃煮工場で美味しく煮あがる小アユ「今日は8釜たきました」。 4.島の唯一の食堂にある水槽、ボテジャコが泳いでいる。



5.夕暮れ時、連絡船に向かう一家。「これ、お土産にもって帰り」おばあちゃんが、青年に話しかける。名残惜しそうに、船影が消えるまで手を振っていた。 6.畑に向かう細い道。すぐそばに琵琶湖。満腹そうな猫が家路につく。 7.頭山（かしらやま）は照葉樹林で豊かな森。削平地は見晴台になっていた。 8.おじいちゃんのご愛用三輪車「荷物が置けるし、用事を済ませるにはちょうどええ」







辻花耕司

●つじむら こうじ=1957年滋賀県生まれ。膳所高校卒、関西学院大学中退後、独学で写真の道へ。『湖国再発見』をテーマに滋賀の風物を取り続ける。出版社や企業からの依頼が多く、写真掲載出版物は多数。

1.夕陽に輝く湖面を船が渡る。絵のように美しい風景。2.花の手入れをするおばさん。季節の花に事欠かない。昔は貴重な棚田だった。3.神社から見た曇。肩を寄せ合うように家が立ち並ぶ。生活の力を感じる。4.島小学校の児童が体育館で沖鳥太鼓の練習。マンツーマン学習が多く、太鼓は重点授業。5.小学校の廊下。2030年には廃校が確実視される。「都会の宿泊研修に役立てれば」と、校長先生。6.「あわせるのが、難しい。けど楽しい」。

〈地域を元気にする秘訣— A secret to cheer up a local area 〉

「M・O・Hの会」の可能性

— 私たちにできること —

今回の座談会では、行政、大学、NPO、生活者の立場でそれぞれに活動を行う4人の皆さんに、読者の立場としてMOHの会およびMOH通信の可能性について語っていただきました。進行は内藤先生にお願いしました。



■参加者

落合 房子

野洲生活学校 会長

奥野 修

滋賀県立大学 地域づくり調査研究センター
主任調査研究員

松田 千春

滋賀県 行政経営改革室

楠部 孝誠

NPO循環共生社会システム研究所 研究員

■進行

内藤 正明

NPO循環共生社会システム研究所 代表理事
佛教大学社会学部教授

■琵琶湖ホテル

■2007年5月2日



「何から話せばいいのやら・・・」緊張気味の出席者

地域と地域をつなぐメディア

内藤 活動の内容はそれぞれ違いますが、今日集まったメンバーには見事に共通するものがあります。その一つはこの社会を何とかしなくちゃいけないという危機感を抱いていることでしょう。20世紀もしくは戦後の60年、日本を建て直そうと信じてやってきたことが、世界中から「奇跡」と呼ばれるほどうまくいった一方、その間に色々と切り捨てたもの、シワを寄せたもののがかなり深刻な問題と化しています。今日の顔ぶれからすれば、「地域」というものが一つのキーワードになるうかと思いますが、地域社会の崩壊や地域経済の疲弊もそれに含まれます。国との関係で言えば、補助金という多少のおこぼれに与ってできた立派な施設もあります。それが、心にが入っているかというところではない。そういう施設が地域にとって本気で大事だと思ってるやっつけた社会ではないでしょう。だからMOH通信のような読み物ができて、読者層も広がりつつあると思うのですが、皆さんはどのように思われますか？



「映画の世界に未来が見える」奥野氏

落合 地元・野洲の行政をずっと見てきましたが、確かにハコモノづくりの時代が続いたと思います。10年ほど前、少子化で小学校に空き教室ができました。それで、その教室を地域の高齢者と児童の交流の場利用できませんかと問い合わせたところ、管轄の違いを理由にあっさり断られました。その一方で、コミュニティセンターだとか交流センターといったハコモノを次々と新調するんです。維持が大変なのに…とその時に思ったとおり、今、そういう施設を、行政も市民も持て余し気味ではないかと思うのですが。

内藤 戦後は箱も底も何も無かったんですよ。それであらゆる施設がどんどんできて、それが社会を整えてきたのですから拍手を送った時代もありまし

たが、もうこのへんで、という制御がなかった。工事をする人、管理をする人と沢山の仕事ができあがってしまった、一度そちらの方へ動き始めると、誰もそろそろ止めようと言えなくなるんです。つまり、経済の指標が最大の価値と悪い込んでいたからそうなったと思うのですが、ここきて切り捨てたものの価値に気づく人が増えてきました。金儲けは少し譲ってでも何か他に大切なものがある、その何かとは？を模索している時期だと思うのですが、近江環人的にはどう思われますか？

奥野 確かに東京と地方のギャップは大きいですね。まちづくり自体は、それこそ複数の地域で10年、20年前から取り組まれてきたのですが、継続性という問題が一つと、どちらを向くかという姿勢の問題があります。ある地方の例を上げると、自分たちの町づくりを東京に向かって発信しているんです。そのために東京のメディアと結びついたりしてますね。でも、今やるべきは地域が地域に向かって発信すべきなんです。そのためのツールは不足していますから、そういう意味でもMOH通



「日野町のトキの剥製をシーボルトが持ち帰ったんです」内藤氏

が果たせる役割はあると思います。

内藤 経済が最大の指標である限り、東京に富が集中せざるを得ない構造なんですね。しかし、お金がすべてじゃないと気づくことで、東京を向かなくても、むしろ地方にお金とは別の豊かさの元が沢山あると、そういう方向になるかと思うのですが、日本の最大の不幸は、中央（東京がお金や権力を握っていて、中央の価値観と行動様式のままをもつて全国を支配していることです。どちらも手放しがたいものですから、この構造はなかなか崩せるものではないのですが、例えば滋賀県という地方の自治体はその構造に対して、どのように腹をくくって立ち向かうか。そのために県民が自分たちの首長をどう支えるかとい



「今日は、本音で話しました」落合氏

う気運も、MOH通信のようなメディアで育てていくべきではないでしょうか。

松田 言われるように、これまで自治体はより多くのサービスを提供しようとして、借金を重ねてきたと思います。ハコモノを造れば、それは目に見える一応の成果ですから、県民に対しても行政はこれだけの仕事をしましたと説明がしやすくなります。でも、無いことがマイナスで、在ることがプラスという考え方のままだと、この構造はなかなか変わりません。それを変えるには、お金がかかりますが、その施設や設備は本当に必要でしょうかと、きちんと情報をお示ししながら、県民の皆さんにお聞きしていかなければならないと考えています。

奥野 日本だけとは言いませんが、ワン



「内藤先生の研究を実現します」楠部氏

イシュー（※一つの争点。一つの方向からしか問題を解析しない姿勢）なんです。小泉政権の発足時も郵政民営化、それ一つで世の中が動いた感がありますよね。しかし今となれば郵政民営化って何だったんだろうと思われませんか。いつの時代もハコモノを造るのが本来の目的ではないはずで、地域をどう活性化するか、そのための政策を競うべきはずが、日本はその答えを一つにしてしまう。そして、その一つを信じ込まされているんですよ。時間はかかるけれど、話し合って考えましょうという手もあるはずで、少なくとも二つの案を粗上に載せて選択を問うやり方が必要ではないでしょうか。

内藤 まさにその通りです。地元の認



「何かできそう!」松田氏

識不足、力不足という点もあります。中央の制度をそのまま地域で通用させるのではなく、その地域に合った内容やサイズにアレンジすること。しかしそのためには国の許可等、幾つもの問題をクリアする必要があります。地域独自にできることは限られているんです。そういう社会の在り方の中で地方や地域が苦しんでいると言わざるを得ない。例えば楠部君の専門である循環のためのリサイクル法だってそうでしょう。

楠部 そうですね。リサイクルのシステムを作ろうとする時、法律は後押しをしてくれるんですが、それには必ずオマケが付いてきます。例えば基準を満たした建物でなければそのシステムは認められない、お金は出せない等ですね。

そうなると本来やりたいことが、根本的な部分で壁にぶつかってしまいます。それでも自分たちの力で独自にやり遂げるか、国の基準を受け入れ妥協するか。大きく二つに分かれますが、今は自分たちの力で、という人たちが増えてきたように思います。ただ、そういう人たちの取り組みは規模が小さいし目立たない。一生懸命やっているけれども、社会に知ってもらう機会がなくて、なかなか取り組みとして広がりにくいという問題があると思います。ですからMOH通信のような媒体が、実践者にはアピールの場になり、読者には自分たちの可能性を探るようなきっかけになれば、一層、魅力的な読み物になるのではないのでしょうか。

環境運動をMOHのネットワークが支える

編集 今、リサイクルの話が出ましたが、そもそもゴミの量が減りませんよね。何でも税金で処理しますというシステムには限界があると思います。まずペットボトルあたりから有償化にす

べきだと思うのですが…。

落合 私も同感です。昔は酒屋さんでも通い箱の制度がありましたよね。なぜそれが失われてしまったのでしょうか。

楠部 一番の要因はモノというものが使う時のことしか考えていないということでしょう。利便性が一番で、用が無くなれば燃やすなり処理すればいいという前提でモノづくりが続く限り、ゴミが減ることはないですね。もともと減らすつもりが無いんですから。その状況で行政のシステムだけを変えても、多分、意味が無いと思います。

内藤 ペットボトルの有償化はデポジット制と言うのですが、不法投棄の処理に莫大な税金が注ぎ込まれていることを思えば、設備投資の費用を見積もってもそちらの方が得策、正解なんです。

楠部 ところが大学内で、そのデポジット制に取り組もうとしたところ、学生がまず言ったことが『返しに行く場所が遠い』なんです。5円、10円なりのお金で歩くのは不便という、これも利便性なんですよ。しかし、金額で変わってくると思います。

内藤 だから10円とは言わず、みんな

が喜んでペットボトルを集めようというぐらいまで国が助成金を払ったとしても、未来を考えればデポジット制の方が賢い選択だと誰もが思うんじゃないでしょうか。誰かがきっかけを作らないことには変わらないですよ。

落合 私たちは10年ほど前から買い物袋を作って持参しようという取り組みを続けてきました。今年はゴミ袋の有料化に向けた運動を中心に展開しているかと思うのですが。

内藤 京都市でも昨年10月からゴミ袋が有料化になり、今年1月から大手スーパー、イオンの一部店舗でレジ袋の有料化が始まりました。これまで生協など一部のスーパーが地道に取り組んできましたが、行政とNPOが仕掛けたイベントをきっかけに徐々に広がっています。要はきっかけを作ればいいんですよ。

編集 そういうきっかけを、ぜひMOHの会のネットワークを通じてやりたいですね。

内藤 地道な活動をブレイクさせるには、どこか一つに仕掛けがいりますね。それはわざわざ総理大臣や知事を

引つ張り出さなくてもできる次元です。一人の学者、もしくは一人の行政マンが本気になって、いろいろ叩かれるのを乗り越えたら一気に広がるはずですよ。その仕掛け人となる人物をM〇Hの会のネットワークが支えるというのも面白いかもしれません。ブレイクさせるにはちょっとした仕掛けと勇気と知恵が必要ですね。

編集 ペットボトルの有償化モデルも、楠部さん、ぜひ考えてみてくださいよ。
内藤 モデルの中で、ここがツボだというのを見せてきたら、松田さんのような行政関係者、奥野さんのような大学関係者、落合さんのような生活関係者の力を借りて、場合によっては一つの町のモデル事業になり得るかもしれません。それでシステムがブレイクスルーできたら、これは凄いことだと思いますよ。

未来に向けた イメージ戦略を展開

編集 言ってみればM〇Hの会も地道な活動を続けているんですよ。それ

でふと思ったのが広告塔のような存在です。私の中では、緑の党（※党名は「みどりの会議」。2004年10月に解散）の中村敦夫さんのような方が理想なんです（笑）。

内藤 それは滋賀県に置き換えて言うこともできるんです。滋賀県民は自分たちの首長として「もったいない」を唱える嘉田由紀子氏を知事に立てた。実は私は2004年の参議院比例代表で緑の党の10人の候補者がすべて敗退した時、これで日本は終わったと思ったんです。何せ議席を持っていた中村さんまでが落選して、経済活性化を唱える人たちが選挙に勝ったのですから。しかし、滋賀県に嘉田知事が誕生して、ひよっとして滋賀県ならもう一度夢を持つてもいいんじゃないかということで、実は知事のお手伝いもさせていたいただいております。もし滋賀県が大変革すれば、日本はきつと変わりますよ。

編集 私はその可能性を信じます。M〇H通信がここまで継続できたのも、思いを同じくする皆さんが支えてくださった御蔭ですから。
内藤 では、M〇H通信に期待するこ

となど、ご意見のある方はどうぞ。

松田 M〇H通信は、自分が考えていることは間違っていないんだな、と確認できる場所だと思えます。記事に取り上げられているのは自分ではないかもしれないけれど、同じような考え方の人が増えているのを知ること、それが安心感にもつながります。一番大切なのは、読み物として楽しいことだと思いますが、これからもそういう話題をわかりやすく伝えてほしいですね。

編集 楽しいという点では、今日不在ですが森代表と内藤先生がタッグを組んだ時のストレートな発言も、『よ言う言うてくれた』と好評をいただいています。森と先生の世界では、もう自動車が走っていませんから（笑）。

内藤 そうそう（笑）。まず段階的に高速道路が一般の自動車道になり、そのうち車が消え、滋賀県の場合ですと丸子舟が復活します。これは夢物語ではなくて、実はライフラインからライフスタイルまで、様々な材料を集めながらそういう社会を描いているところなんです。それで「こういう社会は受け入れられませんか？ 本当に駄目ですか？」



「こんなに話が盛り上がるとは・・・」予想外の成功でした。

と、滋賀県民に向けて大々的なアンケートを行う予定です。むしろ県民の皆さんの方が、丸舟舟よりポンポン船くらいはどうかとか、持続可能な社会のイメージやアイデアを持ってもらえるかもしれませんから。

落合 私も滋賀県には山もあり湖もありますから、県レベルでの地産地消ができるのではないかとかねてから思っているんです。

奥野 我々市民に一番欠けているのは、将来の社会のイメージなんですよね。

これまでのイメージというのは、国家なり大企業なり大きな権力の下で描かれ、我々はそれを植えつけられてきたんです。言ってみれば今後、循環型社会への道筋もイメージ競争ということになります。ですから、現状のままの社会の将来像と比較できる新しい社会像、選択肢が必要なんです。そうじゃないと新しい時代の生き方のイメージが伝わってこないと思います。

内藤 そのイメージに一番有効なのは、一枚の絵だということに私も最近気がついたので。

奥野 レジ袋の有料化でもペットボトル

ルの回収でも、どういう社会を作りた
いから取り組むのか。そこを明らかに
すべきなんです。有料、有償化にすれ
ば、ある意味我慢を強いることになり
ます。単純に利便性で比較すれば、今
の経済、消費システムの方が便利じゃ
ないかとなります。でも、我慢の先に確
固とした社会のイメージがあれば、少
し不便でもそっちに向かおうという氣
持ちになるのではないのでしょうか。

内藤 そうなんです。2030年なり、
数十年後にはこういう社会になってい
るはず、というものをぶつけてみたい
んですよ。

編集 イメージ戦略ですね。実現に向
かって、一緒にやりましょうよ。

内藤 今日は色々課題がありますがまし
た。今日、お集まりいただいた皆さん
と一緒にやっていけることも沢山あり
ます。今後も頑張つてやっていきま
しょう。

編集 頑張りましたよ。皆さん、本日
はどうもありがとうございました。

和心 落合房子

●おちあい（ふさこ）今年、活動30周年を
迎える野洲生活学校の会長を11年にわた
って務める。同生活学校は当初より環境
と食の問題を活動テーマに取り上げ、「ひ
わ湖を守る水環境保全県民運動」（ひわ湖
会議）への参加や、手作り味噌の講習会
を継続して開催。10年ほど前からは、活動
の幅を広げるべく講習会等を通じて企業、
大学、行政との接点を増やし、消費者の立
場から意見・提案活動に取り組んでいる。

近江環人

一歩前へ

奥野修

●おくの おさむ（財滋賀総合研究所を
経て昨年4月から滋賀県立大学地域づく
り調査研究センターに勤務。同センター
は、大学が地域再生のためのリーダー育
成を目的に開催する「近江環人（おつみ
かんじん）地域再生学座」で事務局の役
割を果たすとともに、個人としては前職
で培ったまちづくり支援のキャリアを活
かし、同学座の非常勤講師も務める。

いつも風を 感じて進みたい

松田千春

●まつだ ちはる（滋賀県庁行政経営改革室
勤務。平成10年12月、当時の配属先であ
った土木部の女性職員を中心に、「このま
までいいのか、もっと自分たちの仕事を
知りたい」との思いを動機に「なりゆき云
」を発足。当初は庁内の別部課から講師役
を招き月1度の勉強会を開催していたが、
現在は県庁内外から講師を迎え、県庁職
員としての「体力向上」に励んでいる。
現在、なりゆき会の名簿登録者は42名。

循環

楠部 考誠

●くすべ たかせい（内藤正明氏が代表を
務める環境共生社会システム研究所（K
I-ESS・キース）研究員。本職は石川
県立大学附属生物資源工学研究所の助教
授工学博士。学生時代の師である内藤氏
の教えに共鳴し、キースに入所。廃棄物
（生ごみなど）循環の仕組みをテーマに
した研究活動を続けている。

内藤さんのプロフィールは138ページ
で紹介しています。

上位3作品の作者インタビュー

A senryu author interview

本誌15号でお伝えしたように、投票の結果、上位3作品に選ばれたのは、いずれも龍谷大学国際文化学部の子学生の皆さんの作品でした。彼女たちの「もったいない・おかげさま・ほどほどに」に対する意識や、個々の生活観についてインタビューしました。



左から田形さん、藤本さん、山本さん

1位 田形 千紘さん

「ほどほどに それが一番 むずかしい」

2位 藤本 奈穂さん

「おかげさま その一言が 日本の美」

3位 山本 温子さん

「もったいない ゴミになるのは 君しだい」

Q・作品を思いついたのは？

田形 何ごとも「ほどほど」が一番と言いますが、それが一番難しいと普段から感じる人が多いです。食べ過ぎたとか、友達に言い過ぎたとか…。その経験を素直に表現してみました。

藤本 「おかげさま」という言葉は、日本人の美德を表す言葉だと思えます。近所の人に出会った時や、病気が治った時など、日常的に使う素敵な言葉をテーマに選びました。

山本 買い物に行つて、例えばプリンや容器など、丁寧な包装がもったいないと感じることがよくあります。ペットボトルも簡単に買えて、簡単に捨てたりますが、しっかりと容器を捨てるのか、それをもう一度利用するか、物の使い方は自分たち次第だと思えます。

田形 あまり感じません。自然に捨ててしまふかな？

藤本 私は家のお茶を入れて、何回も

利用するタイプです。

山本 イギリスに半年間、留学したことがきっかけで、使い捨てを見直しました。多分、日本でならみんな抵抗なく捨てると思うのですが、ステイ先の日本人学生は寮住まいで自炊だったこともあつて、食品を保存する際など、カップ容器を上手に利用していました。その時の自分の経済状態で、ゴミに見えるかどうかが変わつてくると思います。

Q・ちなみにイギリスのゴミに対する意識は？

山本 イギリスの一般家庭に触れる機会がなかったのですが…。でも、一度学校で、日本のゴミ分別の仕方をプレゼンテーションしなさいと言われ、日本ではペットボトルのフィルムとキャップを取りますと説明してとても驚かれました。容器の種類は日本とほぼ同程度だと思いますが、捨てる方はカンもビンも生ゴミも一緒くたでした。ゴミに対する意識は日本より低いのではないのでしょうか。※ちなみに、イギリスのゴミ処理は「無秩序体制」とも言われ、一昔前までは「何でも一緒に捨てる」が当たり前だった

たとか。現在はリサイクルの方向に向かっていくようですが、日本のような細かなゴミ分別は、なかなか受け入れられないのが現状のようです。

Q・「もったいない・おかげさま・ほどほどに」。その言葉の意味を教えてください。その存在はありましたか？

藤本 私の家の周りは、近所の人に出会ったら挨拶をするのが当たり前地域です。近所の人たちとの祖父父母の接し方を小さな頃から見て育ったので、人とのつながりの大切さを自然に学んでいたように思います。特に祖母の影響は大きくて、祖母は家の庭先を自分が育てた花でいつも美しく飾り、それで、ご近所の人からも「綺麗ねえ」と褒められ、近所の人気者でした。自分の家の周りを綺麗にすること一つとっても、人とのコミュニケーションが増えていくのだなあ、と感じたことがあります。

田形 私の家にも祖母がいて、家族の中で一番パワフルです（笑）。カラオケ、ゲートボール、オタギリ・ジョーが大好きで、祖母の元気が家族に与える影響は大きいです。



「私の夢はフォトグラファーです」田形さん

山本 我が家も祖父母と同居です。

Q・3人とも核家族ではないというのも特徴的ですね。ところで、自分の将来をどう描いていますか？

山本 私も「ほどほど」のバランスをとるのが難しいタイプです。1日で全部やりたい、どれもちゃんとやりたいと頑張りすぎて、自分が疲れてしまうことが多々あります(笑)。一生懸命も大切ですが、それがプレッシャーになって自分を見失ってはいけないと思うので、自分のペースを大事にして生活していきたいと思います。夢は色々な国々の様子を見ること。就職活動中ですが、でもあと1年、学校にいたいとも考えています。

藤本 私もいろんな場所を旅して、いろんな世界を見たいという人生の計画があります。お陰様で就職活動は終わることができましたが、IT関連の技術者として内定をいただきました。仕事で自分の裁量を発揮するのは大変なことだと思いますが、オンとオフを切り替えながら有意義な社会人生活を送りたいと思っています。

田形 私は就職までにまだ少し時間がありますが、カメラマンになりたいという強い気持ちがあつて、実は卒業後にプロのカメラマンに弟子入りするところが決まっています。東京まで直接、お願いに上がりました(笑)。今年の春、ヨーロッパの各地を安い宿を点々としながら旅しました。その時、ベネチア



「システムエンジニアで社会デビューします」藤本さん



「ナチュラルな人生を過ごします」山本さん

の運河にかかる虹を見て、「これはみんなに届けなアカン」と思ったのが、決意したきっかけです。世界中の美しいもの、綺麗なものを伝えたいです。

Q・皆さん、世界が広いことに驚かされます。

田形 国際文化学部の学生は、世界を見たい人が集まっているんじゃないかと思えます。その中でまた、それぞれに興味の対象は異なるのですが。

Q・本日はありがとうございました。では、最後にMOH通信への感想は？

藤本 インタビューを受けるのは初めてで、的外れなことを言っているかもしれないませんが、こちらこそありがとうございます。



龍谷大学瀬田キャンパス

ございました(笑)。

田形 冊子を作る仕事は大変だと思えます。その上で地域に密着するのは、さらに大変なことではないでしょうか。でも、地域に密着した情報の発信は、とても大切だと思いますので、がんばってください(笑)

山本 私も本の紹介のコーナーを楽しみにしています。

皆さんありがとうございました。それぞれのご活躍を期待しています。

※ 編集部注：139ページにMOH川柳の未発表作品を掲載しています。

頭がシッパルねヤツほど
行動は、ハフハフだ。

● たがたちひろ || 龍谷大学3期生
田形千紘

泰然自若
晴耕雨読

● ふしもとなほ || 龍谷大学4期生
藤本奈穂

学ぶ心

● やまもとあつこ || 龍谷大学4期生
山本温子



〈An MOH communication writer round-table conference〉

環境のシンボル「MOH(牛)」が、 一層活躍する社会へ

MOH通信の発行から、今号で無事3周年を迎えることができました。それを記念して、レギュラー執筆陣に加え、今号の特集記事にご登場いただいた皆さま、さらにMOH通信を支えるスタッフ等を交え、懇談会を開催しました。それぞれの参加者から最近、気になること、MOH通信への意見等をいただきました。

■2007年6月17日

■大学コンソーシアム京都(キャンパスプラザ京都)



一堂に揃った執筆陣13名。いつもありがとうございます。

これからの環境運動は、どこから考えても「もったいない・おかげさま・ほどほどに」に辿り着くと思います。問題はそれをどう広めて、どう具体的な社会を作っていくかです。私は今、嘉田知事が取り組んでおられる「もったいない」社会づくりをどう実現するのか、そのお手伝いをさせていただいておりますが、その方向性やプロセスなどを社会に発信するためのチャ



●内藤 正明（NPO循環共生社会システム研究所代表理事、佛教大学社会学部教授）

よく「サラリーマンをしながら、40年かけて森を作った森さん」と言われます。わかりよく言えば、収入が半分になっても、もっと豊かな生活ができる、ということが私のテーマです。私は人類の歴史は過去三つに区分できると思うのですが、獣のような生活をしてきた時代があつて、1万年ほど前から農業社会に入り、そしてほんの200、300年前から工業社会に入りました。でも、その社会には所詮限界があり、4番目の社会への移行が必要だろうと思います。そして、私の今の生活は、4番目の社会で幸せになる生き方を、実証できているのではないかと自負しています。



●森 孝之（株式会社アイトワ代表）
▼今号の特集記事参照
ンネルとして、MOH通信と上手く連携していければと思っております。

実証できているのではないかと自負しています。

●花田眞理子（大阪産業大学人間環境学研究科助教）

▼本誌10号にて「環境経済論こぼれ話」を執筆



私が大学で教えているのは、例えば環境税など環境配慮が報われるような制度やシステムを、経済の側から考えて、どのように仕組みを作っていくか良いかということです。もう一つは、人間はなぜ行動するのか、そのインセンティブ（※誘因）を主に考える、認知科学という学問を通じて、環境配慮への行動化の仕掛けについて考えています。そのインセンティブを私は、「お得で楽しく美しく」と表現しています。いろいろな種類のインセンティブを示すことによって、環境問題への関心が低い人か

ら高い人まで、色々な人を巻き込む仕掛けが考えられるはずです。「仕組み」と「仕掛け」の両方で、社会をどうやって動かしていけるか、そういうことに学生たちと一緒に取り組んでいます。

●宮本加奈（きんぎ環境館環境省近畿環境パートナーシップオフィス担当）

▼当社を取材（本誌16号のM・O・Hニュース参照）



今日は、皆さんの意見を伺いながら、勉強させていただきたいと思います。近頃、気になることの一つに「エコツリーズム」があります。日本の伝統文化を保持することにより、環境を守るこの取り組みは、技術面に偏りがちな環境保全活動に、プラスの要素を補ってくれるように感じます。滋賀県では、高島市などが先進的に取り組んでいらっしゃるようです。その素晴らしい取り

組みの情報など、MOH通信を通してご紹介いただければと思います。

●山口美知子（東近江地域振興局森林整備課）

▼本誌13号の「滋賀県の取り組み」にて取材。今号の特集記事参照。



今号では、安城市の副市長・山田朝夫さんと対談させていただきました。山田さんは国のキャリア官僚、私は一事務所の平職員とまったく立場は違うのですが、唯一の共通点はどこか地域で何かを興じていきたいという思いです。対談というより、私の個人的な悩みや疑問をぶつけさせていただいたような内容ですが、最後に『失敗してもいいから前に進みなさい。今は失敗を重ねることが経験になります』と言われ、あ、それでいいのかと勇気をもった次第です。職場でもMOH通信の存在を

知らななさそうな人に、前号を何冊か配って見たのですが、とても評判が良く、一企業が発行しておられるということに驚きの声が多くありました。

●堤 幸一（有限会社とーく代表取締役・京都造形大学講師）



滋賀県で開催された湖沼会議に関わりながら、いつしか森林についても携わるようになり、都市計画を手がけながら、その流れで環境（NGO）にも足を踏み入れ、気がつけば「ここにいる」ということが多く、何をやっている人ですかと聞かれて、いまだに自分は何者ですと答えるのが苦手です。

最近、気になるのはまさにそれで、目に見える範囲で自分の拠点が欲しいと思う時がありますが、（活動範囲が広いことを）開き直ってもいいかなと思ったりもしています。

●畑 裕子（日本ペンクラブ会員）
▼次号から本誌にてエッセイを連載。



雑誌や新聞に文章を書いているので、生活スタイルは家の中が基準になることが多いのですが、家で仕事をしているから外部の事が見えないかということ決してそうではなく、とてもよく見えてきます。例えば、私の住んでいる住宅街で、早い人は25年ほど前からの住人ですが、もう家の建て替えを行う人が現れ始めました。その解体工事の音が、私には家の悲鳴に聞こえ、胸が痛みます。木造建築の場合、ヨーロッパの石造建築と異なり、耐久年数も短いと思われませんが、それにしても古い物に愛着を覚え、大切にする気持ちが薄いような気がしてなりません。連載エッセイは辻村編集長からどういうテーマをいただくのか、私もドキドキしています。

どうぞよろしくおつきあいください。

●加藤みゆき（NPO法人「麻生里山センター」職員）
▼本誌にて漫画エッセイを連載。



私が勤める「くつきの森」では、今年5月から高島市の取り組みとして、高島森林体験学校が開設され、また4月からは滋賀県の取り組みとして、県内の小学4年生に森林体験を学んでもらうための「山の子事業」の受け入れも始まりました。MOHの漫画を通して、今の子どもたちがどのような自然体験をしているのかを伝えられればと思います。また、「もったいない」という言葉に実感がない人、興味を持たない人たちにも、もったいないはそんなに難しいことではないということを伝えたいです。

●玉垣 勝（NPO法人「麻生里山セ
ンター」代表理事、前旧朽木村村長）



今年の3月に高島市教育委員会教育長の任を終え、現職では加藤さんはじめ、若手のサポートができればとがんばっています。市の教育長を務めた2年間、環境問題について、学校教育や行政の施策面からも非常に大きな変化を感じつつ仕事に取り組んできました。市役所からゴミ箱が消え、紙類については1枚も廃棄物として出さない。その中で、私自身は環境問題について、内藤先生や森代表のお話から大きなヒントをいただいたと思っています。我が家でも紙類の廃棄物が出さないことに決め、最近ではゴミの分別にも詳しくなりました。小さな事でも、まずは自分が勉強することから始め、次の社会にかなげることができればと思っています。

●今関 信子（児童文学者）
▼本誌にてエッセイを連載。今号の特
集記事参照



私自身、自分の中に言葉を貯めるにも、文化の中で言葉を蓄える面が大きいのですが、これは子どもたちにとっても同じで、今生きている社会や文化が、子どもたちの生きる手がかりになっているのではないのでしょうか。今の社会が何を大事にしているのか、子どもたちは敏感に感じ取っていると思います。ですから、子どもたちもMOH通信の仲間に加え、是非、子どもたちの活動に光を当て、素敵な出会いの中で心が行き交うような場面づくりを、私たち大人が探るべきではないでしょうか。何かが少しでも変わっていくために、MOHのネットワークが役立てばいいなと思っています。

●松崎 和弘（合資会社ドットトラボ代
表）

▼滋賀エリアブログポータルサイト「滋
賀・咲くblog」運営



滋賀・咲くブログで辻村さんをお手伝いしつつ、MOH通信の情報発信に関わらせていただいております。MOHの会をはじめ、滋賀にはNPO活動に熱心に取り組む人が多いと思います。そういう活動が皆が知ることによって、賛同する人が増える。その流れが大切だと思いますので、情報発信の面から、できることをお手伝いしたいと思っています。去年から、自分でも何かやってみなくてはという思いで、「おうみ未来塾」に入会しました。まだまだ勉強の途中ですが、子供たちの世代に未来を残していきたいと思っています。

● 弘中 史子 (滋賀大学経済学部企業経営学科 准教授)

▼今号の特集記事参照



私の研究テーマは「中小企業論」です。これまでは日本のモノづくりを支えるような企業を中心に研究してきましたが、滋賀県に来て、沢山の中小企業の方々とお話をさせていただくうちに、地域に根付いた企業や、生活者と経済を結びつけるような企業の在り方へと、研究テーマが次第に広がってきました。一番の要因は、滋賀県に来たことであらうと、とても感謝しています。経済と生活者と中小企業の在り方という大きなテーマを考えることで、少しでも社会に貢献できればと思います。

● 辻村 耕司 (カメラマン)

▼今号のフォトエッセイ参照

例えば滋賀の祭を取材すると、祭の

舞台が古代から変わらずに受け継がれ、神聖な土地の気配がすぐく伝わってきます。そういうことが連続と続いているのが滋賀の凄さで、これからも仕事を通じて色々なことを発見していきたいと思います。また、これまで取材した人たちが、これからどのように変わっていくかを見るのを見ていきたいですし、ライフワーク的に、色々な人のところに顔を出していきたいと思っています。

● 森 建司 (循環型社会システム研究所 代表)



私どもの会社では包装資材の販売を手がけてきました。時流に乗って会社は大きく成長しましたが、同時に廃棄物を生み出すという点で、罪の意識がありました。それで、包装資材を減らすためのNPOの設立や、エコ村構想についてを新聞のコラムで書かせてい

ただくなど、微力ながら活動をし出した矢先に脑梗塞で倒れ、これはもう生き方を変えよう、生きているうちは環境運動しかやらないという思いで、現在に至っております。21世紀は女性の感性と、MOHのマークでもある牛のような環境のシンボルが活躍する時代だと思っています。そういう意味で、今日は女性の方々が半数を超え、非常に嬉しく思っています。皆さん、今後ともよろしくおつきあいください。

● 辻村 琴美 (本誌編集長)

皆さま、お世話になっております。今日、これだけの方にお集まりいただけましたが、私にとって一番の喜びです。会社に勤めて17年になりますが、営業職を経て、会長に倒れていたおかげで(笑)、会長秘書としてMOH通信に携わることができました。これからもMOHのキーワードを一層掘り下げていきたいと思っております。執筆者の皆さま方、読者の皆さま方からの、嬉しいご意見やダメ出しも大歓迎です。どうぞ今後とも、よろしくおつきあいさせていただきますようお願い申し上げます。

エネルギー供給の変化、 日本はどう備えるか、地方は？

天野 治

ガソリンの値段が急に高くなった。世界を取り巻くエネルギー情勢はさらに変化していく。どのように変化していくのか。どのように対応すべきなのか。2050年の世界の一次エネルギーを予測すると、世界人口の1/4をしめる中国、インドなどの成長とイスラム圏の人口増加で世界の需要は倍になる。一方、石油、ガス、石炭などの化石燃料の供給は減少していく。このため、最低3割の節約が必要である。

資源制約の中で、石油に代わるエネルギーに変更する時期にきている。ガソリン、灯油などの石油製品の代替には、電気自動車やエアコンなど電気が使われる。どの発電方式が良いか考える上で、発電だけの部分的な検討ではなく、海外からの燃料調達、日本までの輸送、発電所建設・運転・補修、送電など需要家が使うまでの資源、運転・補修エネルギーの全体を計算し、比較検討する必要がある。計算には、

EPR (Energy profit ratio)の略で、エネルギー収支比と訳され、発電される電力/投入エネルギーで定義される)で分析することが出来る。EPRの値が大きいほど、益が大きく、「質」のいいエネルギーである。原子力、水力、地熱はEPRが高く有望である。

2050年までに、世界は3割節約をして、原子力を3.5倍、再生エネルギー(薪、水力)を3倍に増やす。それでも足りない。機器の効率を上げるなどのさらなる省エネルギー技術の進化と太陽光発電、風力発電などの新規エネルギーが必要である。

太陽光発電、風力発電の出力変動に對しては、主力となる原子力発電の負荷追従運転や孤島などではNAS電池、リチウムイオン電池などの蓄電池との組み合わせが有力な候補である。

日本人一人あたりの電気の使用量は世界平均の3.2倍で、カナダ、米国に続いて、世界第三位の消費大国である。

消費内訳はエアコン・クーラーが1／4、冷蔵庫と照明が同じ1／6である。朝型シフトなど生活習慣を変える時期に来ている。

「もったいない」での脱浪費、日本の高品質のものづくり、省エネルギー技術は世界トップクラスである。世界の方向転換に果たす日本の役割は大きい。がんばれ、日本。

一方、地方の対応が遅い。困るのはわれわれ住民である。「もったいない」脱浪費とともに、輸送、食料、産業の3点を地域住民と自治体が共同して変革すべきである。輸送、移動には、ライトレール、トレインがおすすめです。ガソリンが200円を超えると、道路を電車が走る時代になる。駅と名所を結び、住居地とショッピング街、病院を結び、インフラを至急整備すべきである。食料は安い物を買う時代から、新鮮で栄養豊かな地場の物を、人とのふれあいを楽しみながら選ぶ時代

になる。地元、先祖を含めて、人とのふれあいをごちそうである。時代の変革を先取りした産業にする必要もある。石油ピーク時代には、必要な物だけ作るべきである。人とのふれあいにつながる物を作るべきである。資源制約の中の物づくりには、少ない資源・エネルギーで物を作る必要がある。発想の転換が必要になる。EPRはいいものさしになる。

備えには時間がかかる。変化が必要な時期には、将来が見え、変革のリーダーシップがとれる知事、市長を選んで、一致団結して、ガソリン、灯油に頼らず、それでも住みやすい地域になるように取り組むべきであろう。

(参考) 2000年の世界の一次エネルギーは石油、石炭、ガスで7.9ギガトン、原子力が0.7ギガトン(石油等価換算)、薪・水力などの再生エネルギーが1.5ギガトンで合計10.1ギガトンある。2050年には需要予測19.7ギ

ガトンに対して、節約を5.7ギガトン、石油、石炭、ガスで4ギガトン、原子力が2.5ギガトン、薪・水力などの再生エネルギーが5ギガトン、省エネ、太陽光、風力などに期待する分2.5ギガトンである。

古戦場での清潔を知る

天野 治

●あまの おさむ=1950年生まれ、東北大学原子核工学修士課程卒業、東京電力原子燃料サイクル部長を経て、電力中央研究所 特別契約研究員、もったいない学会理事、工学博士。エネルギー収支分析の第一人者



近くの山の木の伐採（高島市安曇川町）

The house is connected to the local mountain

地域の山と つながる住まい

— 地域材を使った家づくり —

清水 安治

安曇川流域森と家作りの会 湖北古民家ネットワーク



安曇川流域の山の木で建てた薪
ストーブのある家

湖北地域の古い民家を訪ねて、その柱や梁に櫻がふんだんに使われているのを見て驚くことがたびたびある。同じように、琵琶湖の西側、安曇川上流の朽木一帯では、民家の部材として栗の木がかなり多く使われている。いつだったか「そういえば、古い家の柱や土台には確かに栗が多いなあ」と地元の初老の大工が話すのを聞いたことがある。今では貴重な木材となつてしまった櫻や栗が民家の部材としてなげなく普通に使われていること。そして、そもそも日本の民家の基本的な構造部材が木材であること。これは、すなわち手近にたくさんあったからにはかならない。

【近くの山の木に注目】

近くに多くあるものを使う。このことは、実はごく自然なことなのだ。ひよつとしたら、古い民家の柱や梁などの部材の樹種を丹念に調べてみると、建築当時のその周辺の山の植生が見えてくるかもしれない。つまり、民家の柱や梁となつてタイムカプセルのようにかつての近くの山の姿が埋め込まれているのではないか。ところが、今や世界中

から多種多様な木材が国内を流通し、手軽に安定して調達できるので、かつてのように近くの山の木が使われることは少なくなつてしまった。

【先祖の想いを引き継ぐ】

実は私が数年前に建てた自宅は、私の先祖が植えて管理してきた山の木を使っている。ちょうど伐採期を迎えているので使つてみたところ、住んでみると実気分が良い。木の香が薫る柱や梁に囲まれ、特にヒノキの床板を毎日踏みしめることで、近くの山とつながっているという実感と満足感に浸れる。

【家づくりって?】

この満足感をもつと多くの人に感じてもらいたいと思ひ、3年前に同じ思いを持つ仲間達と立ち上げたのが「安曇川流域・森と家づくりの会」である。山で木を伐採することから、搬出、製材、乾燥、加工、組み立てまでを見届けられる家づくり。つまり、いにしえより繰り返されてきた家づくりにこそ魅力や価値があるのだという共感を拡げている。

【川上と川下をつなぐ】

安曇川流域上流の朽木の山から伐り出されるアシユウスギ(普生杉)は「朽木の植」として有名で、かつては安曇川の上流域から下流へと筏で流し、民家などの建築用材として使われてきた。古くは奈良時代には東大寺の設営にも使われたという記録もある。そして、今改めて、川上の山に生えている木を自ら見定めて、伐採から完成までの過程に関わることでできる家づくり。川上と川下がつながり対話する。顔の見える家づくりを「安曇川流域・森と家づくりの会」ではめざしている。

【課題の回復を】

「家に使う木は近くの山で、それも誰が育てた木なのか分かるような家づくりがしたい」この施主の熱い想いに応え、私たちの理念を結集させた一軒の家が、昨年の秋、安曇川沿岸に完成した。Ⅱ右ページ右下写真(MO日通信第16号43ページ掲載の今城邸)しかし、その過程で浮き彫りになった課題も多い。山の伐採や管理を担う人材の確保。



「安曇川流域・森と家づくりの会」森のワークショップの様子(高島市朽木)

断ち切られた流通の再編。木材を見極める大工の技の伝承。などをこれからはいたわるように回復していかねければならない。

今城邸では、すでに建築用材だけでなく、ストーブの燃料となる薪、あるいは山菜やキノコなど山の幸を近くの山から調達することを実践した生活が営まれている。近くの山とつながる暮らしの可能性は拡がっている。もちろん、拙宅の柱や梁なども、住めば住むほど色つやに味わいが出て、日々の暮らしに馴染んできた。私の一番の楽しみは、風呂上がりに裸で(パンツははいてます)床に寝転ぶこと。木の床の温度や湿り気、硬さ、匂い、

音、色合いなどを五感を通じて感じ、心地よい時間を過ごすことができる。まさに格別な時間で、ついそのまま寝てしまいうこともたびたび。体に直接触れて体の重みを支える唯一の部分である床の木が、私たちが吸う空気と同じ空気を吸い込み、私たちの水源と同じ土壌の水分を吸い上げ、私たちと同じリズムで太陽の光を浴びて、近くの山で育ってきたなんて最高でしょう。

”住めば、住むほど、好きになる”これが「安曇川流域・森と家づくりの会」のキャッチフレーズです。

清水吉治

●しみず やすはる 1961年、高島市生まれ。自宅の改修をきっかけに古民家再生の魅力を知り、ライフワークとして県内各地で再生に取り組み。民家の古材を活かすとともに、近くの山の木を使うことで、地域の資源にこだわった家づくりをめざしている。「湖北古民家再生ネットワーク」「安曇川流域・森と家づくりの会」メンバー。滋賀県政策調整部地域振興課職員。一級建築士。

連絡先 y-43zu@guitar.on.ne.jp

トンボ

三山 元暎



さし絵：中川 善雄

私の子ども頃は、小川にはオイカワやカワムツ、サワガニ、ハグロトンボなどがいて、いきものたちの楽園の感があった。このころは、水が汚れ、めっきり減った。

それでも、わが在所の三島池周辺には、オニヤンマ、ギンヤンマ、シオカラトンボと、なつかしい夏の使者たちが悠々と飛んでいる。

この川を栖処に生き来鬼やんま

有恵伝成

羽の黒い細身のハグロトンボがひらひら群がり飛ぶのを見ると「まるでメルヘンの世界にいるようだ」と、トンボのとりこになった知人がいう。ハグロトンボを岐阜や和歌山では、かつてはカミサマトンボと呼んだそうだ。ホトケトンボ、ゴクラクトンボと呼ぶところもあるらしい。

近くのトンボの楽園、山室湿原を歩いた。ハグロトンボのほか、タカネトンボやオシオカラトンボなど、見かけた。お目当てのハッチョウトンボにも出会った。体長18ミリほどの超ミニ

サイズのトンボで、世界でも最も小さい部類に入るといふ。真っ赤に染まった飛行体に自然の神秘さを見、感激した。

この日本一小さなトンボ、全国各地に分布するものの、近年の開発により湿地環境が著しく悪化し、急激に数を減らしているという。湖国でも最も発生が減っている昆虫の一つだそうだ。

人間がトンボに何らかの価値を認めないと、湿地のトンボは減るばかり。自然を保護すること、自然を放置することは違っただが…。

三山 元暎

●みやま もとあき 1940年滋賀県坂田郡山東町(現・米原市)生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお 1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞。入選歴多数あり。税理士。

〈商家の家訓の話 第三回〉

矢尾喜兵衛の所感(一)

儉約とは物の効用を生かすこと

The story of the famiry precepts of the merchar's family

末永 國紀



矢尾喜兵衛書置

矢尾喜兵衛家の四代目喜兵衛は、三代目の長男である。字は忍之、号を松下堂・忍天舎・天秤坊世渡等と称した。文化六年(一八〇九)六月二五日の出生。一四歳となった文政五年(一八二二)九月二六日に本宅の近江日野を発つて初めて秩父の出店へ出向した。初登りは一八歳の秋であった。当主としては天保四年の二五歳から没する当年の安政三年(一八五六)まで店務を総覧した。

父親の薫陶もあり、手習いのため九歳で寺に入り、やがて石門心学に傾倒していった。その言動は勤儉謙讓そのものであり、「心学見聞草」・「商主心法 道中独問答草子」・「見聞随筆」・「古今教諭歌」等の心学的処世の書を残している。その座右の銘の一つは、次のような司馬温公(司馬光)の家訓であった。

金を積み以て子孫に遺せども、

子孫未だ必ずしも能く守らず

書を積み以て子孫に遺せども、

子孫未だ必ずしも能く読まず

冥々の中に陰徳を積んで、

以て子孫長久の計を為すに如かず

四代目は、ペリー来航の年である嘉永六年（一八五三）秋に記した所感のなかで、物の冥加を知り始末の効用を以下のように語っている。

この天地の間に存在する物は、天の恩恵と地の養育によるものである。決して人力だけで生み出されたものではない。この冥加を知れば、物を使うということ、どんなささやかな物であっても天地から借用するのと同じことである。借り物である以上、粗末に扱ったり損じたりして、物が廃れてしまつことを恐れ慎まなければならぬ。

天地の間にある物は、どんな品であれ減らないように心懸け、物を愛し、物の効用を尽くし、仮にも無益のことに浪費してしまわないように

始末することが大事である。物の本来の役目を果たさせるような使い方をすることは、天地への奉公である。このように心掛ける人を冥加を知る人というのであり、そのためには随分と善心がなければならぬ。

家内一同が、この冥加を知るようになる、万事が都合よくなり、いつの間にか物が豊かになるものである。これは理詰めには考えたり損得を考えたりしてできることではない。

四代目は、物を使う場合も、その物の効用が無益になるような使い方を避け、物の効用を使い尽くすように使用することを始末と捉えていることを知ることができるとくに「兎角天地の間に有物は何品にても減らぬように心懸て、物を愛し用に立べき事には用に立て、其功を顕し、仮にも不益の事に物を費し申さざるように始末よく、何品にても捨り有ものは拾ひ上げ、何用に成りとも違ひ、其品の功を取候様にいたし候事、天

地の御奉公と申ものにて候」という表現には、石門心学の創始者である石田梅岩の語録を想い起こさせるものがある。

近江商人に学ぶ 末永國紀

●すえながくにとし 1943年生れ。

同志社大学経済学部教授。経済学博士。

（財）近江商人郷土館館長。

著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）

藤樹先生に学ぶ(6)

Study from Nakae Toju

井上 昌幸



伊吹太鼓踊り

今回は藤樹先生が四十才の時に刊行された「鑑草」(手本かみくさになる話)について説明していきます。

この本は女性の生き方(善を勧め悪を戒める)について様々な角度から仏教用語を使いながら著述されていますが、中国の古い民話物語を採用されており、その内容が奇怪でとりとめもないところがあるので後年批判的な意見が多いようです。熊澤蕃山も「このような本を出版しようとする志は良いが、その文章をそのまま受け入れられない。世の人がそしめるのもつともである」と述べています。

藤樹先生がこの本を執筆されたのは三十六、三十七才頃と言われているので、「陽明全集」を入手されて「良知に致る」を会得された後の深い心境の中でこのような本を刊行されたことを知っておく必要はあります。

この本は六卷八項目に分けて書かれており、孝行の大切さ、夫への仕方、子供の教育、家族・親類との付き合い方などを民話の物語(善因善果、悪因悪果、そして三世因果応報)を使いながら詳しく説明されています。

手元に青柳小学校発行の「鑑草」があり、その中から序文、孝行、子供の教育について大切であると思われる箇所を要約していきます。

序文

○つくづく世間の幸福をくらべてみると、身体が健康で心は安楽でそして子孫が栄えることが最上である。長寿はその次であり、地位が高く金持ちになるのはもっと下である。

○この幸福になるための種は明德仏性である。この種をまいてこの幸福をつくる元は常に人として守るべき道を実践することである。明德仏性を明らかにして何事に対してもむさぼらず、いからず、心がねじけないようにして、親に孝行を尽くし、夫に対しては素直であり、子供を育てる時は正しい道に従うことである。

明德・仏性を明らかにするとは「良知に致る」ことであり、「藤樹先生に学ぶ その三」で詳しく説明してありますが、分かり易く表現すると「五事を正す」ことであり、

視 優しいまなざしでものごとを見つめる

聴 耳を傾けて人の話を聴く

言 思いやりのある言葉で話しかける

貌 和やかな顔つきをす

思 まごころこめて相手のことを思う

をよく実践することにあります。

○先祖の積善があれば、本人が明德を明らかにしていても、幸福を得ることもあるが、子孫に禍を及ぼすことになる。

○先祖の積悪があれば、本人が明德を明らかにしていても、幸福を得ることができないこともあるが、子孫に幸福を及ぼすことになる。

○先祖の積善があり、本人が更に積善を実践すれば、子孫は幸福を得ることができる。

机の前に以前台湾で入手した文章を貼っていますので転載します。これも善因善果・悪因悪果の大切さを表現しています。

「人に善を為せば福未だ至らずと雖も禍は己に遠く離れ、人に悪を為せば禍未だ至らずと雖も福は己に遠く離れる」

孝行

藤樹先生は孝を万物の原理と考えられ、子をよく教えることが孝であるとして、親の子供への孝を強調されています。子供孝行であります。

○親が子供を慈愛するためには、基本的な人としての生きる道を教えて、子供を立派な人間に成長させることを根本とする。

○我が身は親から受けたものであるからすなわち親の身である。親から受けた我が身を分けて子供の身ができたのであるから子供の身も根本は親の身なのである。

○子供によくない道を教えて、子供の望むように気ままに育てることは元来父母の身を悪い道へ陥れることになる。

○子供によく正しい道を教えてその孝徳を明らかにして、親自身が子供に対して孝行を勉めるべきである。

三代のつながりを考えてみると、わが身は親から受け継いでおり、子供はわが身を受け継いでいることになる。だから子供をしっかりと育てることは親に対して孝行していることになるのです。

子供の教育

- 子供を教育するということは子供に正しい道を教えてその明德仏性を明らかにさせることである。
- 子供の明德仏性が明らかになればたとえ貧しくとも心のもつた孝養を尽くすので親の心は安楽になるのである。
- 天下に宝物が二つある。人々の心の中に明德と名づけた価値のつけようのない宝物がある。これを性命の宝と書いて天下第一の宝である。この宝をよく保つことができれば、その心は常に楽しく子孫も栄えることができる。
- 性命とは万物が天から授かったそれぞれの性質と運命のことである。
- 金銀珠玉や地位が高くなるのを世間の宝と言い天下第一の宝である。明德が明らかかな人がこれを受ければその幸福は更に充実し、他の人までもそのめぐみにうろうとすることができる。
- 明德は本来人々に具わっているものなので、聖人でも凡夫でも求めれば得ることができるが、世間の宝物はその人の天から与えられた福分により努力しても得られないことがある。
- 天下第一の宝すなわち明德をゆずることが子供を愛する究極なのである。
- 子供を教える上で幼少と成人との差別がある。幼少の時は父母の心行を教えるの根本とする。親の言うとおりにしないが、親のするとおりになる。
- 子孫に教えるには幼少の時を根本とする。昔は胎教とい

て胎内にある間にも、母親が徳を身に付けようとした。今時の人はこの理を知らないで幼い内は教える必要がないと思っている。

○胎教とは胎内に有るうちの教えであって、この時の教えとは母の心持と身の行いにある。この時期は気が集まり形がかたまる始めなので影響を受け易い。

○本当に教えるべきことは徳教である。口で教えるのではなく、わが身を立正し正しい道を実践して、人が自ら変化するのを徳教と言う。例えば水が物をうるおし、火が物を乾かすようなものである。身を立正るとは立身出世ではなく、道において身を立正るのである。

○成人になつてからの教えは明德が明らかかな師を求めて正しい道の心学を教えて、ひたすらに明德を明らかにする工夫をして、才智や技能などはその人の生まれつきの器用さにしたがつて教えればよい。

山里介山著の「藤樹先生言行録」の中で藤樹先生が「明德を明らかにする工夫」を次のように教えておられる。

明德を明らかにする本は、良知を鏡として独りを慎むことにある。良知とは赤子・幼児の時よりその親をしたしみ、目上の人をうやまう善の心を根本として、善悪の分別・是非を心からわきまえ知る徳性の知を言うのである。

○孟子が師について学んでいる途中、ある時里に帰った。孟子の母はその時織機で絹を織っていたが学問の途中で

用もないのに帰ってくるとは何事かと言って小刀で絹を切り裂いて、お前が学問に油断しているとこのようになるのだと言って甚だしく戒められた。孟子は驚き、ひたすら勉学に励み、ついに大賢となったのである。

孟子の母が絹を切り裂いたことは狂いじみているように思われるが、徳を明らかにすることが一番大切なことなのである。

孟子の母については「孟母三遷の教え」という有名な言葉があり、子供の教育のためにでき得る限り良い環境を選ばれたということである。

高島市教育委員会発行の「藤樹先生」の中に有名な「あかぎれこやくの話を語り、大洲からわざわざ「あかぎれこやく」を持って近江の小川村まで帰ってきて母親に渡そうとしたが、母親は学問の途中で勝手に帰ってくるとは何事かとして返したと言ってお話です。これは孟子の母親の話の参考にして、藤樹先生の母親を思う気持ちを物語りにしたもので、年譜の中にはなく、つくり話であると言われています。明治時代に書かれた「近江聖人」に載っているようです。

○程明道、程伊川の母親は徳の高い人であり、子供達のわがままを許さず、大きな過ちがあれば父親の大公に何を立てて深く戒めておられた。子供が愚かなのは必ず

母親のその時だけの愛におぼれて、その子の過ちを戒めることをしないからであると言われていた。父親の大公は良い師を探して二人に心学を学ばせた。そして後に二人は立派な大学者になったが、幼少の時に母親に徳性を養われ、成人になって父親から学ぶことを教えてもらわなければこのような立派な人物にはなれなかったであろう。

その他、多くの事例を挙げながら子供の教育の大切さを述べられています。

昨今の世情を観ると本来あるべき家庭や家族というものが崩壊してしまった感じがしますが、我々日本人は昔からの大和の精神をDNAとして受け継いでいるわけですから、戦後六十年のトラウマから解放される必要があります。

三七〇年前の藤樹先生の教えを広く知ってもらうことを願って六回にわたって執筆してきましたが、この辺で終了することに致します。

井上昌章

●いのうえまさゆき 1940年1月1日生まれ。2000年日本電気硝子(株)定年退職。現在滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21(滋賀県シニアテックニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合)専務理事、滋賀県技術アドバイザー、大津木鷗クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
(資格)ISO14000&9000審査員補

梅ジュースを口にするとき

A heart warming story “When I drink plrm juice”

今関 信子



イラスト：千田 満

最近、大人の関係に似て、子どもたちの関係が、あっさりしているのではないか。これでもいいのかな……、そんな疑問を抱いていたとき、一冊の本を読んだ。『裸で育て 君らしく』（NHK こども）プロジェクト）である。

この本の最初に出てくるエピソード「ヨモギたん」事件」は、衝撃的だ。

アトム共同保育所の「ぞうぐみ」では、朝、十時から作業して、いよいよ最終段階。丸めたたんごを運んでいる最中、たんごが床に飛び散った。「理穂が落した」「理穂のせいだ」みんなで責めた。

ぞうぐみ担任の長谷川先生は、「グループの人、いっしょに考えてやってみよう、声を掛けて待つことにした。」

三十分たった。進展はない。

さらに四十分が過ぎたとき、「わたし、お盆、離してしまった」「藍も」。それまで、グループのみんなと理穂を責めていた二人が、泣きながら告白したのだ。

長谷川先生は、「たれが悪い、たれの

せいやって、このままずっと言いつてく
んか?」と、声を掛けた。「いやや、
子どもたちは、即座に言った。それか
らの子どもたちは、落ちただんごを拾
い始め、「ミミを除こうとした。だんごが
床に落ちてから、一時間が過ぎていた。
もちろん、落ちただんごは食べられ
ない。

残っていただんごを、分けることに
なった。他のグループは、三個ずつ。こ
のグループは、一個半ずつ食べた。

長谷川先生は、「あの時、困った時に
他人のせいにするのでなく、仲間とし
てどう考えるか、それを経験してほし
かった」と、ふりかえる。

アトム共同保育所の所長、市原さん
は、時間を豊かに持つ人だ。大切なこと
のためには、時間を惜しまず使える人
なのだ。ぶつかったときが、チャンスだ
という。大人の判断で答えを出してし
まわない、この保育の仕方は、時間が
かかる。

わたしは、この本を読みながら、「熟

成」という言葉を、思い出し、味わった。
アトム共同保育所の子どもは、ぞう
ぐみになるのを楽しみにする、五歳児
だけに許された活動があるのだ。梅が
咲く二月、もうすぐぞうぐみになる四
歳児たちは、進級する日を期待したに
ちがいない。

アトム共同保育所では、梅の実が大
きくなったとき、ぞうぐみだけが木に
登り、梅をもいで、ビンに詰め、氷砂糖
や蜂蜜を入れて、ジュースを作る伝統
がある。

梅は氷砂糖や蜂蜜を入れないと、梅
ジュースにならないという。異なるも
のがビンの中で、ぶつかり合うとき、梅
の果汁はゆっくりしみ出し、氷砂糖を
溶かして混じり合う。相互に働きかけ
合うからこそ、梅ジュースの味が作ら
れるのだとつた。

今年も、ぞうぐみがビンに入れた梅
と氷砂糖。熟成の時を待っている。少
しまた少しと熟成していく子どもたち
が、味わう日を待って。

M. Senda

● せんた みつる 1942年東京生
まれ。滋賀県生まれ。大阪
のデザイン会社を経て1
980年「イラストレーシ
ョンスタジオアビーロード」
設立。イラストレーション
を中心にポスターやパン
フレット等を制作、ロゴマ
ークやパース・キャラクター
デザイン等グラフィック
全般、広告エディトリアル
を中心に活動中。

● いませきのこ 1942年東京生
まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園
教諭となる。7年間保育者として働いた
後、創作活動にはいる。日本児童文学者
協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1
987年童心社 青少年読書感想文コンク
ール課題図書。「さよならの日のねずみ
花火」1995年国土社 青少年読書感
想文コンクール課題図書、厚生省中央
児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の
村で『寺子屋』づくり」2003年PHP
研究所 など多数



家の悲鳴が聞こえます

I hear the scream of the house

畑 裕子



イラスト：徳永 拓美

異様な音が響いてくる。何事かと窓を開けるとどうやら近くで家の改修工事が始まったらしい。二百メートルほど離れた二階の屋根の上に巨大な鉤爪をつけたクレーンの先が見える。雨漏りでもしたのかしら、と思う。それにしても屋根の修理にクレーンを使用するのは少々乱暴ではないか。

そのうち、轟音はますますひどくなり、思わず、私は、「家が悲鳴を上げている」と口走っていた。翌日、屋根の修理ではなく、家の解体が始まったことを知った。なぜ？私は唖然とした。我が家同様、まだ築二十五年に満たないではないか。それなりの事情はあるのだらう。が、あまりにも解体は早すぎるのではなからうか。更地にした後、新築の予定だということ。家はあれよあれよと言う間に形を失っていった。その間、たつぱり家の悲鳴を聞かされた。ある時は号泣、ある時は恨めしげにひいひいと泣く。胃壁が共鳴してしまっただのか、ちくちく痛む。物にも心があることを実感させられた。

幾日かして、同世代の家主の弁が伝わってきた。「建て売りの耐久年数はせいぜい三十年、五十年はもたない。私が平均寿命を生きるとしてあと二十五年、家主より家が先にダメになってしまふ可能性が高い。リフォームも考えたが、かえってコストがかさむ。それなら今のうちに建て替えをと、決心したのだ」と。

私の脳裏にドイツの知人宅が浮かび上がってきた。二年前招待された築百年の家である。彼と彼女が三年間探してようやく見つけたお気に入りの家だった。彼らの意にたがわず、訪問客は口をそろえて重厚でそれでいて近代風に改装された住まいの素晴らしさを讃えるという。私も屋内に招じ入れら

れるや、「本当に百年経った家なのですか」と愚問を発したほどである。

持ち主から持ち主へとたいせつに受け継がれてきた長寿の家だからこそ、よけいに愛着も湧くのだろう。なんだか、家の精霊に見守られているような安らかさを覚えたものである。ドイツと日本の家に対する考えを単純に比較する事はできない。石造建築と木造建築の相違もあるだろう。が、そうはいっても一生のうちには二度も新築せざるを得ない日本の家の現状は憂うべき事ではなからうか。

解体の一部始終を見ていたわけではないが、近所の人の話によると、解体は素材や部所によって丁寧に分別されていたという。せめてもの慰めである。古いとはいえない素材であったろうだから、またどこかで生きる場が見出される事を密かに願った。今、更地にはコンクリートの土台が出来上がり、新たな家を持ち受けている。

私が高校時代まで過ごした故郷の家は江戸時代に建てられた家だった。大きな梁が剥き出しになっており、夏に青大将がどさどさと落ちてきて胆をつぶした事がある。広い土間にヒキガエルが顔を見せる事も珍しくなかった。私にとっては歓迎すべき生き物たちではなかったが、母は「家の守り神様だからね」と大切にしていた。

その生家も今は取り壊され、故郷に帰るたびに私はただっ広い懐かしい家の跡地に立って周囲を眺める。

花や果樹の合間を縫って、ここはかつての居間、台所、納戸、客間などと眩きながら歩く。厳冬の頃、首まですっぽり炬燵に入り、胸を弾ませ物語を読みふけた思い出が甦ってくる。夏

になると西瓜がぶかりぶかり浮いていた井戸。今はコンクリートの蓋で覆われ、所在なさそうである。

時が流れ大家族から小家族へと変わった。老母はこじんまりした別棟で暮らす。母屋を解体した後、新築する必要も財力もない老母が守る跡地はこうしてときおり訪れるかつての子どもらをノスタルジアに誘っていく。それはただ感傷を呼び起こしているのではない。生家で暮らした思い出をゆっくり甦らせながら、胸の内に知らず知らず新鮮な息吹を送り込み、英気を養っているのである。

家の跡地に立った私の瞳には幻の生家が立ち上がってくる。家というものの奥深さを今更ながら思わないではいられない。家は単なる雨露をしのぐ建物ではないのだ。人の心を培い、受容する楽園なのだろう。

畑裕子

徳永拓美

- はた ゆつこ 1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。
- とくなが ひろみ 1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」(京都新聞社)、「守山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育研究所)、「甲賀の向かい話し」(サンライズ出版)、「イルカをおそった黒い波」(汐文社)など。レイカディア大学「手作り紙芝居講座」講師。

アウグスブルグから

ドイツのCO₂減少志向あれこれ

〈ドイツだよりー5〉

German news

原 修子



自転車持込可能な列車

ドイツでは学校休暇は全国統一ではない。16の州が幾つかのブロックに分かれ、休暇の時期を決めている。中心となるのは、やはり夏休み。家族揃って一週間から四週間間の休暇旅行に出かける。始まりは6月の半ばから7月の終わりにかけてである。おおよさっぱい言えば、休みは北から南へ降りて来る。そして休暇の始まりと、終わりの時に起こるのが、民族大移動現象。「ブレッヒラヴィーネ、プリキ雪崩」と呼ばれているように、休暇に出かける人、そして帰って来る人の車があウトバーンに押し寄せる。自動車クラブADACは毎回交通渋滞予報を出し、渋滞に巻き込まれないように出発日、時間を計画するようにと呼び掛けている。休暇中の長期天気予報と共に、大切な情報。

このような現象が出始めたのは第二次世界大戦後の復興が軌道にのり、経済的にもゆとりが出て来た市民達が、車でイタリアへ、ギリシャへ、そしてスペインへと休暇にでかけるようになってきた1960年代からであろうか。

国連の地球温暖化に関する報告書が発表されて以来、CO₂の問題が大きく取り上げられるようになった。拙稿「省エネは、…」で触れた点も、現在ではCO₂の排出量という観点から取り上げられるようになっていく。例えばテレビをスタンドバイの状態で置いておけば、それで消費される電力量がこれこれ。それだけの量を発電するためにこれだけのCO₂が大气に排出されている。だからスタンドバイは止めましょう、というよう

に。またどの車に街の中心地までの乗り入れを許可するかという基準を、触媒の仕様で決めようという動きもある。先日はテレビで

「CO₂日記」なるものをつけている家族、というのが紹介されていた。夫婦、小学生の子供一人の三人家族。

自分達が一日にどれだけのCO₂を直接的、間接的に排出したか、或はどれだけ抑えたかをチェックしている。「今日は車を利用せず電車で通勤したし、妻も買い物には自転車で行ったから、明日は車通勤しても良いか」、等というご主人の言葉を聞いていて、「昨日はこれだけしか食べなかったから、今日はキーキ一個大丈夫よね」、と言うダイエット中によく出て来る言い訳を思い出ししてしまう。それだけで良いのかどうか、意見が分かれるところでもあろう。

しかし、身の回りで自分出来る小さなところから始めて行くのも大切なこと。

身の回りと言えば、休暇を国内で、或は隣国のオーブリーで過ごす人達も増えて来た。そうした休暇地の中には、環境保護、CO₂対策として滞在中は自動車を使用しなくてもすむようにと、貸し自転車等の設備を充実させるところも出て

来ている。自動車ではなく列車で到着すれば、ホテルからの出迎えサービスが駅で待っていてくれ、出発の時には駅まで送ってくれるというような村もオーブリーにある。その村全体が取り組んでいる事業である。滞在中の足としては、自転車、電動スクーター等が安い料金で提供されていると同時に、自然を楽しむプログラムが色々と用意されて

いる。「自動車が使用出来ないために、環境客が減った」ということはない。むしろその反対で増えて来ている」、と地元の環境関係者はインタヴューに答えていた。滞在客も「意識して選んだ」と言っていた。

サイクルング道路網も徐々に拡大充実されて来ている。特急にはまだ採用されていないが、自転車持ち込み可能な列車も増えた。ADACも自転車型休暇希望者用のパンフレットを提供するようになった。休暇の形態も少しずつ、ほんの少しずつだけでも変わって来ている。しかし「プリキ雪崩」が無くなることもないであろうというのも確かである。このような現実を前に焦りを覚えるものの、さて自分に何が出来るかと考えると、前述のダイエット

中言い訳型CO₂排出量減少方式(?)になるであろうか。しかし自転車に乗れない私としては、代わりを見つけるのが大変。自転車の練習をして自転車漕ぎを始める。これこそ本当のダイエット型排出量減少方式!

ところで、渋滞の始まりを、何処で何時何分、とまで予報し、それが的中することの多いでADACの渋滞予報は長期天気予報よりも正確だそうで(本当?)ある。

原修子

●はらしゅうこい徳島市出身。1972年よりドイツアウクスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

〈MOH-ECOTOURISM-6〉

日本百名山の効用

檀上 俊雄



作家深田久弥が、今はなき山岳雑誌『山と高原』に連載し、新潮社から単

行本として『日本百名山』を出したのは1964年である。1978年に文庫本化されるとともに、登山愛好者だけではなく多くの人が手に取ることとなり、これにより登山を始める人を大量に生み出すに至った。

歴史的にも水源信仰や名山を愛でる伝統を持つ我が国において、外国からもたらされた近代登山、より高くより困難なルートから登ることを目的とするアルピニズムは、時間とともに伝統的な登山と

融合した。これにより登山は国民的なスポーツとして広く普及していったことが、こうした本を受け入れる下地としてあつたといえるだろう。

登山はスポーツと位置付けられるだけでなく、健康を増進し、国土を知る上で大きな効用があり、さらに安全かつ快適ということで、防寒、防滴、即乾性、軽量化という要請を受けて最先端技術で作られた登山の装備や服装、キャンピング用品は、ライフラインが寸断される災害に対する危機管理の面で有効であり、さながら楽しみながらそのトレーニングを行なっているようなものであり、大いに注目すべきものと考えられる。

読んで共感することが多ければ、山登りを始めてみようということになるのは、自然の流れ。読者の中核をなすのが中高年であれば、かつての登山チームの際にやりたかったがその余裕がなかったという人も多い。経済的、時間的な余裕があれば、その気になれば百名山登頂ということはさほど難しいことではない。昔では考えられなかった詳細な登山地図、ガイドブックですべての山は紹介され、さらに登山専門旅行

社のツアーによって、困難な山も専門ガイドが導いてくれるからだ。

百名山は、作者が登ったことのある全国の山の中から、おおむね1500メートル以上を対象に、品格、歴史、個性という基準で選んだものであり、山の識者から選び方が東日本に片寄っているという批判は多いものの、取り上げられた山は登山対象として遜色はなく、作家人生を賭けて山の文学に取り組み、茅ヶ岳登山中に急死するというセンセーショナルな出来事もあって、多くの人に支持されることとなった。

戦前戦後にまたがって行なわれた登山にもとづく記述であることも、中高年の人には共感と呼んだ。深田久弥は1903年に加賀市に生まれ、東京大学在学中に新潮同人となり、作家を志す。百名山の文章の中にも、小林秀雄、今日出海、堀辰雄などの名が出てくる。どれだけ登っても登山の専門家然とした記述はなく、道をまちがった話などもほずかしげもなく書いていて、作家として山に立ち向かうという姿勢は一貫している。山の総合的な案内に見えて、よく読むと立派な文学作品で

あることから、多くの読者は深田ワールドへ引き込まれてしまう。

それにしても開山前後の歴史的、文学的な記述については多くの紙面を占め、手を抜くことはない記述は多くの人の感動を呼ぶ。東京に出て自らの出自を問われ続けたように、曖昧な生い立ちでは存在を許さないといわんばかり。山を眺めることが好きだということからも、山は美的な対象であり、哲学的な存在であった。登山は往々にして、登り方に話題が集中しがちだが、そうした呪縛から解き放したことも、この本の好まれる点かもしれない。


白山が一望できる大聖寺に生まれ、その前山である近くの山に親しむ。戦時中の疎開3年半という時期にはすでに作家を志すことを決めていたことから、ふるさとの山は原点の山として不動のものだったことが伺える。東京へ出てから全国の山に精力的に足を運ぶが、思いは常に白山に向かっていたのだ。こうしたところにも全国の読者が親しみを感じたことだろう。

こうして本のベストセラーにとどまらず、中高年を中心にした百名山登山

ブームが巻き起ったのであるが、大手旅行代理店でもツアーを組み、百名山の具体的な登り方を教えるガイドブックは氾濫し、テレビでも盛んに取り上げられた。現地ではそうした客が大半という旅館までできている状態だ。団塊の世代の定年退職が社会問題となるなかで、このブームはますます大きなうねりとなってゆくことが予想される。

これまでにやり残したことを、退職を機にやる。これまでは四国八十八ヶ所や西国三十三ヶ所などの札所めぐり、京都奈良の古社寺めぐりなど、心のよるところを求める旅が人気を集めてきた。そういう年齢まで元気にやってこれたことに対する、いわばおかげ参りというような色彩が濃いものであった。

百名山は団塊の世代にとつて、こうしたおかげ参りとしてではなく、これまでの人生、高度成長以降の右肩上がりの社会をささえてきたという充足感を再度求める、あくなき挑戦というべき願いが込められていることは注目すべきだろう。概ね1500メートル以上ということで選ばれた百名山は、ハイキングがてら手軽に登れるものではない。



白馬岳の名は、山に雪形として現れる馬を苗代作りの目安にしたことからといわれている。豪雪は谷を埋めて日本を代表する大雪渓を作り、雪融けの水に育まれる一面のお花畑が咲き乱れる夏は登山者が長蛇の列となるが、本場アルプスの氷河の山に似て百名山の中でも人気が高い。

山登りに興味のない人でも、この風景を見れば旅心を誘われる。この大雪渓は快適に登るためだけではなく、年ごとに長さや厚さが違うことから気候の変化を映す鏡のようなもので、同じ時期に二度三度と足を運ぶとその違いに驚く。

そして多くの登山者を収容する多くの山小屋はエコロジックとして一新されていて興味深い。特に山頂直下の白馬山荘は、収容人員1200名の日本最大規模を誇り、積極的に環境対策に取り組んでいる。こうした面でも注目すべき山である。

山小屋泊まりとはいえ、自らの足で、雨に打たれながら登る苦行にちがいない。登る為には日々のトレーニングを欠かさず、へばらないよう食事を流し込み、見知らぬ人と枕を並べ、睡眠薬を使って眠る。皆に遅れをとることのないように頑張つて登る。これを苦行ではなく、娯楽としてしまうのがこの世代の特長なのだ。

とはいえこれまでの発展してあたりまえの日本経済と社会は、オイルショックやバブルで持続させることの不可能さや、その歪みの大きさを思い知らされ、さらに追い討ちをかけるように環境の危機を迎え、自信喪失、先行き不安は深刻さを増している。とにかく登れるだけ登ろうという百名山詣では、精神的に穏やかで豊かな人生を送るべきところを、一歩間違えると悲劇的な結果を招きかねない危うさがある。

深田久弥は、山を眺めながら自らと向かい合おうとした。山に向かつて品置位、歴史、個性を問い続けたが、それは自らへのエールであった。そうした願いを思いはかりながら、あくまで数は二の次で一山一山味わって登ることができれば素晴らしいものとなるだろう。ガイドブックを見てどう登るかということの前に、百名山の本そのものを改めて熟読する必要がある。旧き良き時代の世間を知る旅にもっとも近いものひとつが、この百名山登山といえるだろう。世間を知り、それを人生に活かしてこそ、百名山スーパーツーリズムへの期待は大きいものがある。

檀上俊雄

● だんじょう としお 1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／「比良山・湖西の山」山と溪谷社（共著）

いのち 生命のつながりを考えませんか??

作カ江


今回紹介するのは



いり たか さん
飯高 卓石 さん

飯高さんは

千葉県県の



ご出身。

若い頃に

インドや

日本国中

を旅したそうです。



そんな飯高さんが

考えたことは…



「生命とは何ぞや、
死んだらどうなるのか」

そして旅するうちに

辿りついたのが、



おきまむら
木村
小入谷

ここに住もう。

と決め、

まずは

廣村す前の
この集落の開拓。



そして、…民家を



「生命」について考える

ため、山をこえて



何年も何年も

禅堂へ

通った

そうです。



そんな飯高さんの

就いてきた



収入を得るために

山の仕事を始めた



木を伐ったり

草刈りしたり

一連の山の

作業を25年
ほど続けた。





禅堂の準備もしつつも
続けていた山仕事。



森林について学ぶうちに
森林も生命とつながって
いるのだな...



と、禅・森林・人間
生命...

全てが
つながっている
のは、
気づいた
瞬間。

そして、自宅を

禅堂として開放して
いたある日、



ヒトリの女性が

朽木学道舎に

やってきました。

まりなさんである。

ホームページを見て、

坐禅をくみに

やって来たのだ。

「ヒロシクお願ひします」



彼女はなんと

イギリス在住。

イギリスで

禅に

興味を

持ち、

一時帰国して訪れたのだ。

そしてその後、

イギリスから

朽木学道舎に

通うように

なり、

ふたりは

めでたく白山の頂上

結婚したのです。

結婚したのです。



今やまりなさんは

朽木学道舎に

いらなくてはならない

存在。

ホームページの

作成や、

参禅者のための

精進料理づくり。

なり。

英語はお手のもの

なので

外国人の

お客さんも

心配

無用。

無用。





●オノエキエ (本名加藤 みゆき) 1997年に朽木村 (現高島市) に移住。朽木の自然、行事、人間などを、冊の本にまとめ出版。現在は、人の子どもを育てる中。

善意の愚か者が寄って 世界を崩壊させる

Fools of good will ruins the world

内藤 正明

ある人（S氏）が検診でカロリーを取りすぎを注意されたと思ってくさい。その時、彼は「自分は命令されるのはいやなので、自主的に目標を決めて努力するよ」と言いました。そして、栄養学では有名なK教授のアドバイスを参考に、毎食のカロリーを10%づつ減らすことを宣言しました。約末期間が経ってみると、実によく頑張って12%も減らしていたのです。「どうだ自助努力でもちゃんとできると言っただろっ」と大いに自慢しましたが、体重を量ってみると却って大幅に増えていることが分かりました。

医者「変だな。本当に12%づつ毎食減らしたのじゃないかね？」

S氏「ああ、あの有名なK先生の指導で正しく減らしたし、証拠の記録もある。」

医者「本当に3食ともきちたか？」

S氏「3食といわれると…。」「実は余りお腹が空くので、夜食にもう一食増やしたがそれももちろん12%減で

ね、それが何か？」

医者「!!」

●環境と経済の関係

マンガみたいな話ですが、これは温暖化対策に産業界が主張したことです。

しかし、クルマ一台、冷蔵庫一台の効率を上げて、それに倍して大量に作れば環境負荷の総量が増えることは小学生でも分かることです。大量生産・消費が問題であることはすでに誰もが言ってきたのに、それは社会経済の問題であって、これについては有名な近代経済学のS教授が、市場原理は神の手だと言っておられるからとか…。そもそも経済の成長なくして社会はありえないし環境投資もありえないと言っておられると繰り返されてきました。

●日本固有の「もったいない思想」

「わが国の技術効率は世界一なので、これ以上の環境負荷削減は難しい」と産業界や経産省が主張しますが、それは

総排出量が少ないかどうかは関係ないことは、今回の例でも分かるでしょう。ドイツサミットで安倍首相が「美しい星50」という提案をして、そのために日本の勝れた技術を役立てると言っています。しかし、「一食毎のカロリーは減ったが、総カロリー摂取量は大きく増大した」ということが起らないためには、人間の価値観を変えることが不可欠です。それ故に、日本の勝れた技術よりも折角のわが国固有の「もったいない思想」を広めることの方がよほど大事だと思われまふ。

●近代学問の限界

なお、先のK教授もS教授も嘘を教えたわけではないですが、結局、専門の狭間で、部分的に正しいことを言うに過ぎないのです。このような使い勝手の良い専門家は、「エネルギー×審議会」とか「経済〇〇審議会」の会長さんといった形で奉って、世間には「大権威の先生のアドバイスによって…」

というお墨付きとして利用されています。断片的な専門知識をうまく利用して、企業利益を得る。一方で多大な社会的費用を発生させてきた例は枚挙に暇がありません。

自然エネルギーや環境技術などの経済的には成立しにくい技術について、国の補助をうまく引き出し、経済効率“基準にしたがって設計した大規模施設は、ほとんど実用にはならないままにスクラップになっているものが多いとか。これもその道の権威なる専門家が「技術的」側面に限ってお墨付きを与えた結果です。それをあたかも全面的な支持ということにして進めました。しかし、これらが社会的に無意味なのは、技術の所為ではなくて社会全体の仕組みがそれを受け入れるようになっていない場合がほとんどであるのに、専門家はそのようなことは分野外として責任を持たないことにあります。これは近代の学問そのもののあり方になってしまっているでしょう。

無一物中無尽蔵

有花有月有樓台

伊藤正明

●なにとつ まさあき 1939年大阪府生まれ。1962年京都大学工学部卒業、1969年同工学博士、1974年 国立環境研究所主任研究官、1990年同統括研究部長、1995年京都大学工学部研究科教授、2002年同大学院地球環境学堂長。

現職／佛教大学社会学部教授、琵琶湖環境研究センター長、京都大学名誉教授、(NPO) 循環共生社会システム研究所・代表理事、(NPO) KES環境機構・代表理事、他。

著書「持続可能な社会システム」、「地球環境と科学技術」岩波講座など。活動／持続可能社会の理念と実現方法に向けた研究およびその実践活動。

M・O・H senryu
M・O・H川柳

M・O・H川柳を募集いたしましたところ、たくさんの方から応募をいただきました。ここでご紹介させていただきます。ご募集いただきました川柳は「第2回MOH川柳選手権」の対象作品とさせていただきます。ご応募くださいました皆様、ありがとうございます。 MOH川柳をじっくりとご堪能ください。

■びわこ環境ビジネス
メッセ2017(2008年)

- もったいない口だけ言ってもだめですよ
- 本多きくの(60) 石川県
- もったいない と言いつつ 今日も 買い物へ
- 吉田 則子(62) 福井県
- 日々感謝 きれいな琵琶湖 よみがえれ
- 木村 忠義(63) 長浜市
- もったいない そんな心で リサイクル
- 吉田 雄太(23) 福井県
- お茶葉を 土にかえし ミミズの住み家
- 食べ残し もったいないと 母太る
- 島田 祥子(34) 長浜市
- 環境を守るなら 飲酒・喫煙も 考えよう!
- 藤田 哲夫(60) 彦根市

- エンマ大王に 舌抜かれるほどの 暑さかな
- 足達 元一(78) 安土町
- 子供にも 伝えたいモットー
- 田中 智寿(32) 高島市

■聖泉大学(11/19)

- ほどほどにやっと気づけた 大切さ
- 藤居 孝平(21) 彦根市
- もったいない 古き時代を 思い出せ!
- 辻林 孝(21) 京都市
- あなたの命 自殺なんて もったいない
- 山添 裕加(18) 守山市
- 見直そう 1人1人の 生き方を
- 平田 直也(22) 東近江市
- 知っておこう 食べれる今が 幸せと
- 村居 繁(21) 平万町
- パチンコは やめられないから ほどほどに
- 寺居 明日香(19) 長浜市
- 節約は 明日からだといつも言う
- 大東 望(19) 長浜市
- ほどほどに 思っているけど やめられない
- 平田 守(60) 東近江市
- おかげさま 祖先の靈に 日々感謝
- 田中 順二(57) 亀岡市
- もったいない 断たれる命 断つ命
- 岩井 清子(48) 守山市
- 滅び逝く 世界を止める その一歩
- 加藤 勝久(25) 岐阜県
- もったいない もったいないけど ほどほどに
- 草野 桂(19) 長浜市
- 少しだけ ちりもつもれば やはり無駄
- 井上 美江(53) 長浜市

●もつたいない あなたの笑顔 ありがとう

●服部 日出子(54) 岐阜県
つけっぱなし もつたいない
ムダスイッチ

●西村 昌子(48) 彦根市
もつたいない 通勤時間を
有効に

●もつたいない いつまでつ
けてる 冷暖房

●もつたいない 時間とお金
の ムダ遣い
畑維久美(21) ※住所不明

●税金の 無駄遣い ああ、
もつたいない

●辻林 幸子(57) 京都市
もつたいない ダイエット
いるほど 食べまいぞ

●渡辺 和江(57) 山口県
もつたいない 他人に言わ
れて ハツとする

今西 肇(56) 長浜市

■明生会(10/26)

●もつたいない 今日のいの
ちを 大切に

●中川 長司(72) 長浜市
●ありがたい 孫のことばに
目を覚ます

●藤 厚之(83) 長浜市
●おかげさま 今日も一日
生かされて

●中川 二郎(92) 長浜市
●何時の間にやら 卒寿すぎ
もつたいない

●中川 嘉一(93) 長浜市
●おかげさま 今日あるのは
先祖のおかげ

●中川 孫之佑(76) 長浜市
●おかげさま これで充分
日々感謝

●中川 名前不明(76) 長浜市

■レイカ(10/27)

●無駄ないか もつたいない
を 広めよう

荒井 弘進(73) 草津市

●おかげさま まわりの人で
生きている

●浦山 増二(66) 栗東市
●もつたいない新幹線
財源を 環境に

●谷 正子(62) 大津市
●良い話 聞いただけでは
もつたいない

●藤井 文字(61) 大津市
●嘉田知事さん もつたいな
いで がんばって!

●森 紀子(65) 大津市
●こだわらず 笑顔で生きる
馬鹿な奴

●柏手を 打てば後から
孫も打つ

●汗かいて 奉仕の顔が
健康美

●煩惱も 程々捨てた
六十の爺

●あれこれと 欲を捨てれば
青い空

●我が人生 二度も大学
果報者

●山田 真積(65) 米原市
●この刻を 生きてゆけるは
おかげさま

●高橋 俊文(62) 栗東市
●安売を 一品余計で
もつたいない

●古和田 紀生(65) 近江八幡市
●愚痴なしに この世を通す
難しさ

●大畑 正芳(65) 大津市
●おかげさま 感謝のありて
みなまるし

●高間 照子(63) 大津市
●ありがとう 君がいてこそ
オレがある

●林 清法(63) 野洲市
●また買った 「もつたいな
い」と 妻叱る

●山中 貞三(67) 草津市
●もつたいない 今日からボ
クも 残さない

●このゴミは これからどん
な 旅するの

瀧 恒夫(64) 湖南市

●おかげさま 感謝の気持ち
孫たちへ

●榎本※名前不明(63) 草津市

●何日まで 喫煙

●ほどほどに

●西村 武(68) 野洲市

●未来のことに 思いをほせて
ほどほどに

●上田 直之(71) 大津市

■立命館(10/31)

●もったいない 思うだけでは
始まらない

●河村 吉彦(21) 草津市

●もったいない ふんわりア
クセル 燃費良し

●ヒガシ(21) 大津市

●おかげさま おおきにどう
も また来てね

●みー(21) 京都市

●もったいない 安物買いの
銭失い

●「おかげさま」 そう言う

●あなたに 「おかげさま」

●ほどほどに 孔子でなくとも
足るを知ろう

●浜崎 一訓(21) 草津市

●凡人の 残り少ないひらめ
きを 他の分野で再利用

●吉田 賢一(21) 京都市

■一般

●もったいない 精神 よみが
える

●姉崎 登志子(63) 福井県

●おかげさま もったいない
で 二人三脚

●室田 美砂子(48) 福井県

●ぜいたくの つけはいつし
か 子や孫に

●西村 輝彦(66) 東近江市

●ほどほどに 衝動買いは
ゴミの山

●山本 忠嗣(63) 野洲市

●朝起きる 手足が動く
ありがたい

●吉川 眞澄(73) 米原市

●もったいない こぼれたご
はん バイキン扱い

●後 藤健二(64) 長浜市

●破けても そのままにして
年の暮

●牧野 隆司(62) 高島市

●もったいない 物の冥加を
忘れずに

●山中 泉(70) 彦根市

●話し好き 聞き手は疲れ
なま返事

●もったいない 使わずじま
い バーゲン品

●吉田 敏雄(69) 近江八幡市

●六十路来て 知識学問
呆け防止

●北川 敬之(62) 米原市

●おかげさま 食事制限なし
の 73才

●小西 忠一(73) 近江八幡市

●ペットボトル 水道使い
中洗う

●反田 勇(65) 彦根市

●見ぬテレビ つけばばなし
もったいない

●吉川 壘子(65) 彦根市

●ネエあなた 人のせっかい
ほどほどに

●残すのが もったいないか
ら 全部食べ

●石原 芳(69) 米原市

●持つ者は おかげほどほど
気楽に云い

●増谷 綱一(66) 西浅井町

●ウオークラリー 目隠しを
して そつと触れ

●小滝 功(68) 彦根市

●太りすぎ もったいないが
仇となる

●山崎 美里(62) 米原市

●もったいない 今自分のし
てること みなおそう

●おかげさま 手と手を合わ
せ 感謝の日々

●口げんか あなたもわたし
も ほどほどに

●田井中 幸子(61) 東近江市

講演日記

A lecture diary

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。5月～7月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

- 滋賀県倉庫協会定例会
テーマ：もったいない(M)おかげさま(O)ほどほどに(H)が持続可能社会をつくる
日時：5月15日
主催者：滋賀県倉庫協会
場所：琵琶湖ホテル
参加者人数：60名
- 大阪中小企業家同友会 環境部会例会
テーマ：もったいない(M)おかげさま(O)ほどほどに(H)が持続可能社会をつくる
日時：5月16日
主催者：大阪中小企業同友会
場所：大阪中小企業同友会事務所
参加者人数：60名

- 南和会「総会」
テーマ：もったいない(M)おかげさま(O)ほどほどに(H)が持続可能社会をつくる
日時：5月17日
主催者：(株)しがぎん経済文化センター
場所：草津商工会議所ホール
参加者人数：60名
- 龍谷大学国際文化学部 講義
テーマ：循環型社会をつくる中小零細企業
日時：5月22日
主催者：龍谷大学
場所：龍谷大学瀬田キャンパス
参加者人数：250名
- 「MOH通信」執筆者懇談会
テーマ：テーブルトーク「これからのMOH通信」
日時：6月15日
主催者：MOH通信編集
場所：キャンパスプラザ京都
参加者人数：15名
- 新江州(株)主総会
テーマ：循環型社会に向け

- てのわが(繼)の取り組みと方向性
日時：6月15日
主催者：新江州株式会社
場所：公会議室
参加者人数：20名
- シンポジウム
近代工業社会が直面する危機～エネルギー資源と地球環境が抱える課題～
テーマ：エネルギーピークに日本はどう備えるか
日時：6月20日
主催者：長浜商工会議所
場所：北ビワコホテルグラスツイエ
参加者人数：80名
- 東近江市立能登川病院 職員研修会
テーマ：企業から学ぶ病院幹部職員としての在り方
日時：6月26日
主催者：東近江市立能登川病院
場所：東近江市立能登川病院
参加者人数：25名

- 彦根市西地区公民館 福寿大学講演
日時：7月18日
主催者：彦根市西地区公民館
テーマ：もったいない(循環)、おかげさま(共生)、ほどほどに(抑制)
場所：彦根西地区公民館
参加者人数：80名
- 内容：今、求められる倫理観を、子や孫に伝えよう
- タナベ・ソリューション フォーラム
日時：7月25日
主催者：(株)タナベ経営
テーマ：新江州の多角化戦略～ダンボール製造から流通、サービス、情報産業に～
場所：国立京都国際会館
参加者人数：300名
- 内容：①わが社の生い立ち
②経営マネジメントの導入
③三代目はなぜ身をつぶすか ④分社経営、ピラミッドからネットワーク型へ
⑤改革は「破壊と創造」
⑥企業永続の願い

観るだけより、暮らしてほしい!!

その希望に応えるために、都市から地方への移住や交流居住を応援する『田舎暮らし体験』『空き家見学』『町家再生塾』を実施します。

農のある

田舎暮らし体験

10/20[±]・21^日

In 伊吹山麓・姉川流域

11/10[±]・11^日

In 奥琵琶湖余呉

1泊2日

(15名程度)

古民家の

空き家見学

11/3[±]

In 浅井の里

日帰り

(25名程度)

よみがえれ

町家再生塾

11/17[±]

In 北国街道・木之本

日帰り・3回

(15名程度)

参加申込み

詳しい案内チラシをお送りしますので下記までご連絡ください。

滋賀県立大学 地域づくり調査研究センター

〒522-8533 彦根市八坂町2500

TEL0749-28-8612 FAX0749-28-8567

E-mail:chiiki@office.usp.ac.jp

http://www.cohok-style.jp (10月初旬開設予定)

琵琶湖が真ん中にある滋賀県は京阪神や名古屋方面からも近く、JRや新幹線などの鉄道、高速道路や幹線道路が整備された交通が便利な地です。ここには、琵琶湖をはじめとする豊かな自然環境や美しい景観、また、多くの歴史の舞台にもなった文化財や史跡、さらには、豊富な地域資源を活かした生活文化などがあふれています。移住や交流を希望している皆さんにとって、きっと「ゆとり」や「やすらぎ」、「いやし」「ふれあい」などを身近に感じていただけます。

[主催] 滋賀県・滋賀県立大学 [後援] 長浜市・米原市・木之本町・余呉町

「秋の夜長を楽しむ夕べ」

昨年に続いて森林公園「くつきの森」で行う「環境を考えるシンポジウム」第2弾です。森林とみなさんの暮らしの関わりを楽しく勉強でき、おいしいコーヒーを味わえて、山村ならではのふくろの味を楽しめて、星を眺めながらジャズを聴く—。こんなステキでぜいたくな時間を朽木の緑豊かな森林で体験してみませんか？みなさんの生活にも生かせる「なにか」を発見していただけたらと思います。どうぞご参加下さい。

日時 平成19年9月29日(土) 13:00~20:30

場所 滋賀県高島市朽木麻生443 森林公園「くつきの森」やまね館

日程 I部 テーマ「森と人とのつながり～桃太郎に学ぶロハスな暮らし～」

*「ロハス」とは、地球環境保護と健康な生活を優先した持続可能なライフスタイルとそれを目指す人たちの総称です。

開会 13:00

①基調講演「大地と森、そして命～ダルマとディーブ・エコロジー～」..... 13:05~13:50
朽木學道舎 師家 飯高 転石

②座談会 14:00~15:30

パネリスト 琵琶湖環境科学研究センター センター長 内藤 正明
画家 今森 洋輔
滋賀地方自治研究センター 理事 山口 美知子
朽木學道舎 師家 飯高 転石
NPO法人麻生里山センター 代表理事 玉垣 勝
コーディネーター MOH通信 編集長 辻村 琴美

③小川珈琲のバードコーヒー（農業を使わずに渡り鳥の暮らせる自然な環境で栽培したコーヒー豆）
で一服タイム＆コーヒーの入れ方教室 15:30~16:30

II部 山里料理で交流会（地元の食材を使ったお料理バイキング） 17:00~18:30

III部 「秋の夜長を楽しむ夕べ」 18:30~20:30
高島市民ジャズオーケストラ「ピックベル」によるジャズと
朽木太鼓の野外演奏

参加費 I・II部 3,000円 II・III部 3,000円 I・II・III部 4,000円

定員 100名（定員になり次第、締め切らせていただきます）

申し込み締め切り 9月15日

お申し込み・
お問い合わせ先

NPO法人 麻生里山センター
〒520-1451 滋賀県高島市朽木麻生443番地
TEL.0740-38-8099 FAX.0740-38-8012
Eメール asosatoyama@zb.tv.ne.jp

[主催] NPO法人 麻生里山センター [協賛] MOH通信・高島森林体験学校 [後援] 高島市

朝日新聞

2007年6月19日18面

定義集 大江健三郎

エドワード・サイードの意見ですが、最先端から地道なものまで、専門の研究と日々の実績を重ねた後、社会の現状と進み行きに憂慮する者として、それぞれの専門から踏み出して協働する人たち（アマチュアとしての知識人）の大切さです。かれらは実力と勇気をそなえた批判者で、時に政府・企業とも対立します。私は、原爆被災者の医療に永年従事され、欧米でもよく知られている、核廃絶の理論家

の老医師の方に、憲法「九条の会」の集まりで偶然お会いした感銘を忘れません。

京都新聞

2007年6月25日

「近江」を書こう

愛荘町のNPO法人（特定非営利活動法人）たねや近江文庫はこのほど、「近江」をテーマにした文芸作品を

対象にした「たねや近江文庫ふるさと賞」を創設、作品を募っている。たねや近江文庫は、滋賀の歴史や文化、風土を題材にした書籍「シリーズ近江文庫」の刊行に取り組みしており、第一弾として筒井正夫滋賀大経済学部教授による「近江骨董紀行」を販売した。「ふるさと賞」は、同シリーズの出版作品を募るために創設した。募集しているのは、「近江」をテーマにしたエッセーや写真紀行、論文などジャンルは問わない。四百字詰め原稿

用紙二百五十〜三百枚の未発表の作品で、応募の締め切りは二〇〇八年五月三十日。受賞作は同年秋季に発表する。最優秀賞には賞金三十万円を贈り、シリーズ近江文庫として刊行する。問い合わせは、たねや近江文庫 ☎ 0749(49)5932。

京都新聞

2007年6月25日

凡語

ひと昔前なら青年団に入つて大人の仲間入りをしたのが十六歳という地域の慣習に基づき十六歳以上に住民投票権を与えようとしたのが、野洲市の「まちづくりに基本条例案」だった。

投票年齢を二十歳から十八歳に下げた憲法改正のための国民投票法よりもさらに二歳引き下げる。同年齢の条例は神奈川県大和市以外にないという思いがった案だった。

「今どきの十六歳」が大人かどうかは意見が分かれたが、十六歳は義務教育を終え、女性が結婚出来る年齢でもある。「自分のまじの事を決める制度。若い人に任せてみることも必要」などと教育効果や若者の発想に期待する声が多かったという。

しかし、二十二日の市議会条例は成立したものの、年齢などを削除する修正が行われた。どうも修正した議員らには、住民投票の導入で議会の影が薄くなるという危機感の方が強かったようだ。市長と党であるため、否決はせず修正にとどめた、ということらしい。

海外の投票年齢は十八歳が一般的だが、欧州では十六歳に下げる動きが出ている。国内でも国民投票法の十八歳の採用や少年の刑罰対象年齢の引き下げから、成人年齢などの見直しは課

題となつている。

そんな中、野洲市は住民投票の実施のための条例作りに着手する。さて、投票年齢をどうするのか。この際、住民投票で意見を聞いてみてはどうか。

京都新聞

2007年6月25日

「ネオンよ おやすみ」
都「消灯」

一斉消灯で地球温暖化防止を考えよう。環境省や非政府組織（NGO）の呼び掛けに応じ、京都タワー（京都市下京区）や通天閣（大阪市浪速区）、東京タワーなど全国各地の名所や観光施設などが二十四日午後八〜十時の間、一斉に照明を落としたりイトダウンした。

今年はず年の一・六倍に当たる約六万三千カ所が参加。韓国・ソウルの観光施設も呼び掛けに応じた。

東京タワー近くの芝公園

では、食べ物の輸送距離を減らして食の分野から温暖化防止を訴えようと、国産の食材を使った料理の屋台が並んだ。雨にもかかわらず集まった千人近い人たちが、コンサートを聴きながら、ライトダウンを待ち、タワーを照らしていた明かりが消えると歓声を上げた。

京都新聞

2007年5月31日

沈黙の春

一九七〇年代、若い霊長類研究者たちや多くの市民に環境汚染への目を開かせた書物がある「沈黙の春（サイレント・スプリング）」だ。

作家で海洋生物学者のレイチェル・カーソンが米国で刊行、農薬や殺虫剤による環境破壊を告発したのは一九六二年。これをきっかけにDDTなど農薬使用の是非をめぐる議論が起きた。米国の国鳥で食物連鎖の頂点に

たつハクトウワシが激減したのを初め野生動物に大きな被害が出ていることがわかり、DDTなどの農薬が規制されることにもなった。

日本では、米国での刊行二年後の六四年、「生と死の妙薬」のタイトルで邦訳が出版される。だが、さほど話題にならなかった。その後、「沈黙の春」とタイトルを改め、文庫になったのが七四年。日本でも農薬禍が大きくな問題となりはじめたころで、ニホンザルの奇形問題とも期を一にしている。この時期、魚の背骨が曲がる奇形なども報告されていた。

「沈黙の春」の刊行後、PCBやダイオキシンなど新たな化学物質による環境汚染も問題となった。先進国でこそ規制が強化されているものの、発展途上国から農薬が残留した食べ物が入り込まれる「ブーメラン現象」も指摘されている。レイ

イチエル・カーソンの警告は、彼女の生誕百周年を迎えた今も生き続けている。

京都新聞

2007年5月31日

「遊覧船 エ」乗せて」

野洲市の農家や漁師らが六月から、同市の家棟川で遊覧船の運航を始める。観光資源として川を活用するとともに環境美化への意識を高めてもらうのが狙いで、三十日には新たに造った船を浮かべ、「試走」させた。

家棟川は三上山が源流で、同市内の多くの川が集まり、一九六〇年代後半までは船による穀物運搬も行われていた。住民らは二年前から河川美化に取り組んでおり、ホタルなども戻る「里川」の復活へ遊覧船事業を始めようと今年四月に二十五人がNPO法人（特定非営利活動法人）「家棟川流域観光船」を結成した。

完成した遊覧船は八人乗りで、全長約九メートル、幅は最大一・六メートル。ほかに二十人乗りの船など二艘を使い、琵琶湖の河口付近から上流へ約三キロを上る。船上で琵琶マスを使った「アメイオ御飯」など琵琶湖の伝統食を味わうコースも用意する。

先導は田舟などの経験者約十人で、この日は六人が乗船。竹ざおや櫓でゆっくりこいで感触を確かめた。同法人理事長の北出肇さん(六六)は「家棟川に親しみ、川を守ろう」という意識を持ってほしい」と話していた。初運航は六月三日。遊覧は二日前までに予約する。有料。申し込みは同法人フアクス077(589)2267。

京都新聞

2007年5月23日

「文明崩壊 瀬戸際に」

「地球白書」の刊行など地球環境問題についての研究や活動で知られるレスター・ブラウン、米アースポリシー研究所長の講演会(京大エネルギー科学研究所主催)が二十二日、京都市左京区の京都大時計台記念館で開かれた。二十一世紀が現代文明崩壊の瀬戸際であることを強調、持続可能な社会に向けた行動を呼び掛けた。ブラウン氏は、人類が破滅しないためには、二十世紀の延長「プランA」ではなく、持続可能な経済に再構築するための「プランB」の道を歩くことが必要であるとし、著書「プランB2.0—エコ・エコノミーをめざして」で、使い捨てでない経済や国際的な財政支援、自然エネルギーへの転換を提案している。

講演でブラウン氏は「京都議定書採択から十年にあたり、京都で講演出来るの

は光栄だが、当時は生来のこととして議論されていた気候変動が、異常気象などで現実になっている」と強調。穀物がバイオ燃料としての消費を拡大している状況に「穀物では、すべての化石燃料の代わりになることはできない。マイカーを持つ八億人と飢餓状態の二十億人を市場まかせに競争させてもいいのか」と問題提起した。さらに、風力発電や充電可能なプラグ式ハイブリッド車などの新技術への期待を述べつつ、「一人一人は何ができるかを考え、政治参加することが必要だ」と訴えた。

京都新聞

2007年5月31日

「黄河に天然ガス基地」

甲賀市水口町ひのきが丘のガス会社「甲賀協同ガス」の敷地内に天然ガス供給基地が完成し三十日、関係者

が竣工式を開いた。LNG(液化天然ガス)を気化して近くの工業団地に供給するほか、甲賀協同ガスを通じて周辺の一一般家庭にも供給する。

供給基地は、岩谷産業(本社・大阪市)と関西電力(本店・大阪市)、甲賀協同ガスの三社が出資して二年前に設立した甲賀エナジーが百キロリットルのLNGタンク三基などを建設した。関西電力の堺LNGセンターから岩谷産業がローリー車でLNGを輸送し、同基地で気化して供給する。

近くには近江水口テクノパークなどの工業団地があり、工業用として年間一萬二千トン直接供給する。また、同市水口町笹が丘の一般家庭や商業施設用として年間三千トンを甲賀協同ガスに卸す。供給先は九月末までに約二千世帯になるという。

本の紹介

最近入手した、
気になる本を
ご紹介します。

BOOKS

庭宇宙 嵯峨野・アイトウ・
幸せのすむ庭



- 著者／森孝之 森小夜子
- 発行所／遊タイム出版
- 価格／1500円＋税
- 内容／京都の西山で、四十年前から森をつくり続ける人がいる。彼が目指したのは「せいたくな庭ではなく自ら出す生ごみや尿尿をすべて土に帰す循環の庭」だった。エコライフを体現する著者のエッセイ集第一弾。

学校図書館メディアと
読書教育



- 編者／塩見昇 北村幸子
- 発行所／教育史料出版会
- 価格／1900円＋税
- 内容／メディアとしての学校図書館の機能、蔵書の選別にまつわる問題や著作権、読書推進活動のレポート等をテーマ別に収録した本書は教科書として広く読まれている。

北九州エコタウンを見
に行く

循環型産業都市モデル

- 著者／高杉晋吾
- 発行所／ダイヤモンド社
- 価格／2800円＋税
- 内容／福岡県北九州市の響灘に面した広大な埋め立て地で、エコタウン計画が稼



働している。視察見学が開始してから一年間で二万人もの人々がこのエコタウンに集ったという。大量生産社会を相対化しつつ、現在も続く壮大な北九州市の試みとそれに携わる人々を描いたルポタージュ。

湖国と文化 120号



- 特集／辻村耕司・琴美
- 発行所／滋賀県文化振興事業団 (財)
- 価格／630円
- 内容／湖国を愛するライター達が綴る、琵琶湖を巡

る人・ものごとの歴史と今。今号の特集は「湖国なんでもNO.1」と題し他県との統計的な比較を試みつつ、琵琶湖を有する滋賀県の価値、唯一の魅力を活かす。

後継学



- 著者／加来耕三
- 発行所／時事通信社
- 価格／1800円＋税
- 内容／副題が「戦国父子に学ぶ」。いかに後継者を育てるか、事業をつなげるか！先代に学ぶ、先代を否定・承継が断絶など、歴史上のさまざまな「後継」のドラマを取り上げ、生き残れる組織・繁栄が持続するための条件を探る。

新・桃太郎物語

つじむりーことみ

むかし むかし あるところにおじいさんとおばあさんがすんでいたそうなの

おじいさんはやまのしばで

ゴルフに

おばあさんは かわの コインランドリーで
せんたくきをつかっておった

そこに おおきなゴミが どんぶらここ
すつこことながれてきおった

おばあさんは みてみぬふりをしておった
ゴミがくいにひつかかりよった

あまりにおおきなゴミなので やくばに
けいたいしようとしたとき

ゴミが わさわさうごくじゃないか
そこに ゴルフかえりの おじいさんが
とおりかかった

「おじいさん ゴミが うごくよ」

「はてめんようなながしてしまえ」と
くいははずしたそのとき

パッカン！

ゴミのプルトップがひらき なかから
おおきな ももたろうがあらわれた

「おじいさん おばあさん ぼくがきたから
もうだいいょうぶ おにがしまは
どごー」

「おにがしま」

「おにがしま」 ネットで けんさくして
みよう」と おじいさん

「きびだんごをつうはんで かつておこう」
とおばあさん

ももたろうは ベットショップで なまかを
さがした

「ミニチュアダックスフンドのいぬ アメリカ
ンシヨートヘアのねこ ください」

カードでしはらいを すますと おもてが
なにやらさわがしい

「やまのさるがじゅうたくちに
しんにゆうしています」

パトカーと マスコミが さわいでいる
ももたろうが とおりかかると

でんちゅうにいたさるが
「おいらも つれづつて」

さるいぬねこ
これで なまかは そろった

ももたろうは りよこうかいしゃにいき
”きびだんご”を たべて おにがしまに

いこう！ ツアーのバスにのりこんだ

ついたところは おにがしまレジャーランド
バーチャルゲームで おにをやっつけていると
「えーん、えーん」と 子どもの なきこえ
「まごになつたの？」

「おかあさんとはぐれたの」
そこに ばついちのおかあさん

かえりの ラブワゴンの なかでももたろう
とおかあさんは こいにおちた

ももたろうは みんなで かわに
かえりました

おじいさんとおばあさんは
「これで ろうごが あんしんじゃ」と
よろこびました

おじいさん おばあさん ももたろう
おかあさん ことども

そして いぬとねこ さるは
おやまにかえりました

ももたろうは かぞくと いっしょに
なかよく くらしましたとき

おしま

みなさんの 新・桃太郎物語を募集して
います。

おしま

「循環型社会を目指す～MOH通信～」の 発行に当たって

代表 森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOHの通信～」を発行する

《 MOH通信概要 》

■目的

- (1) 循環型社会構築に向けた意識改革
- (2) 浪費型社会通念の脱却
- (3) 人生哲学を学ぶ

■事業

- (1) 通信の発行及び出版
- (2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■会費

- (1) 通信購読料 年間3,000円
- (2) 入場料徴収 随時
- (3) その他

■事務局

〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3

循環型社会システム研究所
(MOHの会事務局)

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp

代表:森 建司

担当:辻村 琴美

《次号予告》

2007年11月発行予定

■特集:循環型社会って?

〈九州特集〉

- もったいない食堂
- 循環生活研究所
- 福岡の新エネルギー事情
- プラスチックからエネルギー
- 自然なくらし方

〈どちらを選ぶ?〉

持続可能社会2種

- 高度技術型
- 自然共生型

〈対談〉

持続可能社会の具体像
—阪南大学・大槻学長+森建司

編集後記

editing voice

3周年記念号は、お楽しみいただけましたでしょうか? ヨチヨチ歩きで、スタートした「MOH通信」がここまで継続できたのは、皆様の応援とご助力の賜物と、深く感謝いたしております。いまだ、未熟な通信ではありますが、皆様のご意見を礎とし、歩んで行く所存です。どうか、今後とも暖かく鋭い、ご意見を賜りますようお願い申し上げます。末筆ではありますが、皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

「感謝を込めて」

(代表・森建司、編集長・辻村琴美)

《M・O・H通信》購読受付中!

あなたも「M・O・H通信」を購読しませんか。特典として、M・O・H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

電話番号、fax(あれば)、e-mailアドレス(あれば)、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電

《M・O・H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住所	〒		
	電話	FAX	メールアドレス
あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。			

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M・O・H通信 Vol.17(通巻18号) 2007年8月末日発行

●編集・発行/新江州(株)
循環型社会システム研究所
M・O・H通信編集局

代表 森建司
編集長 つじむら ことみ
編集協力 稲垣重雄

村山 明子
寺川 智美
東良 真紀
取材 細井 美保

辻村 敏之
デザイン 伊達デザイン室
写真 辻村写真事務所

平田尚加
印刷 新江州(株)情報C
ブログ 松崎 和弘

●ご協力

滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
(社)滋賀県社会福祉協議会
高島市

[執筆者懇談会]

内藤 正明
海東 英和
下西 康嗣
末永 國紀
花田 真理子
弘中 史子
今関 信子
山崎 隆
三山 元暎
加藤 みゆき
檀上 俊雄
山口 美知子
堤 幸一
進 ひろこ
中村 誠
奥山 武生
結城 美枝子
松崎 和弘
井上 昌幸
辻村 耕司
佐々木 洋一
(順不同、敬称略)

●支援
新江州(株)

〒526-0111

滋賀県長浜市川道759-3

TEL.0749-72-5277

FAX.0749-72-8681

★ブログ 滋賀・咲くブログ★

<http://moh.shiga-saku.net/>

[購読費振込先]

M・O・Hの会 代表 森建司

●滋賀銀行 長浜支店 普通 136987
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

●長浜信用金庫 本店 普通 0577468
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

●びわこ銀行 長浜支店 普通 721691
(モウノカイ ダイヒョウ モリケンジ)

※記事中の写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。